

バイエリアブランドの創出に関する 検討報告書

平成 22 年 3 月

株式会社 社会構想研究所

目 次

第1章 調査の趣旨	1
1．バイエリアブランド創出に向けた検討調査の趣旨	2
2．地域ブランドづくりの意義	2
(1) 地域ブランドの定義	2
(2) 地域ブランドづくりの役割	4
3．バイエリアブランドとは	5
第2章 芝浦港南地区の地域資源の現状	7
1．地域資源の抽出の考え方と一覧	8
(1) 地域資源抽出の考え方	8
(2) 芝浦港南地区の地域資源一覧表	9
2．各エリアの地域資源	10
第3章 地域ブランドの観点による芝浦港南地区の歴史	33
1．折り重なった歴史がつくる芝浦港南地区	34
(1) 歴史的 위치 づけの必要性	34
(2) 時代区分と各時代の概要	34
2．漁業と海防の地：江戸時代	36
(1) 漁業	36
(2) 魚市場	38
(3) 人情噺「芝浜」	40
(4) お台場	40
3．芝浦海岸リゾート時代	42
(1) 避暑地・潮干狩り・海水浴	42
(2) 料亭街の形成	43
(3) 芝浦花柳界	46
(4) 細川力蔵	48
4．埋立による運河地域の形成	50
(1) 埋立開発直前の状況	50
(2) 埋立開発の進行	50
(3) 運河の形成	52
5．文明開化物語	54
(1) 鉄道のはじまり	54
(2) 銀座のガス灯に灯るガスを供給	54
(3) 日本の機械産業のおこり（芝浦製作所）	55

(4) 日本初の南極探検隊.....	56
(5) 都電の修理工場.....	56
(6) プロ野球の発祥.....	56
(7) 無線放送のはじまり.....	57
(8) 肉食のはじまりと芝浦食肉市場・と場.....	57
(9) その他.....	58
6 . ウォーターフロントの時代.....	59
(1) . ウォーターフロント開発の歴史.....	59
(2) 芝浦港南地区の運河沿い倉庫街のロフト文化.....	60
(3) 文化空間・親水空間としての運河.....	61
 第4章 芝浦港南地区の住民の現状と意識.....	69
1 . 人口動向.....	70
(1) ベイエリアにおける人口増.....	70
(2) サラリーマンの街(昼間人口).....	72
2 . 定住意向とコミュニティ意識.....	75
3 . 地域の景観やシンボルに対する意識.....	77
(1) 景観の特徴.....	77
(2) 地域のシンボル.....	78
 第5章 地域ブランドの創出へ向けて.....	81
1 . ジャンル別の地域資源の現状と今後の可能性.....	82
(1) 自然再生系の地域資源.....	82
(2) グルメ系の地域資源.....	82
(3) 景観・観光系の地域資源.....	83
(4) 発祥地系・産業遺産系の地域資源.....	83
(5) 歴史再発見系の地域資源.....	84
(6) イベント系の地域資源.....	85
2 . 地域ブランドづくりへ向けた地域資源の評価の視点.....	87
(1) 自然再生系の地域資源の評価について.....	87
(2) 景観・観光資源の評価について.....	88
(3) 歴史文化資源・産業資源の評価について.....	88
3 . ベイエリアブランドの創出のために.....	90
 参考資料.....	91

第 1 章 調査の趣旨

1 . バイエリアブランド創出に向けた検討調査の趣旨

調査の趣旨

港区では地域ごとの課題の解決を目指し区役所・支所改革への取り組みとして、平成 18 年に区内 5 地区に総合支所を設置し、平成 21 年には、港区基本計画を改訂する中で、区内各地区の魅力をより高めるための地域事業をもちこんだ「地区版計画書」を策定した。

芝浦港南地区総合支所では、「快適で温かみのある運河と海辺の未来都市・港区バイエリア」を将来像として目指す芝浦港南地区版計画書（計画期間：平成 21 年度～26 年度）を策定した。

この計画書では、平成 21 年度から 23 年度までの 3 カ年について 10 の地域事業を実施するものとしている。そのうちの 1 つが「バイエリアブランドの創出」である。これは「住民どうしの交流や地域とのつながりを深め、温かみのあるまちをつくる」という施策に沿った事業と位置づけられており、事業の趣旨としては「地域への愛着を高めるため、運河、水辺等独自の地域資源を活用するとともに、地区内の大学、企業や住民との連携や協働により、新たなブランドの創出に取り組みます。」（同上計画書）とされている。

本調査報告書は、「バイエリアブランドの創出」3 カ年事業のうち、初年度事業として地域ブランドの調査・研究を行った結果である。

本調査は、新たな地域ブランドとして育てていく可能性のあるものが何なのかを調査・研究したものであり、調査方法として、地域資源の洗い出し、整理の他、関係者へのインタビュー調査、類似事例の調査研究を行った。

調査の方法

本調査は、新たな地域ブランドとして育てていく可能性のあるものが何なのかを調査・研究したものであり、調査方法として、文献調査・現地踏査等を通じた地域資源の洗い出し、整理の他、関係者・関係団体へのインタビュー調査、類似事例の調査研究を行った。

なお、インタビュー調査（ヒアリング調査）を実施した対象団体は以下である。

- ・ 芝浦一丁目商店会
- ・ 芝浦二丁目商店会
- ・ 芝浦商店会
- ・ 品川駅港南商店会
- ・ 運河を美しくする会

2．地域ブランドづくりの意義

(1) 地域ブランドの定義

ブランドとは

「ブランド」の代表的な定義としては「企業が自社の製品等を競争相手の製品等と識別化または差別化するためのネーム、ロゴ、マーク、パッケージデザインなどの標章」(経済産業省平成14年「ブランド価値評価研究会報告書」)をあげることができる。

「ブランド」は自己の財・サービスを他者のものと識別することによって商品価値、企業価値を高めることができるようになったために重視されるようになった。

消費者は、製品の形状、機能、品質、価格を総合評価して購入を決定するが、各製品に対して、その都度評価しなくとも、その製品のブランド、あるいは製品をつくっている企業のブランドを重要な判断基準として購入を決定する方が合理的な場合が増えてきたのである。

「ブランド」には、商品ブランドと企業ブランドの2種がある。自動車企業を例に取れば、カローラは商品ブランド、トヨタは企業ブランドである。各製品(1台1台の自動車)をその商品ブランドで評価する方が合理的なように、各商品ブランドを企業ブランドで評価する方が合理的な場合が増えてきたのである。

そして、文化や経済の発達とともに生まれたこうした状況を意図的にコントロールし、商品価値と企業価値を高めるため企業のブランド戦略が重視されるようになった。

地域ブランドの定義

地域ブランドとは、「桑名の焼き蛤」のように、近年になって企業のブランド戦略が重視されるようになるずっと以前から実際には存在していたものである。芝浦地区の特産として命名された「芝海老」もこれに当たる。

商品ブランド、企業ブランドと同様、地域ブランドについても、意図的な創出等が重視されるようになって注目されるようになった。このため、地域ブランドは、企業の財・サービスにならって次のように定義することができる。

「ある地域が自分の地域の地域資源を用いた特産品等と、他の地域の地域資源を用いた特産品等とを識別化または差別化するための標章」

企業の財・サービスに商品ブランドと企業ブランドがあるように、地域ブランドにも、商品ブランドと地域そのもののブランドとがある。この点に着目した地域ブランドの定義として以下をあげることができる。

「地域ブランドとは、地域の特長を生かした『商品ブランド』と、その地域イメージ

を構成する『地域そのもののブランド』とがある」「この地域の商品と、地域の魅力とが互いに好影響をもたらしながら、よいイメージ・評判を形成している場合を『地域ブランド』と呼ぶ」(独立行政法人中小企業基盤整備機構『地域ブランド・マニュアル』)

ここでの地域の商品ブランドを狭義の地域ブランド、地域そのもののブランドを広義の地域ブランドと呼ぶ場合もある。両者が相乗効果を発揮している場合だけを「地域ブランド」と呼ぶというのはやはり定義を限定しすぎであろう。

本報告書では、地域ブランドにはこうした色々な側面があることを踏まえながら、その都度使い分けながらすべてに対して地域ブランドという用語を使用するものとする。

地域ブランドの3つの側面

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">(1) 地域の特長、地域資源を生かした財・サービス(2) 地域の魅力や地域の良いイメージから地域が多くの人に知られるに至った状態(3) 上記2点がお互いに好影響を与えている状況 |
|--|

(2) 地域ブランドづくりの役割

地域ブランド形成の目的としては、まず、企業のブランド戦略と同様、地域産品の商品価値の向上をあげることができる。「沖縄のゴーヤーなら他地域産より味がよい」という評判を獲得すれば、市場価値が上昇する、というような取り組みがこれにあたる。

次に、ブランド産品にとどまらず地域イメージ自体を上昇させて、その地域の地場産品全体の商品価値を上たり、あるいはその地域への観光入れ込み客が増加するのを期待する戦略があげられる。著名知事を前面に出した宮崎県の取り組みなどが例としてあげられよう。商店街のイメージを向上させて来街者を増加させるような取り組みもこれに当たる。

この2つは商品販売力や経済機能を重視した地域活性化のための地域ブランド戦略である。地域経済が低迷しているような地域、産業機能の再活性化が課題となっている地域ではこうした地域活性化のための地域ブランド戦略が主たる目的とされる。

また、地域ブランド戦略は、地域としての魅力の向上や地域アイデンティティの獲得を目指す場合がある。これらの目的が対外的な観光客誘致のためというより、むしろ地域住民にとっての魅力向上、魅力再発見が目指される場合がこれにあたる。市町村合併に伴い、新しい地域としての一体化を目指す場合(盛岡、塩尻、鳥取など)や管内に存在する影響力の巨大な施設に左右されない地域としての独自性を打ち出す場合(市民の手による浦安の魅力発見を目指した浦安市観光振興計画など)が例としてあげられる。

さらに、この地域としての魅力向上・再発見と重なるが、芝浦港南地区としては、重要な地域ブランド戦略の目的として、コミュニティづくりに果たす役割をあげることができる。地域の課題となっている急増した超高層マンションの住民のコミュニティづくり、及

び旧来からの住民のコミュニティとの強調と融和にとって、自分たちの住んでいる地域の地域資源を発見し、また新しい地域資源を作り出す住民自身による活動が重要、かつ不可欠な契機となるのである。

地域ブランドづくりの役割をまとめると以下のような4点となる。地域によりどの役割に重点を置くかは様々である。芝浦港南地区の地域ブランドづくりにおいては、順番の後ろの方に重点が置かれていると考えられる。

地域ブランドづくりの4つの役割

地域産品の商品価値の向上 地域イメージの向上による地域経済の活性化 地域の魅力の向上と再発見を通じた地域アイデンティティの獲得 コミュニティづくりの契機

3．ベイエリアブランドとは

ベイエリアブランドの意義

ベイエリアという用語は、第3章にもふれるようにウォーターフロントが注目される時代になって東京の湾岸部、特に芝浦港南地区を中心としたエリアを指す言葉として定着しつつある。

ウォーターフロントという言葉は、湾岸の運河と水辺の地域を、従来からの産業・物流地域というより、むしろ、人間や動植物が生活・生息する場所や地域環境として再定義、再整備しようとする流れの中で生まれてきた用語である。

しかも、当初は、レジャー客や昼間人口・オフィス機能の地域として外来者にとっての地域環境が重視されたが、近年は、定住人口が増加し、この地域に暮らす住民の生活の場所としての側面が優先されるに至っている。

従って、ベイエリアブランドの意義としても、商品販売力や経済機能の側面もさることながら、地域の魅力づくり、さらにコミュニティ形成に果たす機能、また地域アイデンティティに寄与する側面が重要になっている。

ベイエリアブランドの地域範囲

ベイエリアブランドは、芝浦港南地区という1つの行政単位に対応した地域ブランドと考えられる。しかし、だからといって、この単位に正確に対応した地域ブランドを創出することが目指されている訳ではない。芝浦港南地区は、芝浦、海岸、港南、台場と複数の地域からなっており、地域住民にとって、芝浦ブランドやお台場ブランドの方が地域ブランドとして愛着がもてるとすれば、その方が望ましく、また品川区、大田区などの隣接する運河地帯と連タンして広域的なベイエリアブランドを打ち出した方が効果的であれば、それでも構わないと考えられる。芝浦港南地区をめぐり、小さな単位の地域ブランド、大きな単位の地域ブランドの集合体として、それらが重なる地域ブランドとして結果としてベイエリアブランドが形成、創出されていくことが目指されているといえよう。

第 2 章 芝浦港南地区の地域資源の現状

1 . 地域資源の抽出の考え方と一覧

(1) 地域資源抽出の考え方

第1章でふれた地域ブランドの目的に適うような芝浦港南地区の地域資源を抽出する。

いずれも地域ブランドづくりの要素として今後活用の可能性があるものを極力多く取り上げたが、レインボーブリッジのようにすでに地域のシンボルとして衆目の一致するところとなっている資源もあれば、細川力蔵事跡のように知る人ぞ知るといった歴史的な資源もある。

地域資源は目に見えるハードの資源もあれば、歴史や地域イベントなどソフトの資源もある。ジャンルとしては、自然資源・環境資源、景観資源・観光資源、文化財、歴史資源、業務・産業施設・建築物に分かれる。また住民生活の場そのものでもある超高層マンションや野生生物の生息地づくりなどの住民活動も取り上げた。もちろん1つの地域資源が複数の性格を合わせ持つ場合がある。次ページの一覧表には、各々の地域資源のジャンルや性格を表示した。



各町会、商店会、自治会のお祭り、イベントについては、長い歴史のものも最近はじまったものもあるが、コミュニティづくりの上から、ひとつひとつが重要であり、大きな意義を有している。しかし、ここでは、特に目立った取り組みや町会・自治会単位を越えるもの、ハードの地域資源と密接に結びついたもの、また歴史的な由緒のあるものだけを地域資源としては取り上げた。

隣接地域の地域資源も一定数取り上げた（次ページ表に隣接地域の印を付加）。取り上げた地域資源は、芝浦港南地区の地域性格と一体のものと考えられるもの（金杉浦、雑魚場跡（本芝公園）など）、当地区を対象範囲とするもの（神社など）、また当地区との広域的連携によって活用が可能なもの（天王洲アイル、台場跡など）である。

(2) 芝浦港南地区の地域資源一覧表

エリア	資 源 名	隣接地域	自然資源 環境資源	景観資源 観光資源	文化財	歴史資源	業務 産業施設 建築物	住民生活 住民活動	地域イベント	ページ
全域	運河、橋りょう 埋立地									10
	東京モノレール羽田線									
	テレビドラマ 映画ロケ地 (フィルムコミッションの可能性)									11
	芝浦港南地区水辺フェスタ(地域対抗ボートレース大会)									
芝浦・ 海岸 エリア	夏みかん自生地、マーマレードづくり									12
	カルガモプロジェクト									
	日の出棧橋									13
	南極探検隊記念碑 (埠頭公園)									
	少年野球場、日本プロ野球発祥地 (埠頭公園)									14
	東芝本社 (芝浦製作所の歴史)									
	重箱堀 (芝浦海岸リゾート時代の中心だった入間川河口跡)									15
	木村屋									
	細川力蔵事跡									16
	協働会館 (旧芝浦見番)									
	ジュリアナ東京跡									17
	新芝運河沿緑地のガス灯									
	鹿島橋									18
	放送記念碑									
	新芝運河「芝浦 CANAL CAFE」日本初モバイル「コミュニティカフェ」									19
	芝浦運河まつり									
	芝浦アイランド									20
	船路橋									
	倉庫街、ホイストクレーン									21
	レインボーブリッジ、ループ									
	芝浦舁船溜									22
	芝海老・芝煮									
	ガス創業記念碑 (東京ガス本社脇)									23
	金杉浦									
	雑魚場跡 (本芝公園)									24
	御穂鹿嶋神社									
	御田八幡神社									25
港南 エリア	JR品川駅港南口、路地裏									
	東京都中央卸売市場食肉市場・芝浦ど場、東京食肉市場まつり									26
	東京都下水道局芝浦水再生センター、芝浦中央公園									
	大オフィス街									27
	第一芝浦丸									
	東京海洋大学 (旧東京水産大学) 海鷹祭、さかなクン									28
	ワールドシティータワーズ									
	シーフォートスクエア (第4台場跡の石垣)									29
	天王洲アイル、天王洲 TY ハーバー									
台場 エリア	お台場海浜公園									30
	品川台場 (第3台場 = 台場公園、第6台場)									
	海苔づくり									31
	鳥の島 (東京港旧防波堤)									32
	フジテレビ・商業施設・ホテル群									

2 . 各エリアの地域資源

<p>運河、橋りょう、埋立地</p> <p>【参照箇所】 p.50 ~ 53</p>	<p>埋立地に形成された運河網と数多くの橋が芝浦港南地区の最大の地域的特色であり、これらとモノレールや倉庫やオフィスビル、そして最近では超高層マンションやレインボーブリッジとお台場エリアが織りなすコントラストが当地区ならではの湾岸ベイエリアの景観をつくりだしている。これらの全体が大きな地域資源といえる。</p> 
<p>東京モノレール羽田線</p> <p>【参照箇所】 p.52</p>	<p>芝浦港南地区を歩いていて必ず出会うのが、線路沿い、運河の上、道路や橋の上、高層マンションの脇と当地区全体を縫うように通っている東京モノレールである。当地区の住民は別のことに興味を向けていてもふと気づくと頭上をモノレールが通り過ぎたという経験を一にしている。地区内に駅はないので交通手段としては意味がないが、運河地域の景観要素であるとともに住民同士の共有感覚及びモノレールからの車窓体験との入れ違い感覚自体が地域資源ともいえよう。</p> 

<p>テレビドラマ・映画ロケ地(フィルムコミッションの可能性)</p>	<p>芝浦港南地区の運河景観やレインボーブリッジ、お台場の水辺空間は朝昼夜に変化するその独特の魅力から、都心に近いこともあって絶好の映像背景として数々のテレビドラマや映画のロケ地、写真撮影地に利用されている。当地区の景観資源はフィルムコミッションの可能性を高めているが、東京都も産業労働局観光部振興課に「東京ロケーションボックス」においてロケ地の紹介、施設管理者との撮影許可に関する調整などを行っている。</p>  
<p>芝浦港南地区水辺フェスタ(地域対抗ボートレース大会)</p>	<p>芝浦港南地区全体のイベントとしては芝浦港南地区総合支所の後押しのもと地域の住民・団体が実行委員会に参加し、水辺フェスタ～地域対抗ボートレース大会～が開催されている(2009年9月に第3回開催)。ここで地域とは、芝浦海岸、港南、台場の3つである。開催場所は毎回地区内を移る。夏祭り等は基本的に町会、自治会単位であり、神社のお祭りも氏子地域が2つの神社に分けられているので地区全体のお祭りとしてこのイベントの意義は大きい。</p>
<p>【参照箇所】 p.74～76</p>	

夏みかん自生地、マーマレードづくり



【参照箇所】

p.64

芝浦・海岸の運河沿い（公共用地及び民間所有地）に夏みかんが自生している。これを利用し、リーブラ（港区立男女平等参画センター）や障害保健福祉センターで芝浦・海岸の町会、商店会、障害者団体などによるマーマレードづくりが行われている。これを地域ブランドにしようとする試みもはじまっている。すでに、芝浦 2 丁目の洋菓子店がこのマーマレードをつかった芝浦ブランドのお菓子を製造販売するというような動きも出ている。



カルガモプロジェクト



【参照箇所】

p.64 ~ 65

運河にカルガモの営巣所をつくろうと港区芝浦港南地区総合支所の区民参画組織「港区ベイエリア・パワーアッププロジェクト」の取組として発足し、2008 年 5 月、カルガモの赤ちゃんが誕生した。さらに別の野鳥が呼べないか検討を開始している。場所は芝浦アイランド沿いの芝浦西運河渚橋付近である。人工いかだで魚や水生生物のすみづくりをしようとする取り組みも動き出している。



日の出棧橋



【参照箇所】

p.51

芝浦港南地区の埋立開発で最初に完成した港湾施設である。関東大震災（1923年）の当時、続々と集まる救援物資は、危険をおかして芝浦海岸に陸揚げされた。この教訓で、応急的に棧橋を急造し当時の町名にちなんで日の出棧橋と称したという。現在は、水上バスの乗り場（浅草と結ぶ隅田川ライン、晴海・お台場海浜公園と結ぶお台場ライン、東京ビッグサイト・パレットタウンと結ぶ東京ビッグサイト・パレットタウンライン）があるほか、レストラン・クルーズなどのシンフォニーの発着所となっている。



南極探検隊記念碑（埠頭公園）



【参照箇所】

p.56

1910（明治34）年に白瀬中尉ら我が国最初の南極探検隊（27名）が開南丸（木造204トン）に乗り出航した場所。海岸3丁目の埠頭公園には、1936（昭和11）年にはこの壮挙を記念した碑が建てられ、同公園内には開南丸を模した木製遊具がつくられ子どもの遊び場となっている。ペンギン像の破損が進んだが1982（昭和57）年の修理によって甦った。



少年野球場、日本プロ野球発祥地（埠頭公園）



【参照箇所】

p.56

日本初のプロ野球球団は1920（大正9）年12月、芝浦埋立地にあった球場を本拠としてスタートした「芝浦野球協会」である。解散後、一時関西の実業家に拾われて宝塚協会として再スタートしたが、やがて解散。そして、1934（昭和9）年12月大日本東京野球クラブ（後の読売巨人軍）が誕生するまでプロ野球球団はなかった。埠頭公園には、少年野球場があるが、ここが日本プロ野球発祥の地とされている。



東芝本社（芝浦製作所の歴史）



【参照箇所】

p.55

日本の機械産業の発祥の1つは田中久重が1875（明治8年）年に東京・銀座に設立した電信機関係の製作所・田中製造所である。1882（明治15）年にはこれを引き継ぎ芝浦に「田中製造所」が設立され、その後「芝浦製作所」と改称された。1939年（昭和14年）この芝浦製作所と東京電気が合併し東京芝浦電気（東芝）として発足、やがて手狭となったため川崎へ移転したが、1984（昭和59）年、東芝ビルが建てられ東芝本社が発祥の地に立地することとなった。本地域には機械企業が多く創業しており、それらを代表する施設である。



重箱堀(芝浦海岸リゾート時代の中心だった入間川河口跡)



【参照箇所】

p.43 ~ 46

参考資料：
港区教育委員会 (2006)

1913 (大正 2) 年に芝浦運河の船溜として整備された石積護岸である。平面形状が重箱のように四角いことから「重箱堀」と称された。現在でもシーバンス側を中心として当時の石積を残している。港湾地区特有の都市景観を伝える歴史的建造物である。同時にこの場所は芝浦海岸リゾート時代の中心だった入間川河口跡に当たっており、現在、その面影は残っていないが、河口の左右に見晴らしのよい料亭が立ち並び往時の繁栄を知る者にとっては忘れられない場所でもある。



木村屋



参考資料：
港区教育委員会 (2006)

芝浦一丁目の交差点の角地にある木造 3 階の店舗併用住宅であり、外観にはモルタルによって和洋折衷の華やかな彫刻が施されている。1916 (大正 5) 年にパン屋として建てられたが、関東大震災と戦災を潜り抜けて現在に至っている。モルタルによる外観は 1930 (昭和 5) 年頃のものといわれる。ドラマ「ラブジェネレーション」でキムタクの家として使用された。



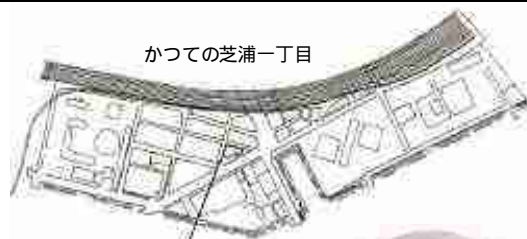
細川力蔵事跡



【参照箇所】

p.48~49

芝浦港南地区で明治から大正・昭和にかけ活躍し多くの足跡を残した歴史上の人物として細川力蔵の名を落とすことができない。石川県出身の細川は芝浦の地で湯屋・料理店（芝浦雅叙園）を営み、埋立地の不動産取引で財をなすとともに、映画「千と千尋の神隠し」のモデルともなった目黒雅叙園を設立、回る中華料理ターン



細川 力蔵

テーブル、価格入りのメニュー、総合結婚式場などを発明するなどサービス産業の大衆化に寄与した。芝浦一丁目初代町会長をつとめるなど本地区コミュニティの創成にも関わり、三業組合長時代に芝浦花街の拠点となる見番（協働会館）の建物を寄贈したといわれる。

協働会館（旧芝浦見番）



【参照箇所】

p.46 ~ 47

都内最後の木造見番。唐破風玄関を有する木造 2 階建ての近代和風建築であり、芝浦花柳界の見番（三業組合事務所）として建設された。1936（昭和 11）年に目黒雅叙園でも活躍した大工棟梁酒井久五郎の建築。1 階は芸妓取り次ぎのための事務室、2 階に桧板敷の舞台を有する百畳敷演舞室及び控室を有する。戦争中に東京都に売却され、戦後は周囲の待合建築とともに港湾労働者施設（東京都港湾局第二宿泊所第五寮）として転用され本建物は「協働会館」と称され、2 階の舞台を貸し出すなど活用が図られたが 2000（平成 12）年に閉鎖された。取り壊すこととなったが、保存運動が起こり、現在は都から港区に移譲され、港区の有形文化財に指定されている。かつて栄えた芝浦花柳界の跡をとどめるシンボルの存在である。



ジュリアナ東京跡



【参照箇所】

p.60 ~ 61

1990年代はじめ、お立ち台で踊るボディコンギャルによって一世を風靡したディスコ「ジュリアナ東京」の跡は現在はスポーツショップ（芝浦一丁目）となっている。当時の騒がれ方は湾岸の倉庫街に花咲いたロフト文化の中では異色だったといわれるが、最寄り駅であった田町駅芝浦口が多くの派手な衣装のギャル達でにぎわった一時期はいまでも語り草となっている。芝浦港南地区の埋立開発の前と後とにそれぞれ、一定の時期、東京人の歓楽の街となった歴史には何か因縁めいたものを感じさせる。



新芝運河沿緑地のガス灯



【参照箇所】

p.23 「ガス創業記念碑」、p.54 ~ 55

1991（平成3）年に東京ガス敷地沿いの新芝運河沿緑地の遊歩道に10基のガス灯が灯った。文明開化のシンボルともいえるべき銀座のガス灯へガス供給を行った事跡を記念するものとなっている。当初のガス工場は本地区隣接地の「ガス創業記念碑」の場所であるが、この場所はこの工場と競争し、後に東京ガスと合併した千代田瓦斯の工場の脇に位置し、現緑地はかつてガス生産の原料であった石炭の積み卸しに利用されていた関係でガス灯が設置されたものである。



鹿島橋



参考資料：
港区教育委員会（2006）

芝浦港南地区は全体が運河地域であり、数多くの橋りょうが架かっているが、歴史的建造物としての価値がある鹿島橋を取り上げる。1930（昭和5）年に竣工した新芝北運河に架けられた鋼桁橋であり、アールデコ風の親柱（写真）が残されている。運河の十字路に当たるこの場所には裏手に屋形船の船溜、また隣接して香取橋、霞橋が架かり、モノレールが上空を横切る不思議な空間となっている。



放送記念碑



【参照箇所】

p.57

無線放送発祥の地である。ここに1924（大正13）年11月29日社団法人東京放送局が設立され、無線放送の試験放送が翌1925（大正14）年3月1日に日本で初めて成功した。



新芝運河「芝浦 CANAL CAFE」日本初モバイル「コミュニティカフェ」



【参照箇所】

p.74

芝浦地域のコミュニティ活性化と商店街振興を図るため、芝浦商店会が5年越しで計画・実現した取り組み。日本発！モバイル（移動型）コミュニティスポットとして軽自動車を改造した CANAL CAFE 号2台で、各種おつまみやスナック、ビール、ソフトドリンクなどを提供。場所は新芝運河沿い新芝橋のたもと。2009年6月14日オープン。冬の間は休業。2010年は3月オープン予定



芝浦運河まつり



【参照箇所】

p.74

芝浦商店会が音頭をとり、芝浦・海岸各町会・商店会が協力して、「運河を使った街おこし」で街を元気にしようと田町駅東口駅前広場整備の完成を記念し2005年に始めたおまつり（芝浦運河まつり実行委員会主催）。会場は新芝橋を中心としたなぎさ通り、新芝運河沿い遊歩道で、お店、フリーマーケット、運河巡り、運河クルーズ、町会対抗ボートレースなどのイベントが催される。他地域の運河まつり等との連携も課題とされる。



芝浦アイランド



【参照箇所】

p.72

4 棟の超高層マンションからなる分譲・賃貸合わせ約 3,800 戸のグレードの高い共同住宅群。以前、都電の修理工場などがあった四方を運河で囲まれた地区で、都市基盤整備公団（現・都市再生機構）と三井不動産が中心となって進めた街区開発の結果生まれた。2008（平成 20）年 9 月全体竣工。島を一周する遊歩道のほか、お台場、豊洲と結ぶ水上バス「アーバンランチ」の発着所がある。芝浦港南地区の雰囲気ガラリと変えた象徴的な存在である。



船路橋



【参照箇所】

p.56

芝浦 6 号埋立地（現芝浦アイランド）には、1920（大正 9）年に東京市電気局（交通局の前身）工場が設置された。島の北半分は都電の車輛工場となり、電車両の新造・改良ならびに修理はもちろん、さらには防音防振対



策や制動器の改良などの技術研究を行う施設として、たくさんの都電車両を生み出した。この島への都電の入出庫に使う橋が船路橋で、1953（昭和 28）年に架設された。都電が廃止になってからは、車輛工場ではなく都営バスの修理工場として使われ、船路橋に埋められたレールに都電が通ることはなくなった。芝浦アイランドの整備に伴い 2007 年 5 月に少しずれた同じ場所に掛け替えられた新しい船路橋の中央にはレールを模した模様が引かれ、アイランド側には橋の由来を知らせる看板が立っている。

倉庫街、ホイストクレーン



【参照箇所】

p.22 「芝浦船溜」

p.27 「第一芝浦丸」

運河沿いには、減ったとは言え、なお、倉庫群が存在、機能している。しかし、輸送は陸上輸送にシフトしたため、以前のような運河の運搬船からの荷物の積み卸しの風景は見られなくなった。下の写真には、運搬船との荷役で使用されたホイストクレーンが撤去されず残されている様子がうかがえる。2009 年 12 月に放映されたNHKブラタモリではこのクレーンが特別に動かされた。運河との関わりで倉庫街や石炭置き場、バージ船、タグボートなどを産業遺跡として捉え直す時期もいずれ来ると考えられる。



レインボーブリッジ、ループ



【参照箇所】

p.67 ~ 68

p.78 ~ 79

1993（平成 5）年に開通したレインボーブリッジ（東京港連絡橋）は長さ 798m、海面から橋までの高さ 50m 以上、東日本では最長の吊り橋。ループ部の美しい曲線はほぼ正円（直径約 270m）を描いている。橋は二重構造になっており、上層部が首都高速道路、下層部は臨港道路と新交通システム「ゆりかもめ」が通っている。下層部には、1,700m の遊歩道「レインボープロムナード」が橋の両側（ノースが晴海側、サウスがお台場側）に設けられており、東京湾の景観を楽しみながら、ゆっくりと散策することができる（無料）。橋と湾岸の景観は芝浦港南地区だけでなく港区全体の新たなシンボルの存在となっている。



芝浦船溜（はしけ）溜



【参照箇所】

p.21「倉庫街、ホイストクレーン」p.27「第一芝浦丸」、p.51

芝浦海岸西南 8 号埋立地の南面海上にくの字型の防波堤で囲んで安全な避難場所としてつくられた船溜まり（1933（昭和 8）年竣工）。東京都東京港管理事務所、東京はしけ運送事業協同組合が管理している。現代湾岸のシンボルともいえるレインボブリッジのループの直下にあり、戦後の経済成長を底から支えていた湾岸埋立と運河水運の担い手である土石運搬船・バージ船とのコントラストが印象的である。



芝海老・芝煮



芝海老（シバエビ）の和名は、かつて芝浦の産物として有名だったことに由来する（小学館「日本語源大辞典」2005 年）。現在漁獲されていないので意識にのぼらないが、芝浦港南地区における地域ブランドの元祖ともいえるべき存在である。地区内で養殖できれば「元祖芝海老」を名乗ることは可能であり、潜在的な地域資源といえる。なお、歌川広重画の広重魚づくし「伊勢海老・芝海老」（下の画）には次ぎの歌が記されている。「汐ぬるみにえたつやうな夏の日にわきて出たる芝浦の蝦（えび）。同様に、小魚などをごく薄い味で煮て、煮汁と一緒に食する料理法として「芝煮」という言葉もある（広辞苑など）。



【参照箇所】

p.36 ~ 37

【隣接地】

ガス創業記念碑(東京ガス本社脇)



【参照箇所】

p.17 (ガス灯)

p.54 ~ 55

東京ガス本社ビルに隣接する浜崎公園内にある。後に東京ガス株式会社に受け継がれたが、当初は官営事業として 1873 (明治 6) 年に工場が建設され、翌年 12 月にここから供給されるガスにより、銀座の街にガス灯が点火された。敷地は江戸時代に大名屋敷であり、本社ビル建設の際に掘り出された石垣も復元されている。



【隣接地】

金杉浦



【参照箇所】

p.36 ~ 39

芝浦と金杉浦は江戸時代から漁師町として栄え、将軍家に魚を献上する「御菜が浦」として「江戸前」の中でも重要な場所であった。昭和 30 年代までは「遊船」も副業として盛ん。投網を乗船客に見せ、船上で天ぷら、焼き魚、酢味噌などにして楽しませたもの。現在も古川河口の金杉橋付近の屋形船、船宿が往時をしのばせる。金杉浦だけでなく地区内にも各所にこうした船溜が残っている。



<p>【隣接地】 雑魚場跡（本芝公園）</p>  <p>【参照箇所】 p.37～38</p>	<p>昭和 30 年代の末まで海苔採取など漁業の拠点で海苔舟が出入り。当時は東京港口のガード付近まで海苔が干してあった。江戸時代魚問屋があり、江戸前の魚を供給。天保年間には金杉浦に 21 軒、本芝に 23 軒の問屋があったが、幕末から衰退、やがて海苔の養殖業へとかわった。1968（昭和 43）年に埋め立てられ区立本芝公園となった。人情話「芝浜」の場所ともいわれる。</p> <p>1962（昭和 37）年冬まで残っていたのり干し場</p>  
<p>【隣接地】 御穂鹿嶋神社 （芝浦 1・2 二丁目、海岸 2・3 丁目などが氏子地域）</p>  	<p>御穂神社（文明 11 年（1479 年）創建）と鹿嶋神社（寛永年間（1624 年～1644 年）創建）は本芝両社と称せられ、両社大祭は同日に行われ広く氏子の崇敬を集めていた。御穂神社は駿河の三保の漁師達に移り住んだときに氏神三保神社の分霊を移し祭ったことに由来。かつて芝浦の海岸にあった鹿嶋神社は常陸の鹿嶋大神宮の小祠が漂着したことに由来。両社の祭礼は地元花柳界の芸者衆も総出で盛大に行われていた。1982（昭和 57）年に 30 年ぶりに復活、その後 1988（昭和 63）年を最後に町会による祭礼は休止していた。再開発事業にともない 2004 年御穂神社に両社の合祀が実現、その後 2006 年鹿嶋神社があった本芝公園脇に御穂鹿嶋神社としての新社殿が建立され遷座した。2008 年祭礼より隔年に氏子各町会持ち回りで宮神輿渡御を賑やかに行うこととなった。</p> 

<p>【隣接地】</p> <p>御田八幡神社 (三田・高輪の一部、及び芝浦3・4丁目、港南地区の全域が氏子地域)</p> 	<p>和銅2年(709)創建後寛弘8年(1011)三田の地に遷座、江戸開幕のみぎり、僧快尊が元和5年(1619)現社地をトして造営を開始し寛永五年(1628)に遷座した。昭和20(1945)年5月に、米軍による東京大空襲により、江戸時代の社殿を焼失。昭和29(1954)年に再建された。平成21(2009)年に千三百年奉祝大祭が催され、8月2日には芝浦港南地区の氏子地域各町会による神輿渡御巡行が行われた。</p> 
<p>J R品川駅港南口、路地裏</p>  <p>【参照箇所】 p.54</p>	<p>日本における鉄道は1872年(明治5年)9月に新橋・横浜間に開通したが、芝浦の海中に堤をつくって線路をつくる工事に時間がかかったため当初は品川・横浜間で仮開業した(同年5月)。従って品川駅が鉄道発祥の地といえないこともない。埋立開発の進行とともに品川駅の港南口は新しい業務・オフィス機能の立地が進み、サラリーマンの街として大発展した。再開発事業でつくられたふれあい広場ではクラシックカーのイベントが定期的に行われるなどにぎわいの中心となっている。路地裏には昭和40年代から変わらぬレトロな居酒屋横町も残っている。</p>  

東京都中央卸売市場食肉市場・芝浦と場、東京食肉市場まつり



【参照箇所】

p.57

品川駅港南口に立地する食肉市場・芝浦と場（敷地面積 6.4ha）は都内に散在すると場をあわせ 1936（昭和 11）年に建設された日本でも有数の規模を持つ食肉の加工・流通施設である。毎年催されている「東京食肉市場まつり」（2009 年は 25 回目）には大変な集客があり、地域資源としての可能性は大きい。



大オフィス街



【参照箇所】

p.72～73

品川駅港南口からつづく港南 1～2 丁目は、ソニー、NTT、コクヨ等の大企業が立地し、都内でも有数の一大オフィス街となっている。昼ともなれば昼食向けの屋台カーが沿道に立ち並ぶ。こうしたオフィス街の法人区民との連携可能性も地域づくりの大きな資源といってよい。コクヨグループでは、外で仕事をするガーデンオフィスやエレベーターを使わず階段を使うなどの社員へのポイント付与など環境に配慮した企業行動を進めており、こうした企業の取り組みがエコの街づくりに広がれば地域ブランドにつながる可能性もある。



東京都下水道局芝浦水再生センター、芝浦中央公園



【参照箇所】

p.58

「芝浦水再生センター」(敷地面積 18ha) は、1931 (昭和 6) 年に稼動した東京で 3 番目に古い下水処理場である。芝浦中央公園は、この施設の一部を鉄筋コンクリートで蓋をしてつくられた人工地盤の公園であり、種々の植物が見事な花を咲かせ、ドッグランの場所ともなっている。運河の水質を下水処理場の処理水が左右している点からも芝浦港南地区とのつながりは大きい。隣接するオフィス街との関わりで防災上の役割も大きい。



第一芝浦丸



【参照箇所】

p.21「倉庫街、ホイストクレーン」p.22「芝浦船溜り」p.53

港区の湾岸通り沿の東京港建設事務所敷地内に陸上固定してある「第一芝浦丸」は、港湾の浚渫を行った土砂を運ぶ土運搬船 (バース船) を曳いた曳船 (タグボート)。1926 (大正 15) 年に完成した蒸気船であり、74 年に廃船となるまで 50 年近く現役で活躍した。本地区運河地域の産業遺跡ともいえるべきものである。



東京海洋大学(旧東京水産大学)、海鷹祭、さかなクン



【参照箇所】

p.58

東京海洋大学(旧東京水産大学)品川キャンパスは1954～57年に港区港南地区へ移転の結果生まれた。同大大学祭の「海鷹祭」は同品川キャンパスで毎年11月の3日間を利用して開催されており、マグロの解体ショーが見所である他、水産業界で活躍するOBから寄付される各地の魚介類の激安即売会もあり、近隣住民にとっても見逃せないイベントになっている。キャンパス内には3本マストバーク帆船(研究練習船)「雲鷹丸」(うんようまる)や世界最大級のセミクジラ骨格標本のある「鯨ギャラリー」といった見所もある。また「さかなクン」が同大客員准教授に就任しており、地域の小学校への出張授業なども行われている。



ワールドシティータワーズ





【参照箇所】

p.72

2007(平成19)年2月に全体が竣工した総戸数2,090戸の超高層マンションであり、日本最大の分譲マンションとして目立っている。芝浦アイランドと並んで新時代の芝浦港南地区を代表する建物の1つとなっている。



<p>【隣接地】 天王洲アイランド、天王洲TYハーバー</p>  <p>【参照箇所】 p.66</p>	<p>天王洲アイランドは四方を運河に囲われた島であり、隣接する品川区に属する。以前は倉庫地帯であったが、1985（昭和 60）年に商業地域に用途変更されオフィス街に生まれ変わった。1992（平成 4）年には東京モノレール羽田線の駅が開業。水際のボードウォークや水上ラウンジが安らぎの空間を作っている。水上レストランである天王洲 TY ハーバーは東京都の運河ルネサンス計画の中で特例的な水域占用許可の規制緩和の対象となり設置されたものである。運河クルーズによるアプローチへの取り組みや運河をはさんで隣接していることから芝浦港南地区との連携が期待される。</p> 
<p>【隣接地】 シーフォートスクエア（第 4 台場跡の石垣）</p>  <p>【参照箇所】 p.41</p>	<p>シーフォートスクエアは天王洲アイランドに立地する 30 軒以上のショップとレストランが集まる複合商業施設であるが、品川台場の第 4 台場の埋設場所に当たっており、側面の石垣が台場の石垣を再使用している点で台場エリアの 2 つの台場跡と並んで歴史資源としても活用が期待される。</p>  <p>NHK ブラタモリ（2009.12.10 放映）</p> 

<p>お台場海浜公園</p>  <p>【参照箇所】 p.59,p.62～63</p>	<p>1975(昭和50)年に開園した面積51.1ha(うち水域43.5ha、陸域7.6ha)の都立の海浜公園であり、台場エリアのシンボリック存在。東京でウィンドサーフィンができる場所として1980年代前半から注目を浴びた。現在では海水浴の可能性や野鳥や魚介類の生息場所としての役割も期待されている。なお、ここでは江戸時代に大江戸夏祭りの花形として盛大を極めたという品川の荏原神社例祭・かっぱ祭りの御神面神輿海中渡御が行われている。室町時代に御神面が見出された場所であるため神輿が遠浅の砂浜に入っていた品川沖の天王洲が埋立で失われたため、海中渡御が舞台を移されて実施されているのである。人工的に創出された海浜でありながら、身近に自然を感じさせる貴重な場所として様々な役割が今後も期待されよう。</p> 
<p>品川台場(第3台場=台場公園、第6台場)</p>  <p>【参照箇所】 p.40～42</p>	<p>幕末に外国船打ち払いのための砲台施設としてつくられた品川台場のうち第3台場は原状保存のため海上に残され(非公開)、第6台場は、お台場海浜公園に接続する史蹟公園(公開)として残されている。地域名の由来でもあることから、台場エリアのシンボリック存在になっている。その他の台場は埋設ないし撤去されており、現存のものとしての価値は高い。なお、第6台場は昭和初期には公園として利用がはじまり海水浴の場でもあった。「お台場に売店ありてラムネかな」(久保田万太郎)という句も残っている。</p> <div style="display: flex; align-items: center;"> <div style="margin-right: 10px;"> <p>(上) 第3台場</p> <p>(下) 第6台場</p> </div>  </div>

海苔づくり



【参照箇所】

p.37

参考資料：

べいあっぷ（平成 21 年
3 月号）

港陽小学校では環境教育の一環としてお台場海浜公園を利用し、芝浦港南地区の海辺でさかんだった海苔養殖にならった海苔づくりに取り組んでいる。2005（平成 17）年度には台場の海に 43 年ぶりに海苔づくりが復活し、以来毎年継続し、2008 年には生徒・保護者ばかりでなく地域住民も一緒に取り組んだ。作業は本職の漁師や NPO の方のサポートで行われ、育った海苔は日本食品分析センターで検査し、安全であることが確認されているという。



鳥の島（東京港旧防波堤）



第 3 台場から南西方面に伸びる細長い緑の島（延長 2.4 km、幅 36m、高さ 4.5m）。東京港の海水面を保ち、船舶の荷役作業を安全に行うための仮防波堤として、東京港築港の一環で造られた。1931（昭和 6）年竣工。構造は土堤であり側面が石張りされている。土堤の防波堤は珍しく、比較的波が荒くないために実現された。台場エリアの景観要素となっているほか、野鳥など野生生物の生息場所としての役割が期待されている。

参考資料：

港区教育委員会（2006）



フジテレビ・商業施設・
ホテル群



【参照箇所】

p.67

1997（平成 9）年、フジテレビがお台場へ新宿区河田町より移転、また同局のテレビドラマ「踊る大捜査線」などによりお台場の知名度が上がり、りんかい線の全線開通（2002 年）もあって、居住施設とともに商業施設・ホテルやランドマークも続々と誕生、東京の新名所となっている。なお自由の女神像は 1998 年「日本におけるフランス年」にパリ市から貸し出されたもののレプリカ。



第3章 地域ブランドの観点による芝浦港南地区の歴史

1．折り重なった歴史がつくる芝浦港南地区

(1) 歴史的位置づけの必要性

江戸時代の漁業に淵源を持つ屋形船、そのすぐ近くに明治時代の芝浦海岸リゾートの名残というべき協働会館（旧見番）があり、またその脇には明治末から着々と進められた埋立開発によってつくられた運河網がめぐらされ、運河網のあちこちにはガス供給、機械工場、プロ野球など文明開化と近代文明の発祥の地が残り、それら全体を包むように現代を象徴するウォーターフロントのオフィス街や超高層マンション、時代を切り拓いてきたモノレールやレインボーブリッジなどの交通網が世界に比類のないベイエリアの景観を形成している。

前章で取り上げた種々の地域資源は、それぞれ、芝浦港南地区に展開されてきた歴史の各時代に源をもち、現在地にそれぞれの時代の特徴を残している。

それぞれの地域資源の真価を理解するためには、一見、脈絡のないまま隣り合わせに存在しているように見える各資源を芝浦港南地区の大括りの歴史の中に位置づける必要がある。また、地域ブランドの展開に当たっては、芝浦港南地区のこれまでの歴史に自然と気づかされるような仕掛けや相互の関連づけを施すことによって膨らみのあるものとし、当地区の住民が地域アイデンティティを感じながら生活するという地域ブランドづくりの大きな目標に一步でも近づく手だてとしていくことが重要である。このためにも、各地域資源を芝浦港南地区の歴史の中で理解することが是非必要である。

(2) 時代区分と各時代の概要

本報告書は歴史書ではないので、芝浦港南地区の地域資源を整理・把握するという観点から時代区分を行う。芝浦港南地区の地域資源は、大きく5つの時代に対応するものと整理することが可能である。

江戸時代から芝浦は江戸の名所となっていた。その際の基本的な地域としての性格は漁業地域である。魚市場もあり、その名残が雑魚場（現本芝公園）であり、江戸時代に成立し現在まで有名な人情話として受け継がれている落語「芝浜」も魚屋が主人公となっている。現在も残る屋形船は元漁業者が経営している。江戸末期、ペリーの黒船に対してつくられた海防施設である台場も本地区の大きな歴史資源である。

横浜港との競合もあり港湾整備と埋立開発が本格化するのは明治末になってからである。埋立開発以前、芝浦には、風光明媚な海岸リゾートとして旅館が立ち並び、東京人の行楽地の「粋な街」として栄えていた。そのため花柳界が発達し、埋立開発が本格化して海岸リゾートが衰退に向かった後も関東大震災で避難してきた他の花街の業者・芸者を加えて、かなり後まで花街としての繁栄は続いた。旧見番の協働会館はこの時代の名残である。

芝浦港南地区の歴史の時代区分と対応する地域資源

各時代の特徴	対応する地域資源
江戸時代 漁業 海防	雑魚場(ざこば)、芝エビ、海苔養殖、落語「芝浜」、屋形船 台場、台場公園
芝浦海岸リゾート (明治の行楽地)	江戸時代避暑地の前史 潮干狩り名所 旅館街(温泉旅館、割烹、料理屋、鰻屋など) 芝浦花柳界、協働会館 お台場海水浴場
近代の埋立開発 (明治末～戦後)	日の出棧橋、埠頭公園、運河網(橋のある街) 石炭置き場、ホイストクレーンとバージ船 東京モノレール羽田線 お台場とレインボーブリッジ、ゆりかもめ
文明開化の発祥地 (明治・大正・昭和)	日本最初の鉄道、品川・横浜間開通(1872) 銀座ガス灯へ都市ガス供給(1874) 東京ガス 近代機械工業 芝浦製作所(1882)(東京電気と合併し東芝) 南極探検隊(1910) 都電修理工場(1920) 芝浦アイランド(船路橋) プロ野球のはじまり(1920)(埠頭公園) 無線放送のはじまり(1925) 肉食のはじまり 芝浦と場(1936) 東京食肉市場
ウォーターフロン トの時代 (1980年代以降)	ディスコ、ライブハウス(倉庫街のロフト文化) カルガモプロジェクト テレビドラマ・映画ロケ地 超高層マンション街 芝浦アイランド、ワールドシティタワーなど

近代の本格的な埋立開発と港湾整備が明治末からはじまり、戦後まで続いた。これにより現在の運河網と運河で隔てられた街区をつなぐ橋りょう群が形成された。まちは土木開発、港湾荷役の世界が支配的な「ダサイ街」となった。

明治の海岸リゾート時代や明治末以降の埋立開発と時代的にはダブっているが、芝浦港南地区には、文明開化と近代開発のはじまりと位置づけられるようなものが数多く発祥している。鉄道、ガス事業、機械工業、南極探検隊、都電修理工場、プロ野球、無線放送、食肉市場などである。これらの発祥地は碑や後継施設として残っている場合が多い。

1980年代以降は、運河・湾岸について当初の目的とは異なる多様な形の活用が目指されるウォーターフロントの時代となった。倉庫街を若者のロフト文化発信地として活用したり、水辺・高層建築の景観をロケ地として活用したり、人間や生き物の生活環境として自然を取り戻したりすることが目指されるようになった。そして、究極的には、人間の定住空間として超高層マンション群が建設されるようになった。まちは「ナウい街」「おしゃれな街」に生まれ変わりつつある。芝浦港南地区の人口急増に結びついた最後の段階は、本章ではなく次章に記述することとする。

2．漁業と海防の地：江戸時代

(1) 漁業

漁村としての芝浦

芝浦の地は、江戸時代以前から、製塩、漁業の場所として知られていた。平凡社の大百科事典によると、「芝」というの名自体の「文献上の初出は1486年（文明18）の《廻国雜記》にみる やかぬよりもしほの煙名にも立つ船にこりつむ芝の浦人 である。」

江戸時代には、江戸の人口百万人への魚、貝、海苔など水産物の供給地として知られていた。いわゆる江戸前の魚であり、江戸時代の後期にかけて庶民にまで普及したにぎり寿司や天ぷらのネタの産地として名高く、「芝肴」という用語もあった。

芝浦の漁師は船で江戸城入りする家康の浅瀬乗り上げを救ったため家康から漁業免許を与えられたという言い伝えがあるが（芝浦一丁目町会 1992）家康が海上から江戸城入りした史実はないので、あとから来た佃島の漁師より先んじて居留していた漁民としてのプライドから出来た創作だという説もある。江戸時代、將軍家の食膳への毎月4回の御菜上納が行われていた（港区教育委員会 1966）御菜上納は当初芝金杉浦・本芝浦が行っていたが、品川浦、羽田浦などが加わり御菜八ヶ浦となったという。

官撰の江戸の地誌書の一つ『御府内備考』（1810～29年）によれば、漁獲物の種類は、以下のものであったとされる（「新撰東京名所図会」による）。

冬春は 貝類、鰻

夏秋は 芝海老、鯛（こち） 鰯（かれい） 黒鯛、ざこ

芝浦の漁業の状況を芝浦一丁目町会（1992年）は次のように記している。「海は沖へ1キロ行ってもようやく水深3メートルという遠浅で、目黒川や金杉川の水が流入していたので、淡水と海水が混じり合い、芝エビ、コチ、カレイ、シラウオ、イシモチ、サヨリ、イナ、イカ、ヒラメ、サワラ、ハゼ、ウナギ、アナゴ、きす、メゴチなどがよく獲れた。浅いところではアカガイやハマグリ、ワタリガイも獲れた。」

地域ブランドの元祖、芝海老・芝煮

「芝海老（シバエビ）」の和名は、かつて芝浦の産物として有名だったことに由来する（小学館「日本語源大辞典」2005年）。現在漁獲されていないので意識にのぼらないが、芝浦港南地区における地域ブランドの元祖ともいえるべき存在である。地区内で養殖できれば「元祖芝海老」を名乗ることは可能であり、潜在的な地域資源といえる。

なお、歌川広重画の広重魚づくし「伊勢海老・芝海老」（1832年）には次ぎの歌が記されている。「汐ぬるみにえたつやうな夏の日にわきて出たる芝浦の蝦 年庵真千門」

なお、江戸時代、芝海老の美味と生きの良さになぞらえてだと思われるが、「伝法（でんぼう）でおきゃんな」ことで知られる芝神明の芸者は「芝海老芸者」の異称で呼ばれるよ

うになったという。

さらに、「芝海老」とともに「芝煮」という言葉がある。これは「魚肉などの材料をごく薄い味で煮て、その煮汁と一緒に食する煮物」(広辞苑)である。獅子文六「芝浦」(1965)でもメゴチ、ハゼ、その他雑魚を醤油とショウガでざっと煮ただけの料理として紹介されている。江戸時代以来の芝浦漁村の地元料理法に由来するものと考えられる。

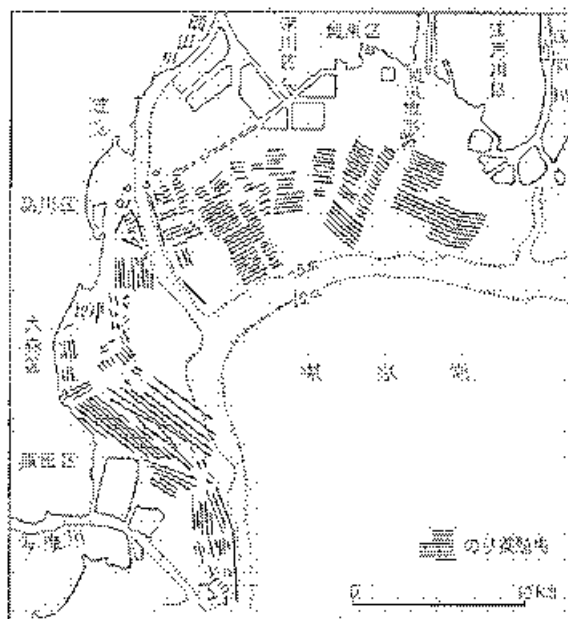
のり養殖

浅草の特権商人が品川や大森など江戸湾の漁民に海苔製造の下請けをさせ、これを浅草海苔と称し全国に広げたため、「浅草海苔」は海苔の代名詞になったといわれる。東京湾ののり養殖がはじまったのは江戸時代、1684～1704年のころで、品川・大森の海岸にはじまり、やがて芝浦、深川、葛西方面に広がっていった。

一般魚の漁獲量減少に対して明治に入って牡蠣養殖とともに海苔養殖に傾斜していったという。1924年の東京湾ののり場坪数178万坪のうち、芝浦が3.8万坪、金杉が6.6万坪とあわせて6%を占めていた。

なお、港陽小学校では環境教育の一環としてお台場海浜公園を利用し、かつて芝浦港南地区の海辺でさかんであった海苔養殖にならった海苔づくりに取り組んでいる。2005(平成17)年度には台場の海に43年ぶりに海苔づくりが復活し、以来毎年継続し、2008年には生徒・保護者ばかりでなく地域住民も一緒に取り組んだ。作業は本職の漁師やNPOの方のサポートで行われ、育った海苔は日本食品分析センターで検査し、安全であることが確認されているという。

東京湾におけるのり養殖場(1940年当時)



(資料) 日本地誌研究所「日本地誌7」

遊船・屋形船

昭和 30 年代まで漁業者が副業として行う「遊船」が盛んであった。これは、投網を打つところを乗船したお客に見せて、その船上で天ぷら、焼き魚、酢味噌などにして食事を楽しませたものである（港区立港郷土資料館「港区文化財めぐり」コース）。1962（昭和 37）年末に補償を得て漁業権が放棄された後も、現在まで、運河など公有水面を利用し、海上遊覧のための屋形船・船宿の営業が続けられている。

（２）魚市場

江戸時代、江戸前（東京湾奥）東京湾内、また相模湾などでとれた魚は、すべて早舟で日本橋の魚河岸に集荷され市中に出回った。もうひとつ、日本橋の魚河岸と異なり局地的な市場であったが芝の古川河口付近にあった雑魚場（ざこば）と称された魚市場があった。

江戸の河岸の分布図（次ページ図）では、かつては海であった芝浦の古川沿いに多くの河岸が立地していた様子がうかがえる（＊）。

「新撰東京名所図会」（1901 年）には「魚市場は本芝町と芝金杉町にあり、芝浦の海魚を獲て市を開く。昔は雑魚場（ざこば）と唱え、後肴問屋と称し、…方今は東京府下魚市場一三箇所の数に洩れず、芝浦の産魚もまた豊なるかな」とあり、また港区立港郷土資料館「港区文化財めぐり」コースによると「江戸時代には魚問屋があり、江戸前の魚を供給していました。天保年間には芝金杉に 21 軒、本芝に 23 軒の問屋がありました」とある。

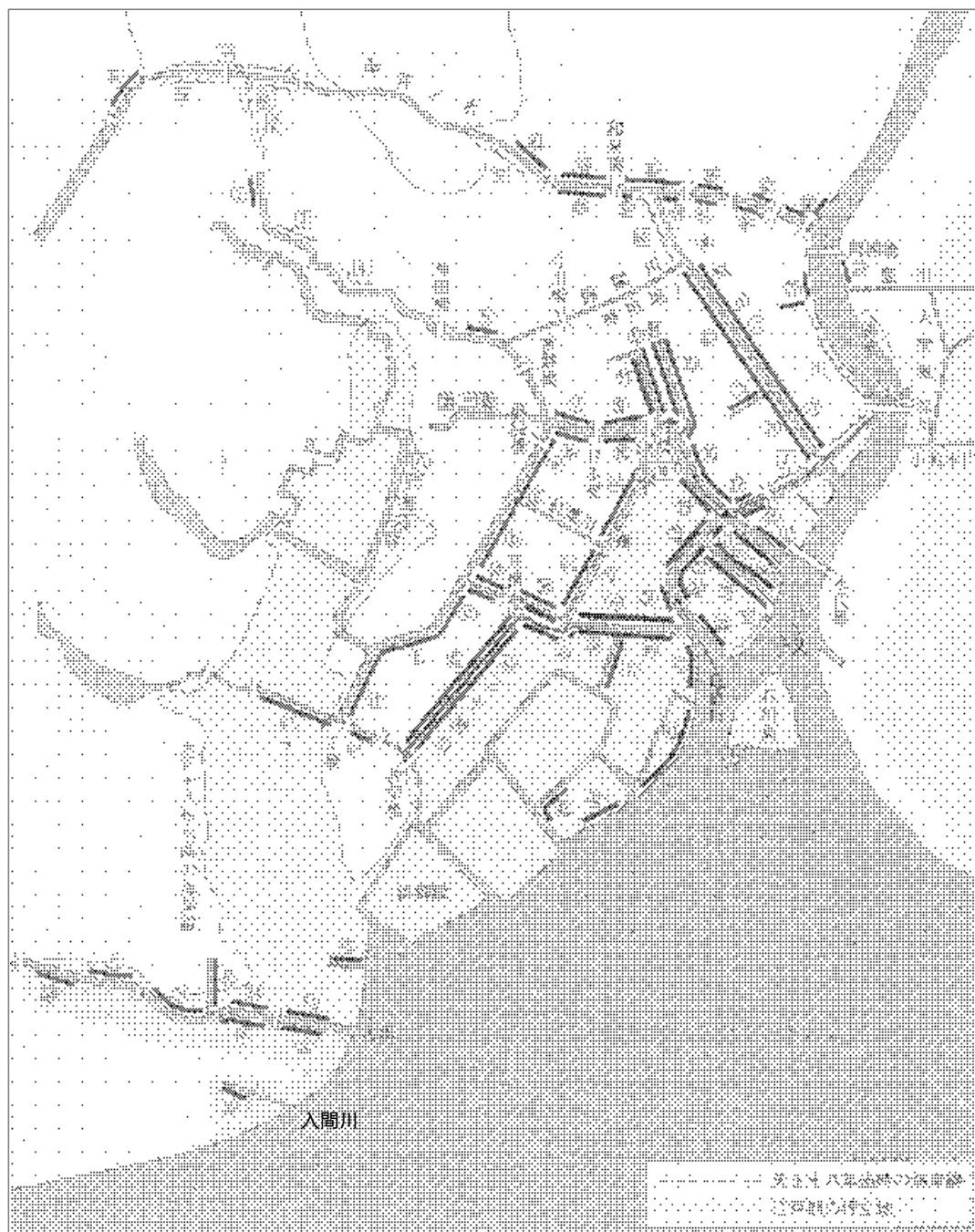
現在の本芝公園（芝 4 丁目 15）が雑魚場跡とされるが、芝浦一丁目町会（1992）には、明治末に入間川河口（現在の重箱堀）の左岸に「魚の夕河岸」、左岸に「何軒かの活魚の問屋があり、昔の芝浜の魚河岸と伝えられた」とある。

なお、こうした江戸以来の魚市場の経緯によるものと考えられるが、芝浦一丁目町会七〇周年史（1992 年）によると、日本橋の魚市場が関東大震災で全焼し（1923 年 9 月）、今の築地に移転する（12 月）までの一時期、芝浦運河の猿島橋付近（海岸 3 丁目）に魚市場が移ってきて大変な繁盛だったという（写真も残っている）。「しかし土地利用について、当時の芝浦一帯の勢力者細川力蔵氏との間で合意ができず、その後魚市場は築地に移ったまま、現在に至っている。もしそのまま芝浦に魚市場があったら、このあたりの状況は、ずいぶん変わったものになっていたであろう。」（同書）

＊この河岸については、江戸湊（みなと）に入る物資の奥地への輸送のため幕府により開削されたものである。古川沿いの河岸整備は 1667 年に計画されたが翌年の大火で一時中止、1676 年 12 月に一応完成し、人々に新堀と称された。さらに幕府は 1698～99 年に新堀を拡さくし、麻布四之橋から金杉の川口にいたるまで 15・6 間から 20 間の船入堀・汐入運河が完成し、本芝の入間川の汐入運河とあわせて輸送の便が高まったという（教育委員会 1966）。

現在は、芝浦港南地区の北端、金杉浦に一部残る古川の屋形船や船宿が連なる町の景観に歴史の跡を留めている。また、入間川（いりあいかわ、いるまかわ）の河口部は次項「芝浦海岸リゾート時代」の主要舞台となったが、「1918（大正 7）年に本芝一丁目地先が埋め立てられ、芝区に編入された。その後、関東大震災後の区画整理で、芝浦から三田四国町に通じる道路になった。」（鈴木理生 2003）入間川河口は重箱堀として残っている。

江戸湊の河岸



(注) 芝浦港南地区の北端である古川の河岸は(50)方門前 1～2 丁目河岸、(51)新堀河岸、(52)赤羽河岸、(53)新門前河岸、(54)北金杉河岸、(55)南金杉河岸、古川の南、入間川の河岸(56)本芝材木町河岸。
 図の凡例には古川河口の南北金杉河岸は中世以来存続した河岸として紹介されている。
 (資料) 鈴木理生編著「図説江戸・東京の川と水辺の事典」柏書房、2003 年

(3) 人情噺「芝浜」

「芝浜」は芝浦海岸で漁業が盛んであった江戸時代の夫婦を題材とした古典落語の中でも屈指の人情噺である。三遊亭円朝(1839~1900)の作と伝えられ、1903年初演の歌舞伎世話物狂言「芝浜の革財布」も本作が原作である。戦後は落語の3代目桂三木助が十八番とし、7代目立川談志の十八番としても名が高い。

話は次のようなものである。酒ばかり飲んでいる魚屋勝五郎が芝浜で大金の入っている財布を拾うが、拾ったはずの財布がなくなる。夫に罪を犯させたくない妻の巧みな言葉によって「財布を拾ったこと」は夢であったと諦め、男は改心して、懸命に働き、立ち直り、何年か後、独立して自分の店を構えるまでに出世する。夫の成功を喜び、落とした者も現れないことを確認した妻から実は妻が財布を隠していたという事の真相を知らされる。妻から自分が断っていた酒をすすめられるが、「いやよそう。また夢となるといけねえ」というオチとなる。

港区産業・地域支援部(2009)によれば勝五郎が財布を拾った芝浜は現在の芝四丁目、本芝公園のあたりだという。隣接する御穂鹿嶋神社には「芝浜囃子の碑」がある。江戸時代の古地図には、鹿嶋神社から入間川左岸までの海岸一帯に芝浜という地名が記載されているものもあり(菅野俊輔2010)。芝浜は必ずしも本芝公園に限られないと思われる。

(4) お台場

江戸時代末、ペリー来航への対処として1953~54年に建造された砲台である「品川台場」の跡は、芝浦港南地区、特に台場エリア(台場1丁目~2丁目)のシンボリック的存在となっている。

広重は江戸の名所として芝浦を何度も描いているが、右は代表的な名所江戸百景の「芝うらの風景」である。近景に、航行標識である湊(みお)と隅田川河口に群れる都鳥を描き、遠景に將軍の別邸「浜御庭」(現浜離宮)そしてお台場が描かれている。原信田実(2007)によれば、前年10月に江戸を襲った巨大地震からの復旧が進んだことを示す將軍家定の浜御庭お成りが暗示されているという(露骨に描くと発禁の恐れ)。

台場の建造とその後の経緯については、次ぎの図とその解説に示した通りである。建造半ばで放棄され、実戦に使われたわけではない施設であるため、歴史上、単に滅びゆく幕府の動揺と狼狽を示すもの



広重「名所江戸百景 芝うらの風景」1856年2月

となっているのは皮肉である。なお、第三台場は1923（大正12）年に東京市公園課の管理となり、海上公園として復旧整備、1928（昭和3）年に台場公園として開園。後にふれるように昭和に入って海水浴場としても利用された。第六台場は原形を最もよく留めていたことから現状保存とされた（港区教育委員会（2006））。

ペリー来航からはじまった台場造り

1853（嘉永6）年、ペリー来航に驚いた幕府は、今度幕山代官の対川大將左衛門宗隆を急ぎと招き、幕で決断に任じた上で、幕府の計画を立てていました。

さっそく検討した結果の結論は、「寄港地と三浦半島の橋を造るにまず舟着を造る。沼津にも防衛線を構築する。それから東京湾を渡る。品川沖に新橋を造るの計画を断る」といって、世大の構想でした。

財政難の幕府にはとてもそんな計画はなく、他府藩廳の模倣は、「浅小沖に警備島を構築し、水師を置く」という程度にまで縮小せられてしまいました。「江戸藩の通商にそんなものを作っても無駄だ」と奥府は反対しましたが受け入れられませんでした。

そこで、品川沖の多摩で最大の防衛を得ようと考えたのが、「大船の門をワダザラに造り、これに砲臺、積載、砲臺の3層を造らせろ」という案でした。

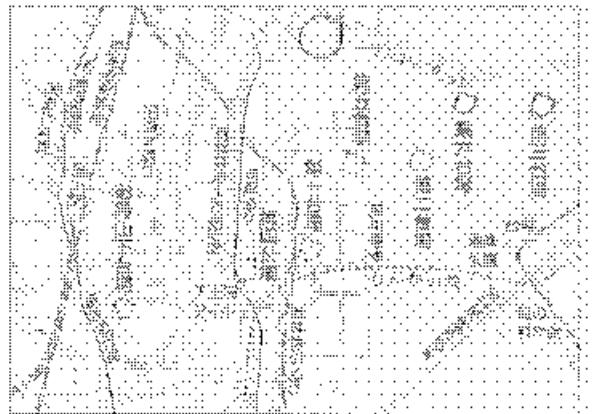
幕府はエンゲルツ（オランダ人）の海軍築城書を参考に、海軍を擁する五角形の砲台を構築する計画を決定させました。現在では品川砲台と品川等門前の山を切り削じた土を造ることであり、早くも3月には第一・第二・第三台場を起工、翌年の4月に完成しました。続いて第四・第五・第六台場が1854（嘉永7）年1月に起工し、第五・第六台場の家が11月に完成。

同時に造られていた品川山の砲台もこの時期に完成しました。ペリーの再来航に間に合わせ、第四台場は「第四台場」として、第五台場は未完成のまま放棄されたようです。

さらに7砲台は、結局の重なりが品川沖に防衛を示す砲臺の効果を減らした。

現在、第一と第五台場は品川砲臺（品川五丁目）に、第四砲臺は品川洲（品川三丁目）あたりに破壊し、第二と第六砲臺は品川七台場は道路の増設になるため撤去されました。

残存するのは第三台場と第六台場で、品川山下の台場跡は、今も五向地のまま品川区立台場小学校の敷地として使われています。第三台場は、現在品川公園として公開されています。



港区産業・地域支援部「まち探訪ガイドブック 2009」2009 年より

3．芝浦海岸リゾート時代

(1) 避暑地・潮干狩り・海水浴

江戸時代から芝浦海岸は、漁業の他、避暑地や潮干狩り、月見行事(「二十六夜待ち」)で有名なりゾート地であった。芝浦商店街のHPには、こう紹介されている。

『江戸名所図会』(斎藤幸雄編、天保5～7年板行)によると、当時の芝浦を次のように活写しています。「月に、雪に、あるひは風に、浦曲の景色、天美なるか、地美なるか、人美なるか、まことに飽きもせぬながめなり。さていつはなけれど、夏の納涼には、尤も適した地なれど、芝といふものの候夏ざしき 梅翁」とあります。句にある「夏ざしき」からも、芝浦に梅翁(連歌師・俳人の西山宗因の号)の時代、つまり江戸時代前期にはすでに避暑の料亭が存在したのは明らかです。

明治時代にも芝浦地域は、避暑地・潮干狩り・海水浴の場所として有名だった。「東京案内」(東京市役所/裳書房。明治40年刊)上下巻によると「芝浦、本芝、金杉新浜町あたり一帯の海浜は、春は潮干狩りが有名で、夏は避暑地となる。」(芝浦一丁目町会(1992年))

芝浦海岸の汐干狩
(芝浦商店街2000)



明治以降の港区関連の俳句を20句まとめた森崎次郎「港区俳句風土記」(1996年)には、芝浦港南地区に関しては、以下の2句が紹介されている。

お台場に売店ありてラムネかな 久保田万太郎

お台場の今宵影濃し泳ぎけり 吉田冬葉

「昭和の初めごろ第三台場は、海上公園として一般に開放されて、夏は海水浴場客でにぎわっていた。」(同書)芝浦沖の埋立が進んでもそれ以前の海水浴の伝統はお台場で続いていたといえる。また、戦前は新橋近くに残っていた三十間堀・築地川沿いの船宿から新橋芸者を連れて台場の方に涼みに出るというような遊び方もあった(岩下尚史2007)。

(2) 料亭街の形成

芝浦一丁目町会(1992年)によると、新橋横浜間の鉄道敷設工事が1872年に完成するころ、月見の名所、風光明媚な海岸であることに着目して沿線に温泉旅館を経営するものがあらわれた。さらに、料理屋、料亭、旅館、海水浴場、海水温泉などが芝浜から本芝にかけて数多く出現した。1881年の改正東京案内には芝橋の鰻蒲焼店「松金」も紹介されている。海水温泉宿とは潮水を焚いた温泉場である。

同書によれば、明治時代以降、芝浦に海岸リゾート地が形成された経済的背景としては次のような点が挙げられるという。鉄道発着地付近の繁華街、東京湾埋立による運輸業者の集会、新興産業地の工場増加、江戸前漁業と関連した料亭、三田あたりの私娼(宝暦1750年代から)

小山内薫「大東京繁昌記」によれば「この時分の芝浦は粋なところで、本場所の芸者や客の隠れ遊びをするような場所になっていた。」(港区教育委員会2006a)

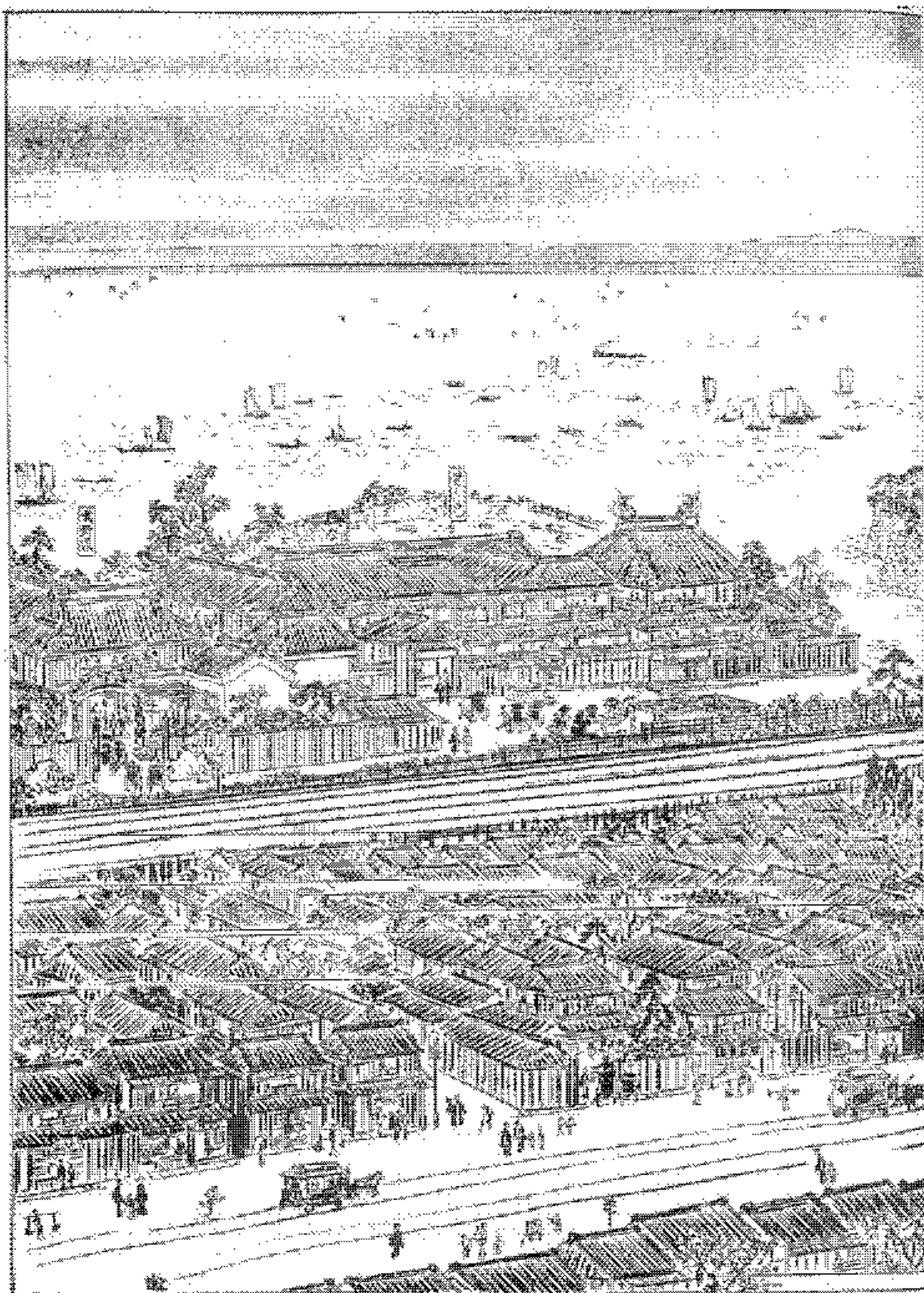
次ページには埋立が本格化する前のこうした芝浦の海岸リゾート地の風情を典型的に示す絵を掲げた(「新撰東京名所図会」(明治35年)より)。

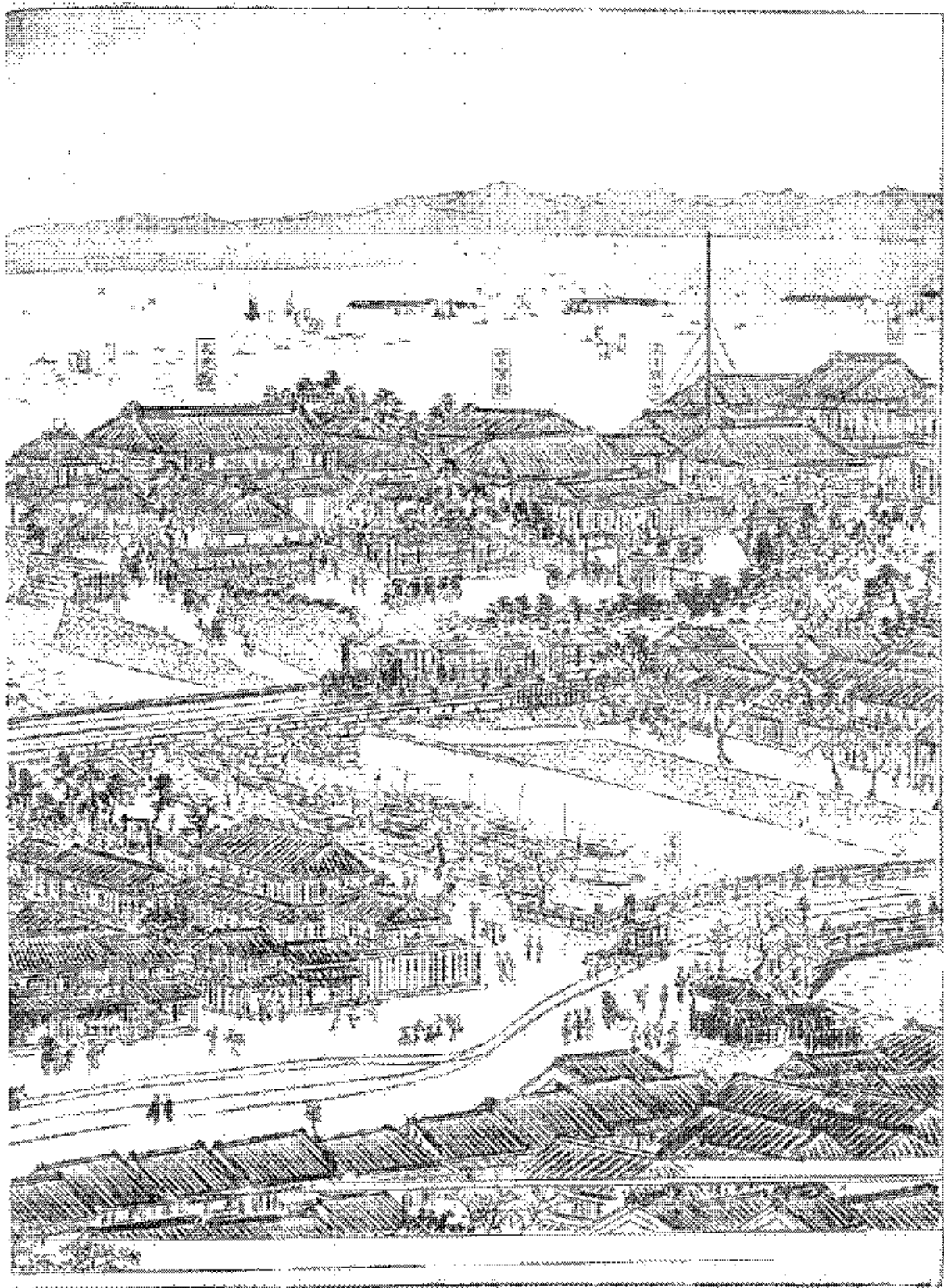
<芝浦風景図の解説>

「新撰東京名所図会」(明治35年)による。現在の重箱堀は旧入間川の河口であるが、明治以降埋立がはじまる前、入間川下流にかかっていた芝橋の周辺は、新鮮な魚と合わせ房総を見渡せる風光明媚な料亭街となっていた。日本初の鉄道である東海道線の汽車のほか、馬車鉄道や人力車など明治時代ならではの交通機関が描かれている。海岸の左から、大野屋、見晴亭、川を挟んで、大光館、芝濱館、本芝鉱泉、芝浦館が並び、芝橋のたもとに松金(鰻屋)が見える。このほか、芝浦海水浴(温泉及び旅館)、いけす(料理店)、かめや(鳥料理)、海老徳(料亭)があった。「図会」によると「貴賤多く芝浦に酌むもの故あるかな。…晩来、電灯の光白く、煌々閃々、花の如く、珠の如く、不夜城を幻出し、絃歌の響四壁に湧く。」とある。また芝浦芸者の起こりについても「本芝の歌妓」と題し「芝金杉新濱町及び本芝の海岸に薨を列ねて料理割烹店、待合茶屋、栄華繁盛を極むるより、其供給否招聘に應ずべき歌妓なからでやは、はじめは本芝に僅か二三軒もありしが、年々其数を増加し、今や新道に踏み迷はむか、軒並に玻璃灯を掲げ、三味の音を聞く。」とある。芝浦海岸リゾートの発展とともに芝浦花柳界もさかんになったことがうかがえる。



(次ページに拡大図)





(3) 芝浦花柳界

料亭街、温泉、旅館街の発達とともに花柳界も芝浦の地において繁盛した。

当初、料亭・旅館街は、接客需要に対して、古くからの花街・芝神明から芸者を求めていたというが、迎えの人力車を走らせても小一時間かかるうえ、地元の料理屋の間で神明芸者の奪い合いが生じたので、料理屋仲間で地元芸者をつくる案がもちあがったという(港区教育委員会 1966)。芝神明の花街からの反対の中、料亭「海老徳」が川越から芸妓屋「松崎」を招いて芸妓置屋を開かせたのがはじまりである(上村敏彦 2008)。これが火をつけた形となって、たちまち芸妓屋開業の希望者が続出、さらに 7 軒以上が本芝一丁目で営業を開始した。芝浦花街のはじまりの年については、1902(明治 35)年説が有力であるが、岩井良衛「女芸者の時代」では三業地開業が 1896(明治 29)年 12 月で、芸妓屋組合設立が 1898(明治 31)年 7 月としている(上村敏彦 2008)。1905(明治 38)年には、芸妓 30 名、小芸妓 6 名がいた(港区教育委員会 1966)。

新興の花街として海軍将兵の出入りが多く、また歌舞伎役者、落語家、吉原の幫間たちが足を伸ばしたほか、青年時代の谷崎潤一郎らの雑誌「新思潮」の編集所に一室が使われた待合もあったという(上村敏彦 2008)。

その後の芝浦花街の変遷は下表の通りである。

芝浦花街の推移

	明治 43 年 (芸妓名鑑)	大正 9 年	大正 15 年 2 月 (売春婦論考)	昭和 4 年 (新版東京案内)	昭和 5 年 (東都芸妓年鑑)	昭和 7 年 (")
芸妓屋	2 8 軒	5 5 軒		5 7 軒	7 4 軒	6 3 軒
待 合	2 0 軒		5 5 軒		7 3 軒	
置 屋			6 6 軒			
料 亭		6 5 軒			4 8 軒	
芸 者	大芸妓 70 名	175 人	173 人	166 人	150 人	183 人
半 玉	小芸妓 11 名				13 人	
玉 代				2 時間 3 円 50 銭	2 時間 3 本 1 本は大 50 銭 小 30 銭	

(資料) 港区教育委員会 (1966 年)

明治末期からはじまった芝浦海岸の埋立工事が進むにつれ、最大の売り物である絶好の展望が失われ海岸一帯の料理屋が経営不振となり、花街もふるわなくなった。第 2 期の埋立工事が終わった 1920(大正 9)年には、埋立地 1 号地南浜町に花街は移転した。

その後、1923(大正 12)年関東大震災では被害が軽微であったので他の花街から避難してきた業者が増え、また東京復興の資材輸送で芝浦岸壁が栄え、再度、芝浦花柳界は港町の花街として活況を呈することとなった。表によれば料亭は減っているが、芸者の人数は昭和にはいるまで、むしろ、増えている。大正から昭和初期が全盛期といわれる。

1924(大正 13)年株式会社芝浦三業が創立され、その後 7~8 年で再び組合組織へ復帰した。三業とは芸妓置屋、待合(席貸・調理せず仕出を取る・宿泊可の場合もあり)、料亭

のセットのことを指し、これらの営業が許可される区域が行政上三業地と呼ばれ花街と同義語となる。1936（昭和 11）年には当時の三業組合長であった細川力蔵（後述）が三業組合の事務所兼稽古場である見番（けんばん、検番とも）の建物を建て寄贈したといわれる。

戦争中は重要倉庫が密集しているため空襲の恐れが増したため花街は移転した。港区教育委員会（1966 年）によるとこのとき芝浦会館（見番のこと。三業会館とも）を東京都に売却したという（なお、この資料では芝浦会館は東京瓦斯芝浦工場から寄贈されたものとされている）。「協働会館」として戦後知られるようになったこの建物は、戦前に建てられた見番建物としては東京で唯一残されているものである。

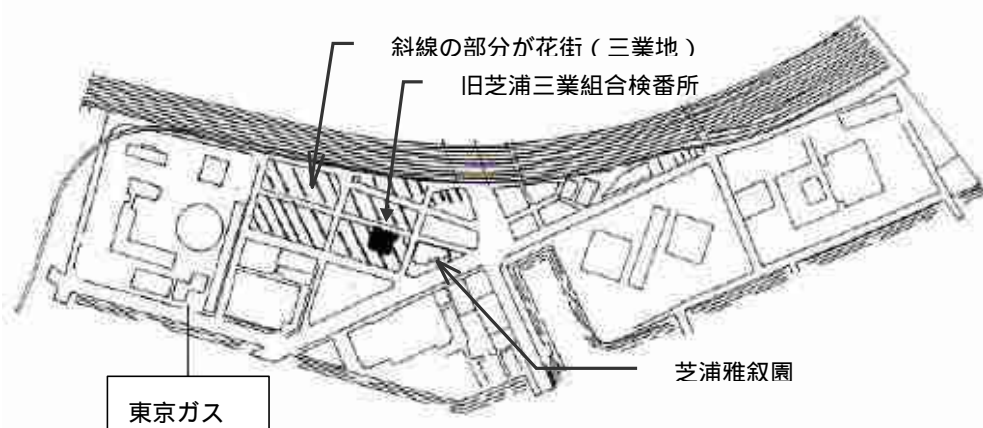
戦後の復活は 1946（昭和 21）年で芸妓屋の音三浦屋店先に事務所を開いてのスタートであった。1950～56 年頃までは料亭（戦後は待合も料亭と称されるようになった）が 17～19 軒あったが、1959 年には 10 軒、1962 年には 6 軒となり、三業組合も翌 1963（昭和 38）年には解散した（上村敏彦 2008）。現在残っている料亭は 1 軒のみである。

戦後の花街の名物は昭和 25 年に結成された芝浦演芸同好会であった。芝浦一丁目町会七十周年史によると、通称「爺ちゃん劇団」と呼ばれたこの会は、花柳界ばかりでなく一般人も参加して素人演劇を公演、老人ホームの慰問興行などを盛んに行った（公演回数約 900 回、ハワイ、ロサンゼルス、上海など海外公演も）。

右は芝浦花街の紋章である。この紋章は芝浦地区の魚問屋や漁業組合などの標識に使用してきたものを踏襲したもので昭和初期芝浦三業（株）時代に創定したといわれる。これもまた潜在的な地域資源ともいえる。



芝浦花柳界の場所（かつての芝浦一丁目）



（注）背景地図は 1992（平成 4）年当時のもの。花街、芝浦雅叙園はかつての場所を表示。
（資料）芝浦一丁目町会「芝浦一丁目町会七十周年史」1992 年

(4) 細川力蔵

芝浦海岸リゾート時代の末期に登場したこの時代を代表する人物として、芝浦一丁目町初代会長の細川力蔵がいる。

彼は、目黒雅叙園の創始者として知られており、価格を表記したメニュー、中華料理の回る丸テーブルの発明、総合結婚式場方式の開発など我が国サービス産業の創始者のひとりともとらえられる。

北陸出身の細川は東京で銭湯の丁稚から身を起し、芝浦に移転の後、銭湯や料亭（芝浦雅叙園（前ページ参照））を起し、芝浦海岸のリゾート産業の主要事業主となるとともに、折からの海岸埋立開発の進捗に対応して不動産事業に乗り出し、埋立によって衰退を余儀なくされることを予期して、目黒の地で更なるリゾート産業の展開を図ったものとみられる。一方で、芝浦の町会長（一丁目及び二丁目）や芝浦花街の三業組合長を歴任、旧芝浦見番を寄贈するなど創業の地芝浦の地域づくりにも貢献しつづけた。

彼のリゾート事業についての種々の発想の根は芝浦海岸リゾート時代にあると考えられる。室内装飾の一点一点の素晴らしさに比して「トータルコーディネートとしていわゆる節度や常識を超越している」点が悪趣味、成金趣味ともいわれる目黒雅叙園であるが、戦前日本の一側面を象徴するような造作物の迫力から、宮崎駿のアニメ映画「千と千尋の神隠し」（2001年公開）の舞台モデルのひとつにもなった。映画の舞台である湯屋（油屋）の正面玄関の滝については「目黒ガジョエンと並ぶ俗悪さ」と宮崎監督が書いたコンテにもあるという。

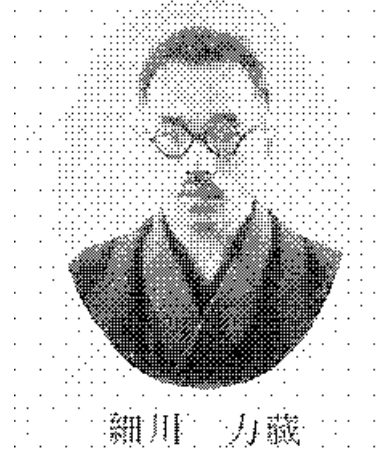
目黒雅叙園を建てた大工棟梁の酒井久五郎は旧芝浦見番の近代和風建築もつくっている。

旧芝浦見番を地域資源としてとらえる場合、芝浦花柳界との関連ばかりでなく、料亭街や花柳界を生んだ芝浦海岸リゾート時代、あるいは細川力蔵、目黒雅叙園、そして「千と千尋の神隠し」へとつながる膨らみをもたせることが重要と思われる。

キーパーソン「細川力蔵」

石川県農家に生まれ、小学校卒業後神田で銭湯を営んでいた同県出身者の元で奉公した後、芝に自ら銭湯を営んだのが事業家の始まりであり、その後不動産業で財を成していく。

1921(大正10)年頃、明治以来東京近郊の海岸リゾート地として栄えていた芝浦における有名料亭「見晴亭」の番頭として、客として訪れた同じ北陸新潟の石油王中野貴一の背中を流し、埋立地の払い下げの情報を伝え、それが契機となって得た埋立地の借地権を元手に目黒雅叙園を建てたとの説もある。芝浦一丁目町会七十周年史には「新潟県の中野さんに見こまれて芝浦の土地の差配を一手にまかされ、一代で芝浦と目黒に雅叙園を築く。」「裸一貫で風呂屋の三助から身を起こして雅叙園の名経営者となり、当時有名な女優の入江たか子さんのお姉さんを奥さんにしたというので、細川さんの存在は東京はもちろん当時日本のジャーナリズムでは余りに有名だった」とある。



細川 力蔵

また芝浦一丁目町会七十周年史によると、1922(大正12)年9月の関東大震災で全焼した日本橋の魚市場が12月に築地に移転する前、一時期、芝浦運河の猿島橋付近に芝浦魚市場が開設されていたが、細川と土地使用について合意が出来ず、築地に移ったといわれる。1923(大正13)年創立の芝浦一丁目町会の初代会長に就任した。区議員もつとめた。

東京芝浦の銭湯(鉾泉と呼ばれていた)を増改築、日本式の料亭「芝浦雅叙園」(北京料理が東京の名物となっていた)を創設。その後、1931年(昭和6)に本格的な日本料理と北京料理の料亭「目黒雅叙園」を開店。当時の料亭は一部の特権階級の人達のみが利用する所であったが、タクシーでの送迎やメニューに価格を入れるなど当時では画期的なシステムを取り入れ、料亭の大衆化を目指した。中国料理のターンテーブルも中国からの輸入品ではなく、昭和7年頃の細川力蔵の発明によると言う。これは全員が平等にセルフサービスで食事できるように、と考案された。また細川の発案により、出雲大社から御礼を迎え、直営の写真場、美容室を設けて、結婚式から披露宴までを一貫して行えるようにし、現代の総合結婚式場のはしりとなった。戦災で焼失してしまったが、かつてはラジウム鉾泉の千人風呂をはじめ、いくつかの浴場も持っていた。芝浦行楽地など明治前期の東京で、温泉地から原湯を運んできて沸かしたり、湯花を取り寄せて温泉に入れる再生温泉が庶民の間で流行ったが、目黒雅叙園はその延長上にあるともいえる。なお、目黒雅叙園の建物は、映画『千と千尋の神隠し』の湯屋のモデルにもなったともいわれている。

芝浦に残る1936(昭和11)年竣工の旧芝浦見番(のちの協働会館)は当時の三業組合長であった細川が建て寄贈したものである(建築は目黒雅叙園と同じ棟梁・酒井久五郎)。

4 . 埋立による運河地域の形成

(1) 埋立開発直前の状況

埋立開発直前の 1904 (明治 37) 年当時の空撮写真を以下に掲げた。これを見ると、東京瓦斯と芝浦製作所、そして海岸リゾート地を除くと、まだ、現在の芝浦港南地区は海であったことが分かる。

1904 (明治 37) 年当時の芝浦港南地区



(2) 埋立開発の進行

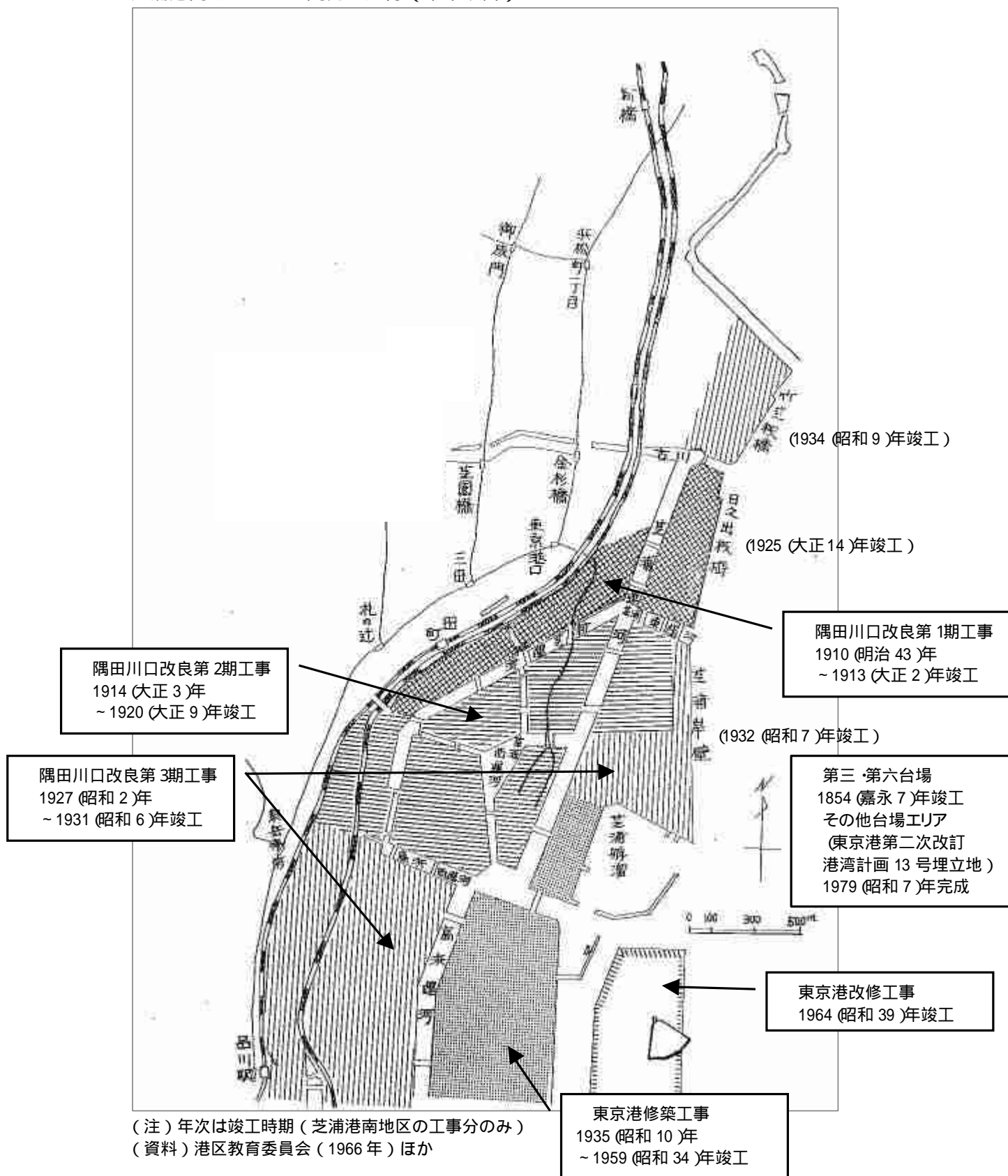
その後の埋立と栈橋・岸壁の竣工時期は次ページの図の通りである。

埋立開発は東京港 (荒川から多摩川まで) の港湾整備の一環としてすすめられたが、東京港の築港計画はライバルとなる横浜港の反対等で何度も挫折している。政府の明治 18 年の計画、東京市の明治 31 年の計画は頓挫、おかげで明治期は芝浦海岸リゾートが栄えたともいえる。

1906 (明治 39) 年に隅田川口改良第 1 期工事の埋立許可があり工事がはじまった。

1907 (明治 40) 年ごろまでは現在の東海道線は海岸から離れた海中の堤防の上を走っていた。海中を走ったのは陸上を通ることに反対が多かったためであった。埋立の進行とともに鉄道も陸上化した。

芝浦港南地区の埋立開発の進行（幕末以降）



最初に完成した港湾施設は日之出棧橋である。関東大震災（1923 年）の当時、続々と集まる救援物資は、危険をおかして芝浦海岸に陸揚げされた。この教訓で、応急的に棧橋を急造し当時の町名にちなんで日之出棧橋と称したという。その後、芝浦岸壁、そして竹芝棧橋が完成し、3～4 千トン級の汽船が楽々と接岸できるようになり、東京港の様相は一変したという（芝浦一丁目町会 1992）。

1930（昭和 5）年には、汐留貨物駅から浜松町で分岐し竹芝を経て芝浦駅までの臨港鉄道が開通した。古川河口には可動橋（芝浦橋）が架けられ、当時赤羽橋までダルマ船などの漕上があったため貨車の通らないときははね上げられた。なお 1986（昭和 61）年には汐留貨物駅の廃止に伴い、古川可動橋は取り払われ、人々の記憶に残るのみとなった（港区教育委員会 2006a）。

1964（昭和 39）年、東京オリンピックの開会式に間に合うように、芝浦港南地区の運河の頭上をぬって東京モノレール羽田線が建設された。

こうした埋立開発の進行について、獅子文六は「芝浦」（1965 年）というエッセイの結びの一文でこう記している。「そして、芝浦は後から後からと海を埋立て、巨大な面積をひろげ、房総の山は高層建築にかくれ、電車やバスや、高速道路や、モノレールまで、ここを走り出したのである。」

その後、湾岸の沖に、1979 年に 13 号埋立地が完成したが、東京都による「臨海部副都心基本構想」（1987 年）にそって、13 号埋立地の北西部に芝浦港南地区最後の埋立開発によるまちづくりとして 1996（平成 8）年台場エリアが誕生した。

1993（平成 3）年にはレインボーブリッジが開通し、首都高速道路、一般道、ゆりかもめ（1995 年開通）、遊歩道「レインボープロムナード」で芝浦と台場は結ばれることとなった。

（3）運河の形成

埋立開発に際しては運河が縦横につくられた。これは大江戸の形成と同じ理屈である。現在の東京の多くの部分がもともとは海であった。かつて入江であった日比谷などが江戸建設で埋め立てられ、縦横に運河（川）が残され、また開削された。現在、江戸以来の運河（堀、川）の多くが埋められて、道路等になってしまったため、東京がもともとは運河都市であったことは想像しにくい。新橋、飯田橋、京橋、数寄屋橋、八丁堀、八重洲、汐留など東京の地名にはかつての名残がみられる。鉄道駅は当初水運との結節点につくられたため、JR の駅の名前には「橋」がつく場合が多い。鉄道の発祥の「新橋駅」が代表例である。

鈴木理生（1991）は、江戸の形成についてこう述べている。

「江戸は日本人の社会がはじめて臨海低地に意識的・継続的に都市を造った場所であり、さらに一步すすめて海を埋め立てて海上に進出した場所だった。この海辺から海上への進出を文化史的にみれば、まさに日本人の都市の歴史の上での一大革命であった。そしてこ

の現象はくり返し述べてきたように、当時の唯一の大量輸送手段としての水運と、その基地を確保するためのものであった。」

芝浦の運河づくりは、江戸の形成と同様の過程を 20 世紀に繰り返したものといえよう。海外では同様の過程で形成された運河都市として、「アドリア海の女王」と讃えられ、ゴンドラで知られる「ベネチア」が余りに有名である。

芝浦港南地区の運河は、沖合停泊中の大型船から海上で、あるいは栈橋・岸壁に接岸した大型船から、直接、荷物を積み替え、ダルマ船等の小型船で各工場・倉庫の岸壁や河岸まで運ぶため、埋立の際に水路として残されたものである。芝浦港南地区の運河は、最初から小型船による利用が前提とされていた。そのため、運河に架けられた橋りょうはいずれも水面からの高さがかなり低いものであった。かつて運河沿いには石炭置き場が配置され、またホイストクレーンでバージ船から倉庫に荷役する光景が日常的に見られていた。

しかし、鉄道、そして、その後は港湾道路や高速道路など陸上輸送路の整備に伴って運河のこうした役割が小さくなり、現在は、物流上の機能はほとんどなくなってしまっている。

芝浦港南地区の倉庫街は、水運の都合上の適地として立地したものであるが、陸上交通へのシフトによって、かつての有利性は失われ、だんだんと他用途に転用されていった。当初は他の業務用途への転用であったが、ウォーターフロントの時代となって、レジャー施設やレストランなどにも利用され、ついには、高層マンションなど住宅用途にも転用されるに至った。

運河水運が盛んな時期

NHK ブラタモリ（2009.12.10 放映）より



5 . 文明開化物語

芝浦海岸地区のほとんどは海岸の埋立開発によって生まれた。埋立は芝浦海岸の風光明媚な自然景観を奪うこととなったが、その反面、文明開化と陸海の大発展をもたらした。その結果、鉄道の開通や港湾の整備とむすびついて芝浦一帯が日本の近代化の先頭に立っていた時代が到来した。

ここでは、明治時代から昭和戦前期にかけて広く「文明開化の発祥」と位置づけられるような芝浦港南地区の事跡を取り上げる。

(1) 鉄道のはじまり

日本における鉄道は 1872 年（明治 5 年）9 月に新橋・横浜間に開通したが、田町駅付近から品川までは当時の敷設反対のため芝浦の海中に堤をつくって線路をつくった。この工事に時間がかかったため当初は品川・横浜間で仮開業した（同年 5 月）。従ってとらえかたによっては品川駅が鉄道発祥の地といえないこともない。

芝浦港南地区と芝地区、高輪地区の境となっている東海道線が日本の最初の鉄道であったという点、および新橋に先立って品川駅が最初の鉄道のターミナルであったという点、この 2 点で芝浦港南地区の文明開化物語に最初に鉄道をあげることは妥当であろう。

なお田町駅は、1909（明治 42）年に旅客駅として開業した。

その後、埋立開発の進行とともに品川駅の港南口、田町駅の芝浦口は新しい業務機能、オフィス機能の立地が進み、サラリーマンの街として大発展した点でも、芝浦港南地区と鉄道とのつながりは深い。

(2) 銀座のガス灯に灯るガスを供給

1874（明治 7）年から文明開化を象徴する銀座のガス灯のガスを製造して供給したのは金杉橋につくられたガス工場（明治 6 年建設）である。現在、海岸 1 丁目の東京ガス本社ビルの場所がこの工場敷地であり、本社ビルに隣接する浜崎公園内には「ガス創業記念碑」がある。

当初、このガス事業は同年渋沢栄一が会頭となった東京会議所が行った（工場敷地は東京府からの借地）。その後 1876（明治 9）年にはガス事業は東京府瓦斯局に移管され、1885（明治 18）年にはそのために設立された東京瓦斯会社（後の東京ガス（株））に払い下げとなった。東京府瓦斯局局長、初代の東京瓦斯社長も渋沢栄一であり、一貫してガス事業に関わっていた。その後、明治から大正にかけて、室内灯へのシフト、新たな瓦斯事業会社として名乗りをあげた千代田瓦斯（株）との競争と合併、電気灯との競争、熱源へのガス利用のシフトなどを経て東京のガス事業は発展していく。

芝浦地区には、日露戦争後の好景気を受け、1910 年、芝浦 1 丁目にガス製造所（千代田

瓦斯株式会社千代田製造所）が建設された。東京瓦斯との激しい競争の後、1911 年には東京ガスと合併し、同工場は東京瓦斯芝第 2 製造所、そして芝製造所（第 1 製造所の廃止とともに）と改名されていった。

この芝製造所は、北側に J R がはしり、南側は石炭貯蔵倉庫と新芝運河、西側は新芝北運河（現在埋め立てられ芝浦公園）に面しており、これらの運河から石炭が陸揚げされ、ガス製造が行われていた。新芝運河沿いの緑地には現在ガス灯の修景がなされている。またこの敷地には、港区の芝浦港南地区総合支所ほかの公共施設が移転することとなっている。

まことに銀座のガス灯へのガス供給にはじまり、港や運河を利用したガス事業とともに芝浦地域は歩んできたといえよう。

（ 3 ）日本の機械産業のおこり（芝浦製作所）

江戸時代、東海道は新橋付近から品川方面へ海岸沿いを通じていたが、明治になってこの街道沿いに点々と先駆的な工場の定着を見るようになった。新橋の南につづく芝方面には江戸時代から家具・車鍛冶などの職人が住み、かれらは明治の中頃までに輸入された自転車・機械器具の修理を依頼され、それが機械組立工業の一素因ともなったといわれる（日本地誌研究所 1967）。

日本の機械産業の発祥の 1 つは「からくり儀右衛門」と呼ばれ活躍した発明家田中久重が 1875（明治 8 年）年に東京・銀座に設立した電信機関係の製作所・田中製造所である。1882（明治 15）年には田中大吉（田中久重の養子で 2 代目）が芝浦に「田中製造所」を設立し、1893 年（明治 26）年には三井銀行に譲渡され「芝浦製作所」と改称された。その後、1939 年（昭和 14 年）重電メーカーの芝浦製作所と弱電メーカーの東京電気が合併し、東京芝浦電気（東芝）として発足、やがて手狭となったため川崎へ工場移転を行った。敷地は倉庫群としてしばらく利用されていたが、1984（昭和 59）年、東芝ビルが建てられ、株式会社東芝に社名変更、後に本社機能を統合、発祥の地に東芝本社が立地することとなった。

1878（明治 11）年に発足した工部省電信寮製機所において電気製品の開発をめぐり切磋琢磨していた岩垂邦彦、沖牙太郎、石黒慶三郎、三吉正一、田中大吉ら若きエンジニア達が日本の機械企業の祖となるケースが多かった。三吉正一は三吉電機工場をおこす（1883 年）とともに、後に合併して東芝となる東京電気の前身白熱舎の創業者でもあった（1890 年）。芝の N E C 本社は三吉電機工場があった場所であり、工部省をやめエジソンの元で 2 年間白熱電球や発電機の技術を学びセールスマンとしても活躍した岩垂邦彦が帰国後 1889（明治 31）年この工場を買収し N E C をはじめたのである。一時期田中大吉の田中製作所にいた沖牙太郎は 1881（明治 14）年に独立し明工舎を設立、電信機などの製造および販売を始めた（沖電気のはじまり）。これらはいずれも芝浦地域周辺に活動の拠点を置いていた。

また 1889（明治 22）年、日本の工作機械の父と言われた池貝庄太郎により芝金杉川口町

に池貝工場を創設、国産旋盤第一号機が完成されている。さらに 1919（大正 8）年頃には芝浦の現在地にヤナセ自動車が進出、現在に至っている。

こうして芝・芝浦一帯は工場が増え、労働者の数が増えて、機械産業の町となっていった。その後、品川区、大田区、川崎市へと続く外延部へと日本の機械産業の集積は広がっていった。

なお、隣接する芝 2 丁目には日本労働運動発祥の地記念碑が建てられている。ここは 1912（大正元）年、鈴木文治が労働者の修養団「友愛会」を結成した場所である。友愛会は 1919（大正 8）年、「大日本労働総同盟友愛会」と改称。さらに、1921（大正 10）年には「日本労働総同盟」と名称を変更し、労働運動の中心勢力となっていく。

（４）日本初の南極探検隊

1910（明治 34）年に白瀬中尉ら我が国最初の南極探検隊（27 名）が開南丸（木造 204 トン）に乗り、数万の学生、市民の歡呼に送られて芝浦を出航した。苦労を重ね 1912（明治 35）年 1 月南極大陸に上陸し、同年 6 月無事帰国し、開南丸は再び芝浦沖に投錨した。海岸 3 丁目の埠頭公園には、1936（昭和 11）年にはこの壮挙を記念した碑が建てられ、同公園内には開南丸を模した木製遊具がつくられ子どもの遊び場となっている。

（５）都電の修理工場

東京の路面鉄道は、1882（明治 15）年の鉄道馬車にはじまり（前に掲げた「新撰東京名所図会」（明治 35 年）の芝浦風景に鉄道馬車が描かれている）、1903（明治 36）年にはこれの動力を馬から電気に変え、品川・新橋間に路面電車（東京電車鉄道）が走った。すなわち都電（東京都電車）のはじまりである。

芝浦 6 号埋立地（現芝浦アイランド）には、1920（大正 9）年に東京市電気局（交通局の前身）工場が設置された。島の北半分は都電の車輛工場となり、電車両の新造・改良ならびに修理はもちろん、さらには防音防振対策や制動器の改良などの技術研究を行う施設として、たくさんの都電車両を生み出した。後段「埋立の進行図」に修理工場に入るかつての都電の線路が描かれている。

この島への都電の入出庫に使う橋が船路橋で、1953（昭和 28）年に架設された。都電が廃止になってからは、車輛工場ではなく都営バスの修理工場として使われ、船路橋に埋められたレールに都電が通ることはなくなり、以来この橋は 30 年以上この姿のままで年を経た。芝浦アイランドの整備に伴い 2007 年 5 月に少しずれた同じ場所に掛け替えられた新しい船路橋の中央にはレールを模した模様が引かれ、アイランド側には橋の由来を知らせる看板が立っている。

（６）プロ野球の発祥

日本初のプロ野球球団は 1920（大正 9）年 12 月、芝浦埋立地にあった球場を本拠として

スタートした。「芝浦野球協会」である。早稲田大学チームとの対戦では“入り”も多かったが敗戦、その後客足も衰え解散した。その後、一時関西の実業家に引き受けられ宝塚協会として再スタートしたが、やがて解散した。そして、1934（昭和9）年12月大日本東京野球クラブ（後の読売巨人軍）が誕生するまでプロ野球球団はなかった。埠頭公園には、南極探検隊記念碑と隣接して、少年野球場があるが、ここが日本プロ野球発祥の地とされている。

（7）無線放送のはじまり

1924（大正13）年11月29日社団法人東京放送局が設立された。局舎は田町駅前の現東工大付属高校内にあった。無線放送は翌1925（大正14）年3月1日に成功（試験放送）その後21日間放送が続けられ、3月21日からは愛宕山へ移り仮放送がはじまった（本放送は同じく愛宕山で7月から）。芝浦は日本の無線放送、そしてNHKの発祥地である。現在、放送記念碑が建てられている。（（4）（6）（7）は港区教育委員会1966等による）

（8）肉食のはじまりと芝浦食肉市場・と場

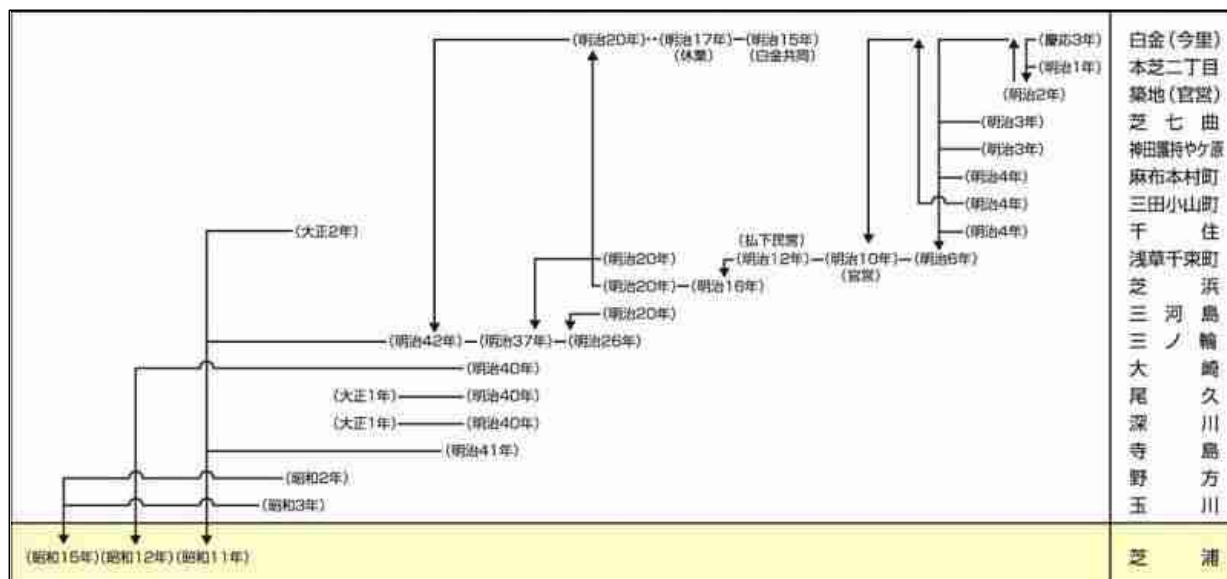
1867（慶応3）年、荏原郡白金村（現在の芝白金）に当時高輪にあった英国公使館の需要に応えるために東京で最初のと場が開設された。その後、文明開化とともに日本人にも食肉は普及し始め、1869（明治2）年には築地に公営と場が開かれ、私営のと場も各所に開かれた。

1936（昭和11）年には芝浦に東京市営のと場と家畜市場が建設され、それに伴い、三ノ輪・寺島等の6つのと場が順次廃止された。これが現在の品川駅南口近くに立地する東京都中央卸売市場食肉市場・芝浦と場の由来である。ここでの取引価格が全国を目安となっている他、品質の高い肉が生産・流通し、食肉の世界の「芝浦ブランド」が目標にされている。

実際、ホームページを検索すると「「魚の築地・肉の芝浦」のブランドを、新鮮なまま低価格で提供」とか「東京芝浦の食肉市場から、25年の経験を活かし、おいしく確かな肉を厳選して直接仕入れております。」とか「東京都中央卸売市場食肉市場がある芝浦は新鮮なホルモンが手に入ること知られ、今や「芝浦のホルモン」といえば一大ブランドである。」とかいう文面が飛び込んでくる。

また、毎年催されている「東京食肉市場まつり」（2009年は25回目）には大変な集客があるといわれる。地域資源としての可能性は大といえよう。

東京におけると場の消長



(資料) 東京中央卸売市場食肉市場・芝浦と場 HP

(9) その他

港南地区の「芝浦水再生センター」は、最も古い下水処理場ではないが、1931(昭和6)年に稼働した東京で3番目に古い水再生センターである。

1888年設立の大日本水産会水産伝習所(越中島)に起源を持つ東京水産大学(現東京海洋大学)品川キャンパスは、1954~57年に港区港南地区に移転してきたものであり、本地域が発祥ではない。なお同大大学祭の「海鷹祭」は同大学品川キャンパスで毎年11月の3日間を利用して開催されており、マグロの解体ショーが見所である他、水産業界で活躍するOBから寄付される各地の魚介類の激安即売会もあり、近隣住民にとっても見逃せないイベントになっている。

芝浦工業大学は、1927(昭和2)年に荏原郡大森(現大田区)に設立された東京高等工商学校(創立者有元史郎)にはじまる。第二校舎のあった芝浦に本拠を移し、1949年には芝浦工業大学となったが、2006年には東京都江東区に豊洲キャンパスを開校、旧芝浦キャンパスに所属していた組織はすべて豊洲キャンパスに移転し、旧芝浦キャンパスは再開発され大学、オフィス、ホテルからなる「芝浦ルネサイト」となった。新校舎(現芝浦キャンパス)は同大デザイン工学部が使用している。

6 . ウォーターフロントの時代

(1) ウォーターフロント開発の歴史

ウォーターフロント開発の歴史

年 代	事 項
70 年代	60 年代の工業化で壊され汚された水辺と緑を取り戻そうという動きが全国化 ・小樽、柳川の環境復活 ・隅田川の水質改善 屋形船や花火が復活
80 年代	80 年代前半、川での動きがベイエリアにも拡大 お台場人気 ・お台場が人気スポットに（1975 年開園のお台場海浜公園がウィンドサーフィンのメッカに） 大川端大作戦 ・都心に人を取り戻すため大川端リバーシティ 21 計画（1986 年～2000 年 8 棟の超高層マンション建設） ロフト文化の誕生 ・ベイエリア倉庫街の異次元空間出現（小規模な資本や斬新なアイデアに支えられたロフト文化。隅田川河口～竹芝桟橋あたりの前衛ギャラリーからはじまり、やがて芝浦運河沿いのライブハウス、レストランが人気の中心に） 86 年～88 年のオフィス開発・インテリジェントビル乱立 ・横浜「みなとみらい 21」、幕張「幕張メッセ」 ・東京の東京テレポート構想（85 年）は挫折。13 号地の臨海副都心開発は継続 86 年～91 年ごろのパブル期の開発 ・芝浦のシーバンス、品川の天王洲アイル ・この期に「ウォーターフロントを盛り立てていた若者やクリエイターの情熱は、潮が引くように冷めていった」（陣内 2007）
90 年代 （注 1）	・パブル後も汐留、丸の内、六本木など内陸部を中心に、政府のてこ入れで大規模開発（「特区」として「都市再生」の大義名分をもらい高層のオフィスビルが建設） ・一般的にベイエリアへの関心は、ますます薄れる
2000 年代	・ベイエリアに超高層マンション群（住居や大学が郊外へと追いやられた 80 年代の流れが逆転し「都心回帰」の動きが急速に強まる）（注 2） ・2003 年東京都「運河ルネッサンス」を提唱 民間から発案される水辺のサロンやレストラン設置に対し水域占領許可規制を緩和して水辺の文化や価値を高めていこうという試み（まずは芝浦、品川、つづいて月島、晴海とエリアを限定して、モデル地区づくり） ・天王洲 TY ハーバー（TY ハーバーの前にも東京初のフローティングレストラン & バーが 2007 年オープン） ・カナルカフェ（飯田橋のお堀沿い） ・広島市太田川沿いにオープンテラス・カフェ

（注 1）「ウォーターフロントのイメージは、現在、オフィスビルやコンベンションシティを念頭に置く開発派と、ロフトやお台場公園を思う遊び感覚派に真二つに分かれている。一番重要な、その両者を取り結ぶ発想があまりにも弱い。」（陣内 1992）

（注 2）「大規模資本による超高層マンションが立ち並ぶ現在の水辺からは、わくわくする気持ちが生まれてこない。ベイエリアに居住人口が増えたこと自体は、いいと思います。でも、それならもっと水辺の日常を楽しむゆとりがほしい。現状では、開発が大規模過ぎて、かえって水辺が遠くなっているように感じます。ここが今のベイエリアの問題ですね。」（陣内 2007）

（資料）陣内秀信「世界の都市の物語 東京」1992 年、「身近な都市の水辺に夕暮れ文化を」2007 年

ウォーターフロントやベイエリアという用語の主唱者の一人、陣内秀信氏（法政大学）による 90 年代初め時点と最近時点の資料によりウォーターフロント開発のまとめを表にした。親水空間の回復、オフィスビル開発、高層マンション開発、リゾート空間整備が織りなすウォーターフロントの歴史はすでに 40 年間に渡っている。

こうした経緯を踏まえた現段階の主要な課題としては、多くの住民の居住地となったベイエリアにおける新しいコミュニティ空間の創出とそのための地域資源の見直しであることがうかがえる。

なお、ベイエリアという名称のおこりであるが、Wikipedia「お台場」(2010.3.6)によれば、1986 年に「ロックバンド THE ALFEE が、埋め立てのみ完了しただけでなにもなかったお台場で、10 万人を動員し野外コンサートを行う。現在、東京湾岸地域を「東京ベイエリア」と呼ぶことがあるが、これは彼らがコンサートのタイトルを「1986.8.3 SWEAT&TEARS TOKYO-BAY AREA」と称したことに由来する」とある。

次ぎには、1980 年代のロフト文化、及び文化空間・親水空間創出への取り組みをまとめることとする。ウォーターフロントにおける高層住宅開発とこれにより急増した住民の姿については次章でふれる。

（２）芝浦港南地区の運河沿い倉庫街のロフト文化

サンフランシスコのフィッシャーマンズワーフやボストンの水族館など、海外におけるウォーターフロント開発の成功事例を参考に 1980 年代より日本でも倉庫街や貨物駅といった古い港湾施設の再開発がウォーターフロント開発として注目され、いわゆるウォーターフロント・ブームとなった。

レジャー系のウォーターフロントとしては 1983 年にオープンし、86～90 年にホテル群が建設された浦安市の東京ディズニーリゾート（東京ディズニーシーは 2001 年オープン）と並んで、芝浦港南地区の空き倉庫を利用したディスコやライブハウスが注目を浴びた時期があった。

有名だったのは以下のようなディスコ、ライブハウス、バー・レストランであった。

ディスコ

「芝浦ゴールド」(1989 年開店、東京都港区海岸 3 丁目 1-5)

「ジュリアナ東京」(1991～94 年、東京都港区芝浦 1 丁目 13-10)

ライブハウス

「インクスティック芝浦ファクトリー」(1986～1989 年、東京都港区芝浦)

「インクスティック鈴江ファクトリー」(1990～1995 年、東京都港区海岸)

バー、レストラン

「タンゴ」(1986 年、東京都港区芝浦)、「ベニス」(芝浦)

このうち、「ジュリアナ東京」は、最寄り駅田町駅から降りたワンレン・ボディコン・爪長・トサカ前髪といったファッションの女性が多く集まり、マスコミでも話題になった。通称「お立ち台」と呼ばれるステージや荒木師匠こと荒木久美子に代表されるジュリアナ扇子（通称「ジュリ扇」）を合わせたファッションが典型的で「バブル期」を象徴する風俗として有名だった。のちに違法派遣、不正請求で問題となった人材派遣業、介護サービスのグッドウィル・グループの中心人物、折口雅博が当時の日商岩井の社員として、大手倉庫会社のオーナーから有効利用の相談を受け、巨大ディスコとするプロジェクトを計画、綿密な計画の下、立ち上げ、大成功を収めたという逸話でも有名である。

芝浦商店会の創立 30 周年記念「芝浦商店会のあゆみ」（2000 年）は、「序にかえて：芝浦は今、全国的有名地に」の中で、ジュリアナ東京が芝浦地域に「青天の霹靂」のような衝撃を与えたと記している。

「一昔前までの芝浦は、知名度が低く、殺風景な埋立地の上にできた、いわゆるダサイ町でした。」「現在のような生き生きとした街に至るまでには、かなりの時間を要しました。世にいう「陸の孤島・芝浦」というありがたくないレッテルは、一朝一夕にはがすことのできない状況にあったのです。」1991 年開店のジュリアナ東京は状況を一変させた。「オープンと同時に、世の若者の目はジュリアナへホットに向けられ、連日連夜、押すな押すなの盛況。」「周辺には全国から集まったナンバー車のオンパレードといったすさまじさ。あらゆるマスコミも同店をとりあげたおかげで、「ジュリアナのある芝浦」は、区内の六本木や赤坂といった一等地と肩を並べるほど大々的にクローズアップされました。」「やがて、ディスコフィーバーも冷めかけた矢先、こんどは芝浦とは目鼻の先に夢の架け橋お台場へとつながるレインボーブリッジが完成。都心の一大観光地へと注目を集め、芝浦は都心から近いウォーターフロントとして見直され、これまたイメージアップにつながったのです。」

当時の興奮を伝えるドキュメントとして少し長くなったが引用した。

なお、陣内秀信（1992）は、この時期注目された芝浦海岸エリアのウォーターフロント・レジャー施設を芝浦料亭街に代表される「2．芝浦海岸リゾート時代」の再来と位置づけているが、芝浦地区をよく知っている者ならではの卓見であると思われる。

（3）文化空間・親水空間としての運河

水運の手段として運河はつくられ、機能してきたが、陸上交通の発達により物流手段としては役目を終えたが、文化空間・親水空間としての運河の役割が再発見ないし見直されてきている。

歴史を感じさせる文化空間としての役割

路上観察が 1980 年代前半に始まり、1986 年には「路上観察学会」の発足を契機に広く知られるようになった。また一方で、東京論ブームが訪れ、1986 年には雑誌「東京人」が

創刊され、東京の都市としての成り立ちに関する関心が高まった。また最近では人口が増加しない中で都市の繁栄とリサイクル・環境都市への志向から江戸ブームが訪れ、江戸・東京の水都・運河都市としての見直しが進んでいる。

こうした流れの中で、ベネチアの研究家で路上観察に加え水上観察（水上からの都市観察）を重視する建築学者、陣内秀信は「世界の都市の物語 12 東京」(1992 年刊)のなかで、「ベイエリア」のひとつとして芝浦港南地区を大きく取り上げている（表にここで取り上げられた地域資源を掲げた）。

NHK は路上観察や東京の坂探索を趣味とするタレント・タモリを起用して、プラタモリ・シリーズを 2009 年 10 月から放映したが、2009 年 12 月 10 日放送の「第 9 回 品川」では、品川から発して芝浦港南地区の運河地域へ向かい、上記陣内氏も観覧ボートに同乗して、水上からの観察を行った番組を放映した。その番組で取り上げられたのは、天王洲アイルに残るお台場跡の石垣、レインボーブリッジのループ部分におけるバージ船の船溜まり（東京湾埋立に果たしてきた役割）、頭上を走るモノレールの景観、高層マンションの横に残る倉庫街のホイストクレーン（かつて盛んであった運河舟運の荷役機械）などであった。

陣内秀信「世界の都市の物語 東京」1992 年で取り上げている芝浦港南地区の地域資源

地域資源名	備考
古川河口の船溜まり、釣り船や屋形船の基地、船宿	旧地名芝金杉、漁師町、浅草海苔養殖のあと
船溜まり（東京港口）	かつてダルマ船頻繁に出入り
協働会館	和風建築モニュメント、稽古場・港湾労働者宿泊所、芝浦旧料亭街も残存
最先端プレイスポット	インクスティック芝浦ファクトリー、タンゴ、ベニス
芝浦埠頭	海に面して三角屋根の倉庫（非コンテナ化）
日の出桟橋	水上バス乗り場、フランス料理クルーズ船「シンフォニー」東京港発祥の場（関東大震災の罹災者輸送、救援・復興資材搬入のための海岸 2 丁目の簡易埠頭がおこり）
お台場海浜公園	台場、埋立地、貯木場のあとに整備 ウインドサーフィン、ピクニック等 自然系は本格的ではない 景観に特徴 現代東京のスカイラインを遠望 東京港連絡橋の巨大吊り橋（建設中） 夕日

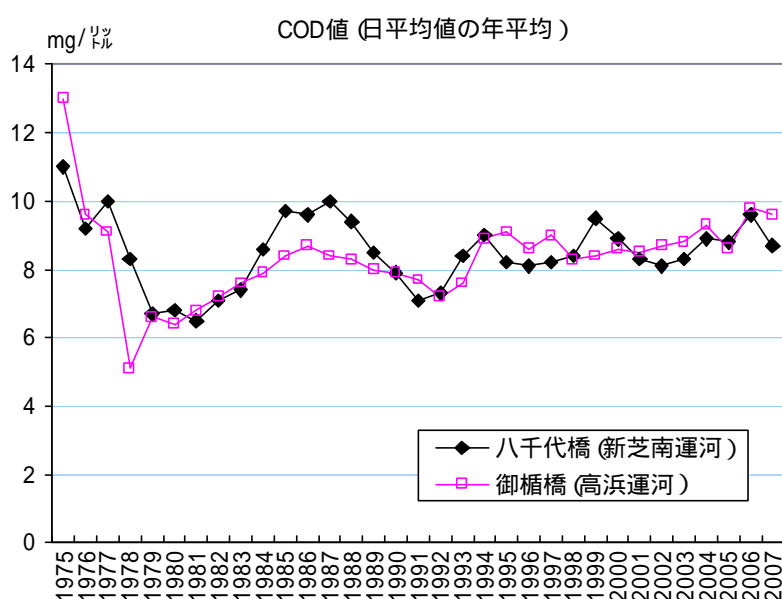
なお、同書では、お台場海浜公園で次のような品川の祭事が行われている点に言及しており、水辺の文化的な位置づけのひとつとして注目される。すなわち、江戸時代に大江戸夏祭りの花形として盛大を極めたという品川の荏原神社例祭・かっぱ祭り（南の天王祭）の御神面神輿海中渡御（ごしんめんみこしかいちゅうとぎょ、6 月第 1 日曜日）がお台場海浜公園で行われている。品川沖の天王洲は室町時代に牛頭天王（須佐男之神）の御神面が見出された場所であるため神輿が遠浅のその砂浜に入っていた。ところが天王洲は埋立て失われ、天王洲アイルとなった。このため、海中渡御は京浜島つばさ公園に場所を移し、

さらに現在は、お台場海浜公園に舞台を移されて実施されているのである。

運河の水質の推移

1970年代にはじめてウォーターフロントが注目された当初より、親水空間として重要性が意識されていた。ウォーターフロントは時期により、遊びの空間、文化の空間、癒しの空間、住まいの空間、景観といった様々な側面が代わる代わる注目されてきたが、一貫して、そのバックボーンとしては貴重な親水空間、また水辺の環境としての役割が意識されていたといえよう。

芝浦港南地区の運河の水質推移



(注) CODは化学的酸素要求量のことであり、海水域の代表的な水質基準である。
環境基準値としてはC類型「環境保全」(日常生活で不快感を感じない限度)
は8mg/L以下とされるが、水産物養殖や水浴には2～3mg/L以下が必要と
(資料) 国立環境研究所「環境数値データベース」

最初に運河の水質の変化を概観する。

芝浦3丁目と4丁目を隔てる新芝南運河の八千代橋と港南2丁目と4丁目を隔てる高浜運河の御楯橋の水質の変化を1975年から追ったグラフを掲げた。

これを見ると、両地点とも、1975年当時には、不快感を感じない環境基準とされる8mg/Lを大きく上回っていた水質は、1970年代後半から1980年代初めにかけては、かなり低下し環境基準を達成した。ところが、その後は、この環境基準値を上下し、最近はやや上回るに至っている。

運河の水質は30年以上前と比べるとかなり改善され、不快感を感じる水準は脱したもの、近年、どんどん良くなっているとはいいたい状況である。

芝浦水再生センターで処理された水が運河に放流されており、この放流水の水質が運河の水質に大きく影響している。同センターのHPによれば、放流水の水質は、「都民の健康と安全を確保する環境に関する条例」の水質基準（COD35mg/l以下）を十分に満たし、魚がすむことができる水質とされており、実際のCOD値は本系16mg/l、東系10mg/lとされている。

運河の水は海水層の上に淡水層（放流水）が乗っている2層構造になっている（「べいあっぱ」平成19年6月号）。この放流水の存在により運河周辺が年間通して比較的暖かく、夏みかんの自生には適しているといわれる。また海水と淡水がまじりあう人工的な汽水域であるため、野生生物の生息にも独特な影響をもたらしている。

なお、お台場の海に関しては、東京大学の調査によれば、普通の日には海水浴場としての水質基準を一応満たしているという。ただ、大雨の後、処理場で処理しきれなかった下水が直接入ってくると水質が悪化するという（「ベイアップ」平成21年3月号）。ちなみに海水浴場としての課題はむしろ急に深くなる水深だという。

大雨の後の水質悪化は運河地域全体で課題となっている。

運河の水辺空間の環境改善への取り組み

もともと運河は産業や海運のためにつくられ、機能していたものであり、そのため、以前は水質や自然環境については余り顧慮されない存在であった。このため、全国的に運河といえは、油の浮いたよどんだ水、また暗がりが多く足を踏み外して落ちかねない、といったイメージがなお払拭されておらず、環境的には負のイメージが強い。

ウォーターフロントの時代となって、運河地域は、当初は来訪者のため、そして現在では定住者のための生活地域に生まれ変わりつつある。このため、運河周辺の自然環境についての関心が高まりつつある。

運河沿いに自生している夏みかんを利用したマーマレードづくりが進められているのもその例である。農村部であれば夏みかんの自生はそれほど珍しいことではなく、よっぽどの事情がなければ地域ブランドにはつながらないと思われるが、一般的な運河のイメージとの対比では、意外で新鮮な事実として住民に受け取られ、さらに対外的にも大きなインパクトを与えられるものと捉えられている。

このような背景の下に、運河地域の水辺環境の改善を目指して、いくつかの取り組みが行われている。

ここでは、カルガモプロジェクト、認定NPO法人海塾、運河を美しくする会の取り組みを紹介する。

カルガモプロジェクト（DVD「カルガモプロジェクト」2009年などによる）

背景

運河に群れる水鳥としては、キンクロハジロ、ホシハジロ、マガモ、カルガモなどがいるが、

多くが渡り鳥であるのにカルガモは例外的に留鳥。カルガモに着目して、ひなを孵せないか取り組むこととなった。

経緯

- ・港区芝浦港南地区総合支所の区民参画組織「港区ベイエリア・パワーアッププロジェクト」の取組として発足
- ・2006（平成 18）年から活動開始、2007（平成 19）年営巣場所の企画、設置
- ・2008（平成 20）年 5 月、カルガモの赤ちゃん誕生

認定NPO法人海塾（HP：<http://www.umijuku.net/>）

団体紹介

「東京都港区の水辺を活動拠点とする団体です。水辺のレジャーに関するルールやマナーの啓蒙を行うと同時に、水辺の環境学習、調査・研究などを通じ、人々に水辺での楽しみ方を提案し、人々が安全で楽しく水辺に親しめるような環境を創造することを目的として活動しています。...我々の提唱する「東京水辺再生プロジェクト」とは、行政と市民と企業が共に連携を図り、泳げる海の再現を目指すプロジェクトです。」（海塾 HP より。以下、同様）

取り組んでいるプロジェクト

- * カルガモプロジェクト（このプロジェクトでは、カモの生態を調べ、世界初となるカルガモの人工巣を設計しました。運河の上に設置された人工巣では、初年度から沢山のヒナが誕生し、多くのカルガモが戻ってきてくれました。）（上段の囲みを参照）
- * 生き物プロジェクト（生き物にとって棲みよい水辺環境を調べることを目的に、国土交通省、東京都港湾局、港区が住民と共にやっているのが「生き物の棲み処づくりプロジェクト」、また、芝浦アイランドの西岸の鹿島建設が設計した長さ 200m の通称「カニ護岸」と呼ばれる近自然型ブロックを備えた護岸、この護岸を管理運営できる体制作りに取り組む）
- * カヌー（港区の NPO 活動助成事業として水辺環境の自然観察・学習会、親子でカヌー体験などを開催）
- * 水辺イベント（水辺フェスタ、海上フローティングプール、「東京みなと祭」の中の行事の一つとして開催されるシーバスのキャッチアンドリリース大会を主催など芝浦運河の水にまつわるイベントを多数手がける）
- * 運河めぐり（ガイドを住民の要望にこたえ、長年、NPO 海塾の代表が担当）
- * 水質浄化プラン（行政に対し、様々な水質浄化プランを提案）

運河を美しくする会（HP：<http://www.tokyowaterfront.jp/index.html>）

概要

平成 2 年に設立された芝浦・港南・天王洲地域に所在する民間企業と法人団体によるボランティアの会。当初は、『「芝浦運河を美しくする会」は、港・港南地区の運河および周辺地区を美しくするために、会員企業相互の連絡連携により、基礎的かつ総合的な調査研究を行い、長期的な視野に立ち地域社会貢献を目指すこと』を目的に、具体的には、『幹事会を中心に随時設定された分科会活動により、さまざまな調査研究を行い、関係行政機関や地元の方々と協力して地域貢献をしていくこと』として、スタートした。その後、平成 4 年秋に「芝浦運河を美しくする会」から現在の「運河を美しくする会」に名称を変えて現在に至っている。

会員企業・団体（2009年8月現在）

東京ガス（株）、清水建設（株）（株）東芝、五十嵐冷蔵（株）（株）関電工、寺田倉庫（株）（株）シーライン東京、(財)港湾空間高度化環境研究センター、東京コカ・コーラボトリング（株）、東京倉庫運輸（株）、芝浦工業大学、NTT都市開発株式会社／協力企業：（株）東京久栄

これまでの活動

- ・ 運河と水辺の写真フェア（毎年、受賞作品を選定）
- ・ 小学生向け「運河講座」授業
- ・ 運河調査の実施
- ・ 「東京ベイ・クリーンアップ大作戦」への協賛などの地域貢献活動
- ・ イラストマップ、運河お散歩MAPの作成・配布

親水空間としての運河の機能向上への取り組み

住民が運河の水辺ともっと親しむことができるような仕掛けづくりへ向けた取り組みも行われている。ここでは東京都が推進している運河ルネサンス協議会と芝浦コミュニティカフェ CANAL CAFE（カナルカフェ）＆芝浦浮棧橋を紹介する

芝浦運河ルネサンス協議会（東京都 HP：

<http://www.kouwan.metro.tokyo.jp/yakuwari/unga-rennaissance/index.html>）

趣旨

東京都港湾局が推進している「運河ルネサンス構想」のための協議会。「運河ルネサンス構想」は、江戸時代以来の水との密接なふれあいを「運河」によって回復して、居住者や来訪者、そこで働く人々に憩いと賑わいの場を提供しアーバン・リゾート・ネットワークの形成をめざすものとされる。

歩み

2005年に天王洲地区・芝浦地区の地域協議会が登録され、運河ルネサンス計画づくり、運河ルネサンス推進地区の指定、運河まつり等イベントの開催が進んだ。2006年には晴海地区・朝潮運河ルネサンス協議会が発足。

また特例的な水域占用許可の規制緩和として天王洲地区の水上レストランが対象となった。

目標と推進方針（東京都港湾局「運河ルネサンスの推進方針について」2005年）

（目標）

- ・ 観光振興に資するようになぎわいの創出
- ・ 新たな運河利用の発掘等、運河の魅力向上
- ・ 周辺地域の活性化

（推進方針）

- ・ 地域の特性を生かし背後のまちづくりと一体となった運河の活用及び整備を推進する
- ・ 地元区、住民、企業、NPO など地域と連携を図る
- ・ 新たなニーズに適應した水域占用などの規制緩和を行う
- ・ 護岸や周辺建築物等の緑化、遊歩道の整備、水質浄化等、良好な水域景観を創造する
- ・ 運河の新たな魅力を広く PR する

芝浦コミュニティカフェ CANAL CAFE（カナルカフェ）&芝浦浮棧橋

港区ポータルサイト（産業振興課 産業振興係）より（http://www.city.minato.tokyo.jp/release/list/200906/090612canalcafe_and_ukisanbasi/index.html）

運営：芝浦商店会（会長：金原時成、会員店舗：110店）

内容

芝浦地域のコミュニティ活性化と商店街振興を図るため、地元 芝浦商店街が 5 年越しで計画・実現した取り組み

・芝浦コミュニティカフェ CANAL CAFE（カナルカフェ）

日本発！モバイル（移動型）コミュニティスポット。軽自動車改造した CANAL CAFE 号 2 台で、各種おつまみやスナック、ビール、ソフトドリンクなどを提供。営業時間は日曜・祭日を除く、午後 5 時頃から午後 9 時頃まで（雨天の場合は営業しないこともあり）。場所は新芝運河沿い新芝橋のたもと。2009 年 6 月 14 日オープン。冬の間は休業。2010 年は 3 月オープン予定・芝浦浮棧橋（予定）

場所は CANAL CAFE から徒歩 2 分の「渚橋」下の運河。子どもたちが水辺で自然環境について学習するイベントや、「朝市」・「フリーマーケット」など地域の方が集いコミュニティを深めるためのイベントなどを、開催する予定

事業

東京都「運河ルネサンス」・港区「商店街変身戦略プログラム」対象事業

さらに最近では、上述の通り、芝浦・海岸の運河沿い（公共用地及び民間所有地）に夏みかんが自生している点に着眼し、マーマレードをつくり地域ブランドにしようとする試みもはじまっている。すでに、芝浦 2 丁目の洋菓子店がこのマーマレードをつかった芝浦ブランドのお菓子を製造販売するというような動きも出ている。

また、物流上の運河の機能が低下した一方で、人流上の運河の可能性を模索する動きもある。すでに水上バスが芝浦と台場の間を定期的に結んでいるが、さらに、これまでの屋形船に加え、レストラン・レジャー施設のチャーター・ボート、水上タクシーやマイカーならぬマイボートによるクルーズ、そしてそのための船着き場の設置へむけた取り組みが見られる。中央区では日本橋架橋 100 周年に合わせ、橋のたもとにある広場周辺に公共船着き場を整備する予算案 1.9 億円を計上した（東京新聞 2010 年 2 月 7 日）。水辺に憩いの空間を整備するとともに災害時に帰宅困難者や物資の水上輸送など街の防災機能を高めることも目的とされている。こうした船着き場が「水都・東京」で増えてくれば、船やボートで芝浦港南地区を発着する人流も盛んになると期待される。道路交通法、駐車場法のような水上交通のルール化が必要との声もある。

湾岸、運河とレインボーブリッジがおりなす新時代の景観

縦横に展開する運河と橋の街、その街の上を縫うようにモノレールが走る不思議な空間。そして、東日本最長の吊り橋であるレインボーブリッジ（東京港連絡橋）がお台場にかけて架けられ、海面から 50m 以上上空の長い吊り橋とゆりかもめが通るループが湾岸の水辺

や超高層ビル・マンションとおりなすコントラスト。加えて、お台場臨海公園から望む巨大都市東京の夜景。こうした芝浦港南地区の景観は、全体が、世界最大の都市東京の湾岸に作り出された壮大で複雑な人工親水空間として他に類のないものである。

そのため、この景観は多くの写真コンテストの題材として、プロアマを問わず取り上げるに至っている。

本地域とつながりの深い「運河を美しくする会」でも、「運河と水辺の写真フェア」を毎年開催し、受賞作品を選定しており、同会の HP でも受賞作品を公開している（<http://www.tokyowaterfront.jp/fea/outline.html>）

また、この景観は、テレビドラマや映画の映像シーンにとっては、見栄えのするものであり、芝浦港南地区が、トレンドドラマ、西部警察などテレビ・映画のロケ地として数多く取り上げられる理由となっている。

こうしたことから、湾岸、運河とレインボーブリッジがおりなす新時代の景観自体が、芝浦港南地区の重要な地域資源の 1 つとなっているといえよう。

第 4 章 芝浦港南地区の住民の現状と意識

1. 人口動向

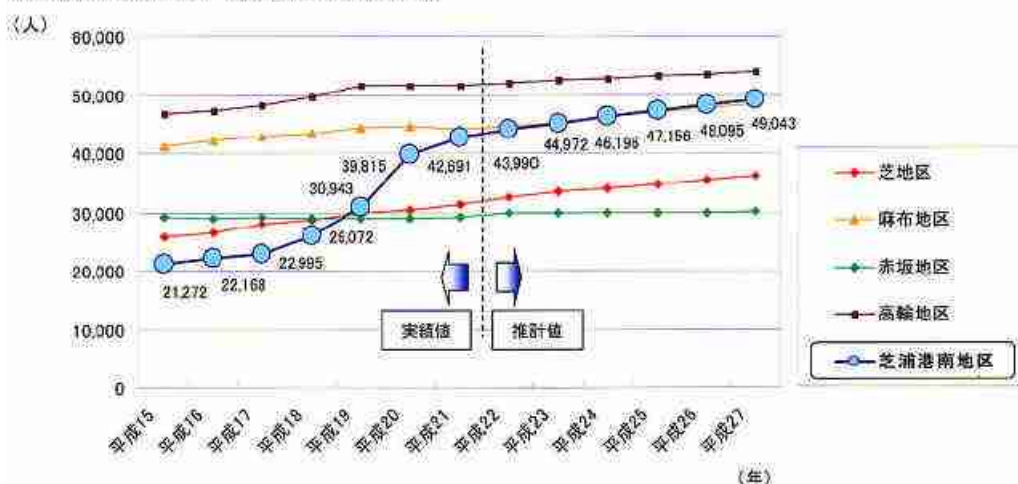
(1) ベイエリアにおける人口増

芝浦港南地区の人口動向

芝浦港南地区における近年の最大の変化は、湾岸地域の超高層マンション等への入居者の急増である。これはバブル経済期における都心から郊外へと向かう人口流出が、1990年代終わりごろから、一転して逆に都心回帰へと向かった現象の一環をなすものである。

この結果、芝浦港南地区の人口は、2003（平成15）年には21,272人であったが、2009（平成21）年には42,691人、2010（平成22）年には44,407人（いずれも1月1日現在）と、この6～7年で2倍以上となった。区内の5地区の中で最も少ない人口であったものが、現在は、麻布地区に次ぐ第3位、いずれ、高輪地区に次ぐ第2位となると推計されている（次ページの図参照）。

港区の地区別人口の推移と将来予測



(注) 住民基本台帳ベース。各年1月1日

(資料) 港区芝浦港南地区総合支所「港区基本計画・芝浦港南地区版計画書」2009年

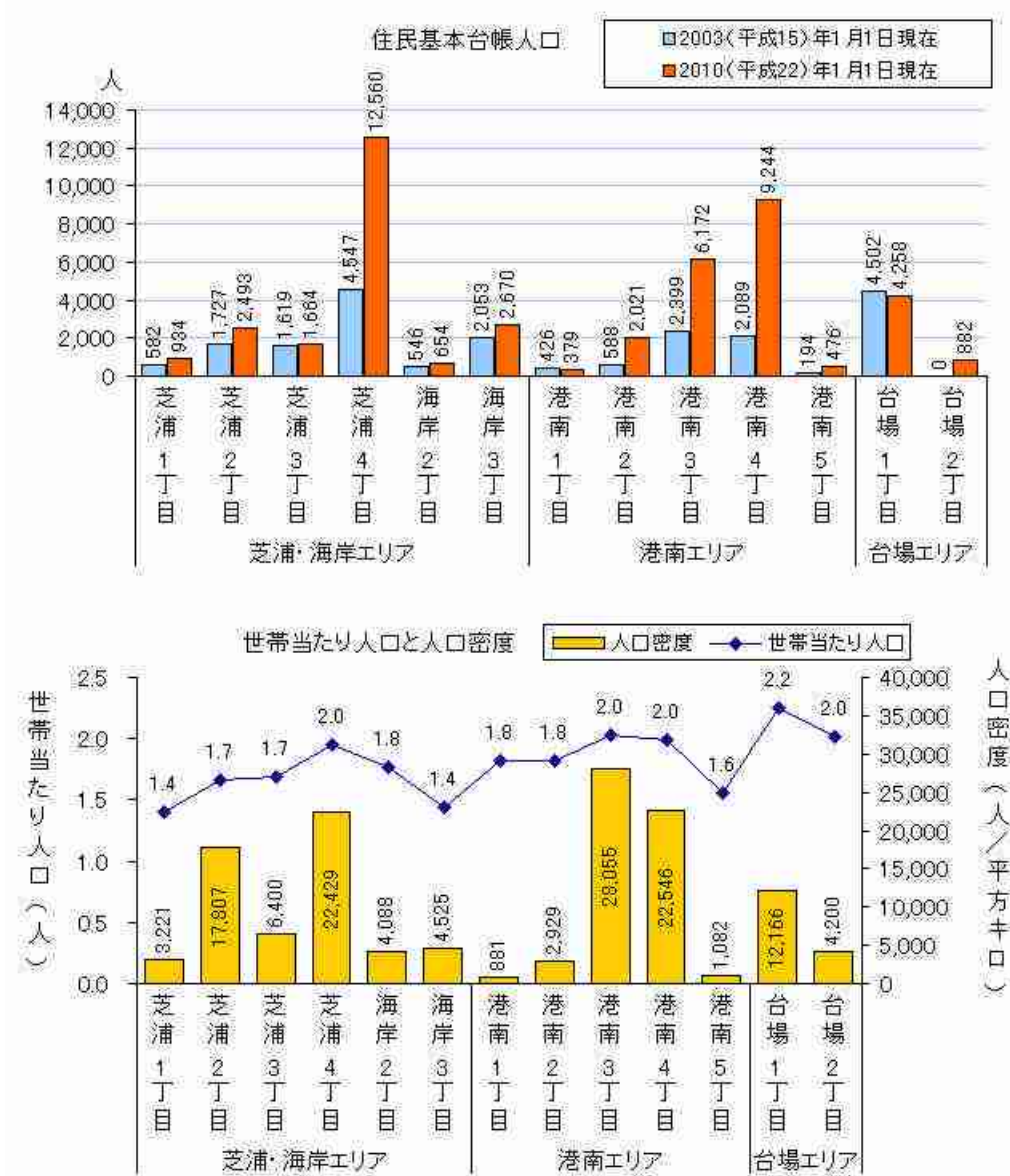
各エリアの人口動向

次ページの図で、町字別の人口動向を見ると、特に、芝浦4丁目、港南3丁目、港南4丁目の人口が急増している。芝浦港南地区に建設された超高層マンションとして代表的であるのは2006～2008年に完成した4棟の「芝浦アイランド」のマンション、そして2007年に全体が完成した「ワールドシティタワーズ」3棟である。前者が芝浦4丁目の人口増、後者が港南4丁目の人口増の多くを占めている。

お台場については、都都市整備局、都住宅供給公社、都市再生機構による賃貸住宅である「シーリアお台場一番街、三番街、五番街」及び民間の分譲賃貸マンションである「ザ・

「タワーズ台場」が人口の受け皿となっている。

芝浦港南地区の町字別の状況



(注) 世帯当たり人口と人口密度は2010年1月1日現在。ただし使用した面積は2000年国勢調査の値。
(資料) 港区HP(統計)

町字別の人口密度は、港南 3 丁目が高く、港南 4 丁目、芝浦 4 丁目、芝浦 2 丁目と続いている。

超高層マンションへの入居者は基本的には子どもをつれたファミリーが多く、新しい入居者の多い芝浦 4 丁目や港南 4 丁目の世帯当たり人口は 2.0 人と旧来から人の多かった地域よりも多い。公的賃貸住宅の多い台場 1 丁目の世帯当たり人口がさらに多いのは公営住

宅の入居条件によると思われる。

代表的な芝浦港南地区の高層マンション

芝浦アイランド（芝浦 4 丁目）

以前、都電の修理工場などがあった四方を運河で囲まれた地区で、都市基盤整備公団（現・都市再生機構）と三井不動産が中心となって進めた街区開発である。分譲・賃貸合わせ約 3,800 戸のグレードの高い共同住宅の他、商業施設（大丸ピーコックなど）、フィットネス施設、クリニックモール、幼稚園・保育園一体化施設などから構成され、2008（平成 20）年 9 月全体竣工した。島を一周する遊歩道のほか、お台場、豊洲と結ぶ水上バス「アーバンランチ」の発着所がある。以下の 4 棟の超高層マンションからなる（三井不動産 HP より）。

- ・ ケープタワー 分譲住宅、48 階建て、1,095 戸、2006（平成 18）年 12 月竣工
- ・ グローヴタワー 分譲住宅、49 階建て、833 戸、2007（平成 19）年 3 月竣工
- ・ エアタワー 賃貸住宅、48 階建て、871 戸、2008（平成 20）年 3 月竣工
- ・ ブルームタワー 賃貸住宅、48 階建て、964 戸、2008（平成 20）年 9 月竣工

ワールドシティタワーズ（港南 4 丁目）

住友不動産が分譲している大規模超高層マンションであり、42 階建、アクアタワー（A 棟）・ブリーズタワー（B 棟）、キャピタルタワー（C 棟）の 3 棟 2,090 戸からなる。総戸数 2,090 戸は、単一事業主一団地認定民間分譲マンションにおいて日本最大。2007（平成 19）年 2 月に全体が竣工した。棟内店舗としては、スーパーマーケット・マルエツ（24 時間営業）、総合クリニック、歯科医院、認可保育園、カフェ、調剤薬局、クリーニング店がある。

シーリアお台場（台場 1 丁目）

都営住宅、都住宅供給公社、都市再生機構（旧住都公団）の賃貸住宅

- ・ シーリアお台場三番街 1996（平成 8）年 3 月開業、33 階建て
- ・ シーリアお台場五番街 1996（平成 8）年 4 月開業、14 階建て
- ・ シーリアお台場一番街 2001（平成 13）年 3 月開業、32 階建て

ザ・タワーズ台場（台場 2 丁目）

民間会社（オリックス・リアルエースト、東京建物、阪急不動産）による分譲賃貸マンション、33 階建て、525 戸、2006（平成 18）年 8 月完成

（資料）各住宅会社 HP など

（ 2 ）サラリーマンの街（昼間人口）

このように芝浦港南地区の人口（夜間人口）は急増しているが、芝浦港南地区はもともととはオフィス街に通勤してくる者（昼間人口）の多いサラリーマンの街であった。

2005 年の国勢調査によると芝浦港南地区の昼間人口は 144,974 人であり、夜間人口 27,727 人に対して昼夜間人口比率は 523、すなわち昼間人口は夜間人口の 5 倍となっていた。人口が 4 万人を越えた現在でも基本的にはこうした性格に変化はない。

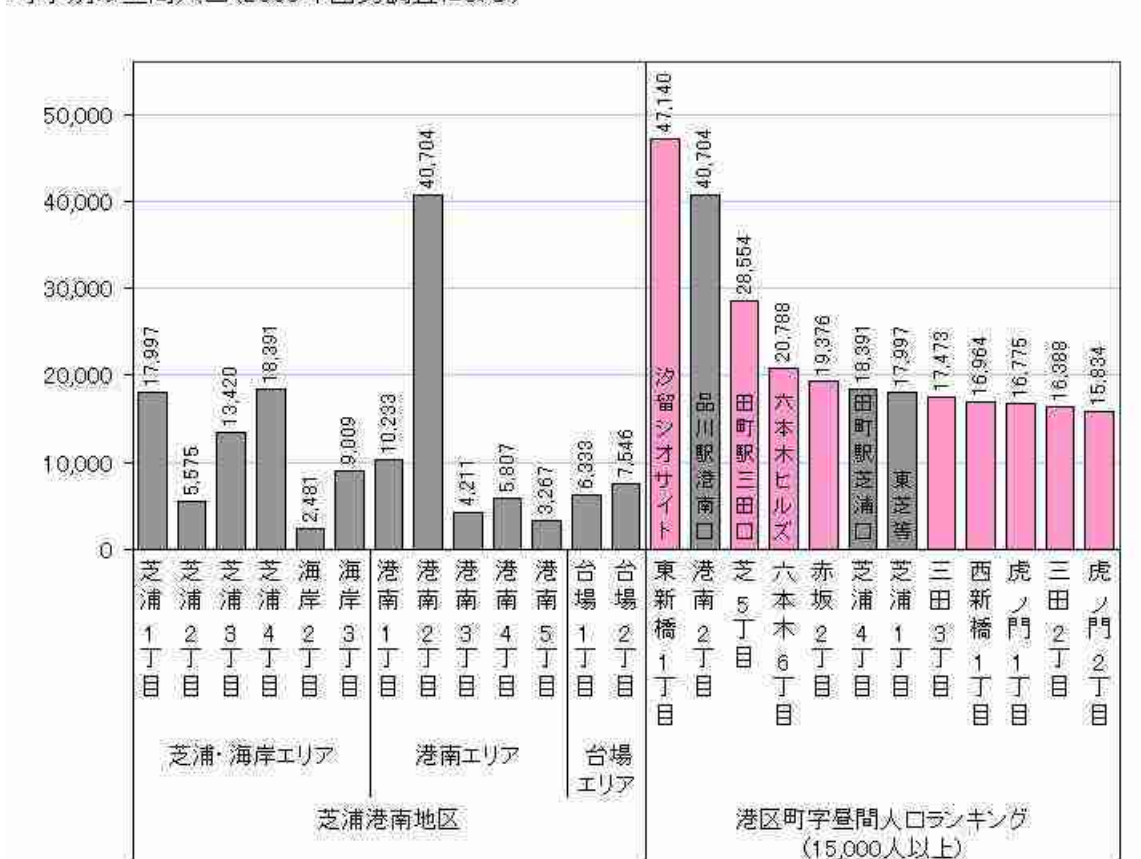
芝浦港南地区の町字別昼間人口を見ると品川駅港南口を抱える港南 2 丁目が 4 万人と最も多く、田町駅芝浦口を抱える芝浦 4 丁目が 1.8 万人、浜松町駅からの通勤客の多い東芝ビ

ルやシーバンスを抱える芝浦1丁目が1.7万人で続いている。

港区の中で昼間人口が多い町字のランキングを調べると、第1位は汐留シオサイト(2004年誕生)のある東新橋1丁目の4.7万人であるが、第2は、品川駅港南口とその周辺のオフィス街を抱える港南2丁目である。この他、田町駅芝浦口を抱える芝浦4丁目、浜松町から専用歩道で行ける芝浦1丁目も6位以内に入っている。

なお、浜松町駅と芝浦1丁目を結ぶ歩道橋がつくられたのは1983(昭和58)年のことであり(同駅と海岸1丁目を結ぶ跨線橋とともに)これが、町の発展を一層促した(芝浦一丁目町会1992)。

町字別の昼間人口(2005年国勢調査による)



(注) 国勢調査の港区昼間人口を事業所・企業統計や学校調査によって町字に振り分けて算出
(資料) 港区HP(統計)

従って、芝浦港南地区の田町駅前を中心とする芝浦町会や品川駅前を中心とする品川港南商店会には、物販というより飲食・サービス関係の加盟店が多く、こうしたサラリーマンの街としての商店会の性格が強かった。

一方、夜間人口、すなわち定住人口の買物需要に対しては、以前は人口が少なかったため個別商店の集積度が低く、近年も人口は急増したものの超高層マンションには大型スー

パーなどの大型店がセットで進出したためなかなか個別商店が育たないというジレンマを抱えている。

定住人口にとっては、もちろん買物の利便性に優れた大型スーパーは必要であるが、古くからの私鉄沿線駅前にあるような八百屋、肉屋、魚屋といった生鮮食品の個店や共同店舗、中小スーパーの集積がないと値段の面、また買物の楽しさや人と人とのふれあいの楽しさといった暮らしの豊かさの面でやや問題がある。

また、地域づくりにとっては、住民との接点がある昼間仕事をしている商業者は、防犯、高齢者・子どもの見守り、まつり・イベント、学校PTA活動など、広い意味でのコミュニティ機能にとって重要な役割を果たしてきた。実際、芝浦港南地区の各町会のリーダーは商店会のリーダーと人的にダブル面が強い。

これまでサラリーマン需要に依拠してきた商業・飲食・サービス業は、これからは増加したウォーターフロントの住民の需要を取り込んでいく必要がある。また、町会などコミュニティ組織についても新旧住民の協働活動が様々な点で必要とされている。各マンションには自治会が形成されており、また環境改善のためのNPOや趣味のサークルなども多くなっている。これらと旧来からの町会活動との協調と融和がこれからの課題であるといえよう。

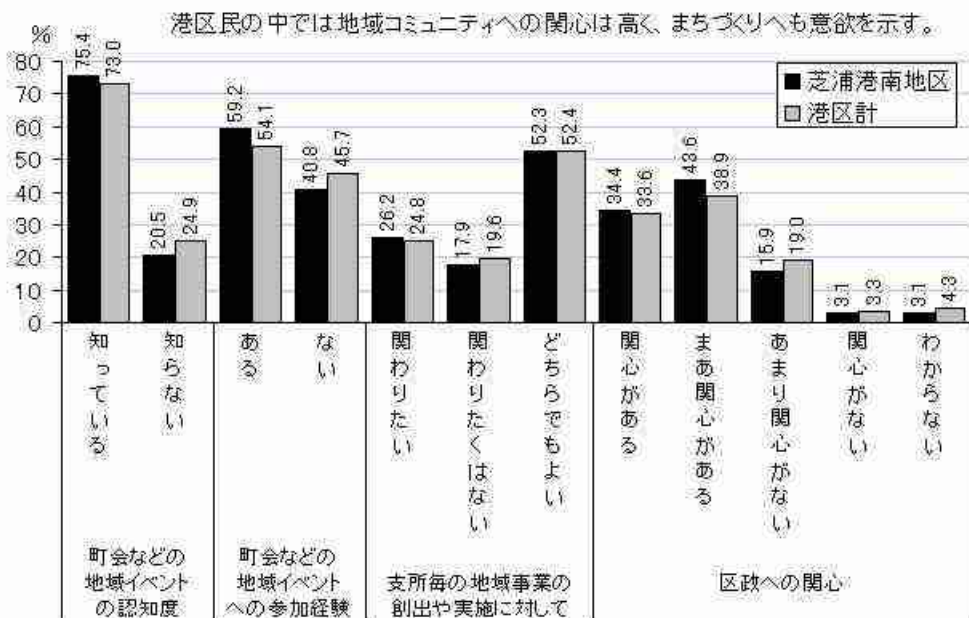
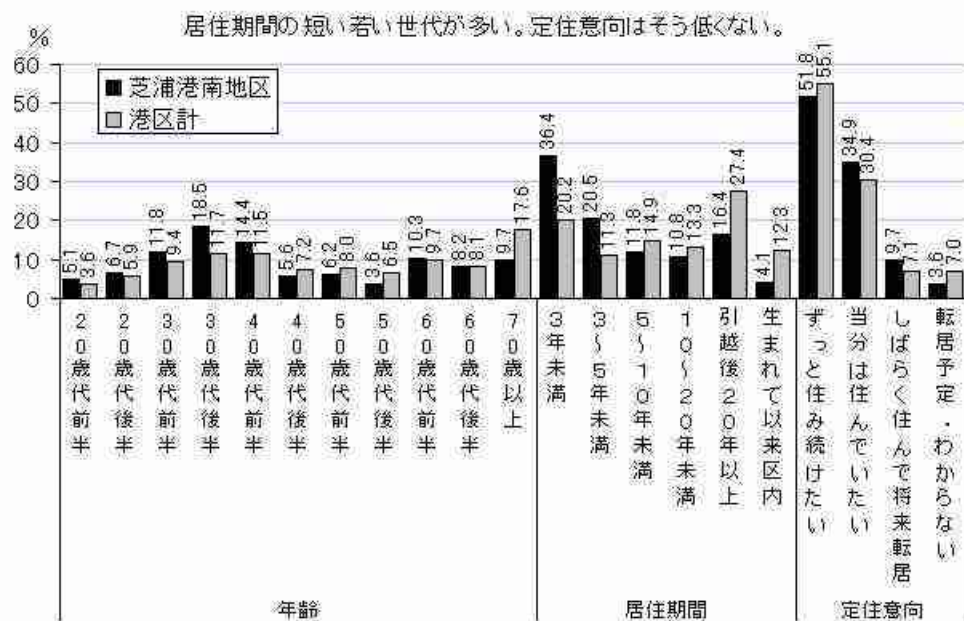
こうした意味から、本報告書が取り上げている地域ブランドづくりの果たす役割は独自で重要であるといえよう。

旧来の地域団体の拠点は駅周辺にあり、新しい住民団体の拠点はウォーターフロントにあるので、両者の接点となる運河が芝浦港南地区の新しいコミュニティづくりの舞台となると考えられる。実際、前章で紹介した「芝浦運河まつり」、芝浦商店会による「芝浦コミュニティカフェ CANAL CAFE（カナルカフェ）&芝浦浮棧橋」、あるいは新しいマンション住民が多く参加している「カルガモプロジェクト」はこうした方向の試みといえよう。

2. 定住意向とコミュニティ意識

港区世論調査では、毎年、住民の定住意向やコミュニティ意識を調査している。以下には、2009年の結果（次ページ）を、芝浦港南地区の住民について調べることとする。

芝浦港南地区住民の特性とコミュニティ意識（港区民世論調査より）



（注）20歳以上の港区民2000人を対象とし2009年8月に行われたアンケート調査（有効回収率45.6％）の結果である。回答数911票のうち芝浦港南地区は195票である。

（資料）港区「第27回港区民世論調査」2009年12月

定住意向を見る前に、年齢構成と居住期間を同調査によって見てみると、転入人口は比較的若い世代が多いので、港区全体と比較して、特に 30 歳代後半から 40 歳代前半の住民が多くなっている。当然こうした世代は子どもを持つ世帯が多いので子どもの人口も急増している（なお 60 歳代の人口の比率もこの世論調査では港区全体を上回っているが、住民基本台帳の年齢構成をみるとむしろ港区全体を比率的に下回っており、年齢別の回答率の違いが影響していると考えられる）。

居住期間では、新しい住民が多いため、3 年未満が 36.4%と港区全体の 20.4%を大きく上回っている。さらに 3～5 年未満層も 20.5%と港区全体の 11.3%より多くなっている。新しい住民が地域に根づくためには大体 10 年かかるといわれるが、今の時期がまさに新しい住民が地域との新しいつながりを深める大切な時期といえよう。

定住意向については、「ずっと住み続けたい」は 51.8%と港区全体の 56.1%よりやや低いが、「当分は住んでいたい」は 34.9%と港区全体を上回っている。超高層マンションの住民であるといっても定住意向が特に低いとはいえない。

次に、コミュニティ意識を探るため、地域イベントへの参加状況等についての回答結果を見てみよう。

町会など地域イベントの認知度については、「知っている」が 75.4%と港区全体を上回っている。また町会などの地域イベントへの参加経験は「ある」が 59.2%と「ない」の 40.8%を上回っている。また港区全体と比較しても「ある」の比率は高くなっている。

支所毎の地域事業の創出や実施に対しての意向を見ると、「関わりたい」が 26.2%と港区全体の 24.8%を上回っている。区政への関心も「関心がある」「まあ関心がある」が港区全体を上回っている。

こうした結果は、芝浦港南地区の住民のコミュニティ意識が港区全体と比較して前向きであることを示している。もちろん、子どもの多い世代が相対的に多い影響もあると考えられるが、居住期間が短い割には、いな居住期間が短いからこそ地域への関心が高まっていると評価することができよう。

こうした新しい住民を中心とした地域づくりへの強い関心を受け止めることの出来るような、この地域ならではの取り組みが求められているといえよう。地域ブランド創出への取り組みもこうした観点から位置づけていくことが望ましい。

3. 地域の景観やシンボルに対する意識

2009年の港区意識調査では、この年に特別の調査項目として、景観や地域のシンボルについての質問を行っている。地域ブランドと関わりが深いので、これらの調査結果についてもここでふれておくこととする。

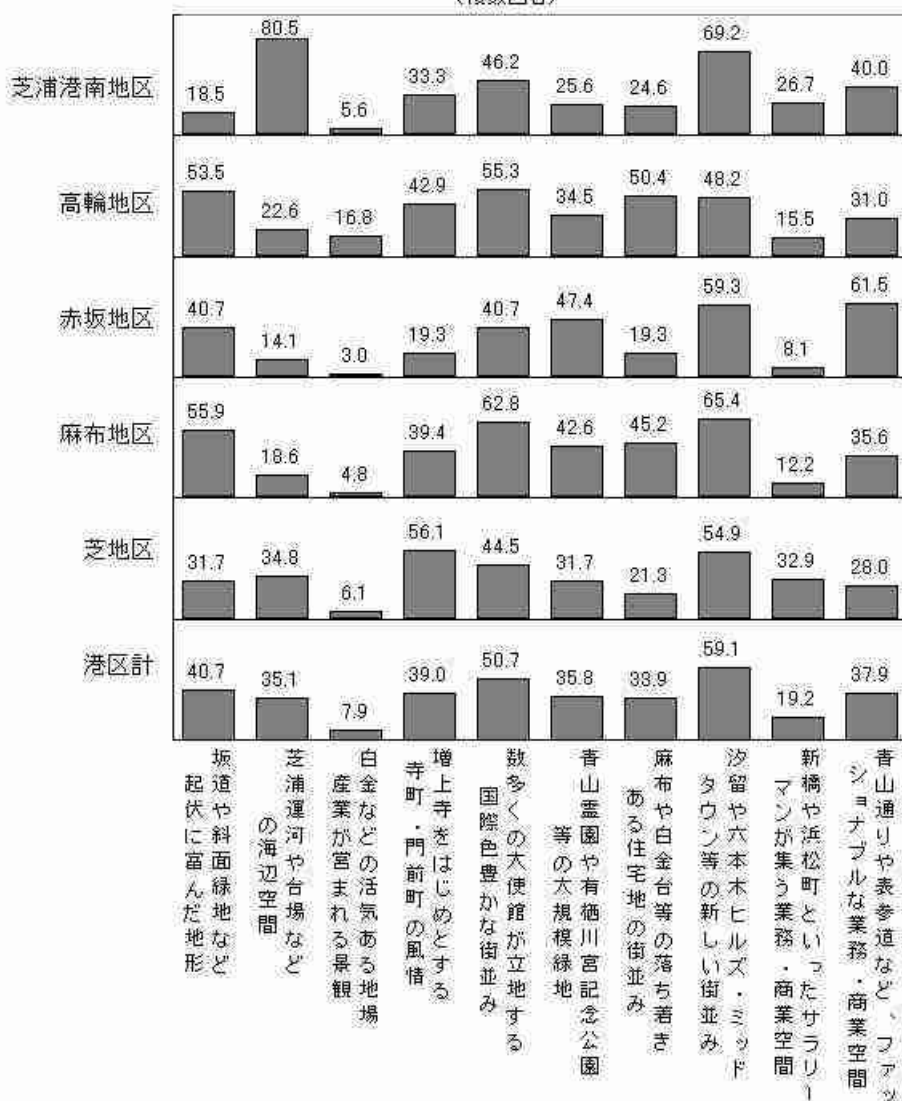


(1) 景観の特徴

港区の景観の特徴

単位: %

あなたが港区の景観を特徴づけるものとして思い浮かべるものはどのようなものですか
(複数回答)



(注) 20歳以上の港区民2000人を対象とし2009年8月に行われたアンケート調査(有効回収率45.6%)の結果である。回答数811票のうち芝浦港南地区は195票である。

(資料) 港区「第27回港区民世論調査」2009年12月

まず、港区の景観の特徴として何があげられるかという問に対する回答結果であるが、港区住民全体としては、最も多いのが「汐留や六本木ヒルズ・ミッドタウン等の新しい街並み」であり、第 2 位として「数多くの大使館が立地する国際色豊かな街並み」があげられている。第 3 位は「坂道や斜面緑地など起伏に富んだ地形」である

芝浦港南地区の住民の回答結果の特徴としては、他区では港区の主要な景観の特徴としてあげられてはいない「芝浦運河や台場などの海辺空間」を断然 1 位にあげている点が最も目立っている。運河・台場の水辺空間こそが芝浦港南地区固有の景観資源といえよう。

次に、「六本木ヒルズなど新しい街並み」を港区の景観上の特徴として挙げるものが実際にこれらの街並みがある麻布地区を上回り 5 区の中で最も高い点が目立っている。これは、芝浦港南地区には区外から最近移転してきた住民が多く、区外から見て港区で最も目立った最近の開発が取りあげられたためではないかと思われる。

(2) 地域のシンボル

港区のシンボルは何かという質問に関しては、港区民全体としては、何とんでも、「東京タワー」をあげる者が 88.8%と 9 割近くを占めており、圧倒的である。そして、第 2 は「増上寺・芝公園」の 42.3%、「レインボーブリッジ」の 41.8%が続いている。

港区の各地区は、「東京タワー」は共通で高い回答率となっているが、その他では、自分たちが住む地区のシンボルをあげる者の比率が高くなっている。

芝地区では「増上寺・芝公園」、麻布地区では「有栖川宮記念公園」、赤坂地区では「明治神宮外苑銀杏並木」をあげる者が相対的に多くなっている。

さて、芝浦港南地区であるが、当然、管内にある「レインボーブリッジ」への回答率が 70.9%と港区全体の 41.8%を大きく上回っている。さらに、「芝浦港南地域の運河」も港区全体では 9.3%と低いのに、芝浦港南地域では 28.2%とかなり高くなっている。

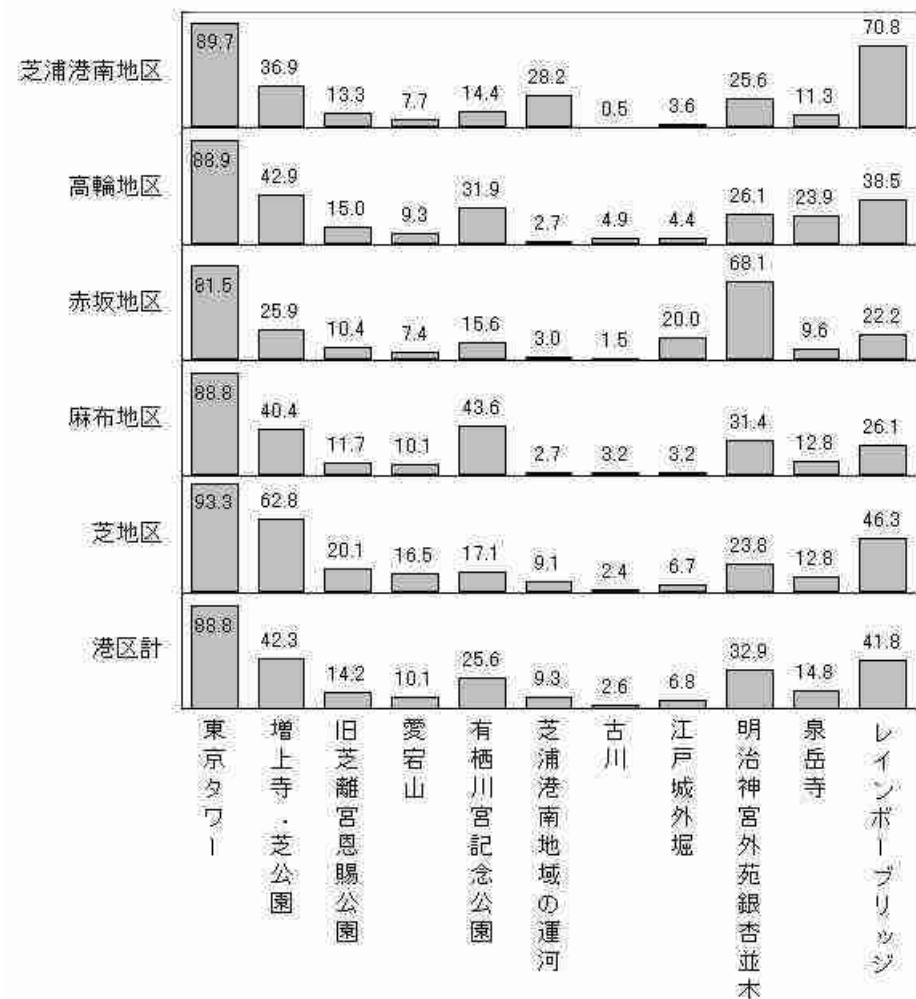
ただ、「運河」は芝浦港南地区の景観上の大きな特徴であるにも関わらず港区のシンボルとしてあげる者が予想外に少ない。芝浦港南地区でも「運河」よりも「増上寺・芝公園」をあげる比率の方が多いのである。

芝浦港南地区の運河は、景観上の大きな特徴となっており、また大きな可能性をもっているのかかわらず、地域のシンボルの機能としてはなお弱いことがうかがわれ、地域シンボル、地域ブランドとしての活用が今後の大きな課題となっているといえよう。おそらく、地域外の人々には運河の街である点が知られていないことが、こうしたアンケート結果に結びついているのだと考えられる。

港区のシンボル

単位: %

あなたが港区のシンボルとして思い浮かべるものは何ですか(複数回答)



(注) 20歳以上の港区民2000人を対象とし2009年8月に行われたアンケート調査(有効回収率45.6%)の結果である。回答数911票のうち芝浦港南地区は195票である。

(資料) 港区「第27回港区民世論調査」2009年12月

第5章 地域ブランドの創出へ向けて

１．ジャンル別の地域資源の現状と今後の可能性

これまで地域資源の抽出を行い、歴史や現状のなかでそれらの地域資源を整理してきた。ここでは、以上の整理をもとに、各地域資源をジャンル分けし、それぞれの地域資源の現状を大きくまとめるとともに今後の地域資源活用の可能性について展望する。

（１）自然再生系の地域資源

芝浦港南地区は港区のＪＲの外側の湾岸に位置し、域内の多くが埋立地からなっているため自然資源としては海そのもの以外には目立ったものがない。しかし、自然を求める住民の期待を背景に次のような自然再生系の地域資源が生まれてきている。

自然再生系の 地域資源	<ul style="list-style-type: none">・夏みかん自生地、マーマレードづくり・カルガモプロジェクト・お台場海浜公園・海苔づくり（台場エリア）・鳥の島
----------------	--

芝浦港南地区の最大の地域の特色となっている運河そのものについても、水質の向上をめざした取り組みや運河を渡る風を感じながらのクルージングの取り組みに関しても同様の観点でのとらえ方が可能であろう。

人工的につくられたとはいえ、お台場海浜公園は都心から極めて近い場所で自然を感じられる場所として貴重であり、人気が高い。実際、デートスポットやドラマ・映画のロケ、写真撮影などで大いに利用されている。品川のかっぱ祭りで浅瀬に神輿を乗り入れる場面がお台場海浜公園の海岸で実施されているのも、近くにそれに適した浅瀬の土地がないからである。

また、当地区の自然再生系の資源は、自然の豊かな地域の人々からすれば、ささやかなものと見なされる場合も多いが、地元住民にとっては極めて重要な地域資源として評価される可能性が高い。

（２）グルメ系の地域資源

芝浦港南地区は農林漁業地域ではない。従って、地域産品のブランド化を通じた産地づくりという方向性とは無縁である。しかし、当地域の商業サービス業には昼間人口向けの飲食店関係が多い。商店会の主力は飲食業となっている。オフィス需要に対応した駅前の

飲食店に加えて、ベイエリアには、ウォーターフロント、リバーサイドの立地を生かしたレストランの可能性が高く、すでに台場エリアや隣接する天王洲アイルなどではおしゃれな飲食店がかなり集積している。従って、芝浦港南地区名物のご当地グルメを地域ブランドとして開発できれば経済効果は大きい。

特定のエスニック料理や運河ビールといった新しい地場産品を開発することも可能であるが、歴史に題材を求めれば、江戸時代の漁業地域に由来する「芝海老・芝煮」の潜在ブランドがあり、また、屋形船や船宿の伝統も残っていよう。こうした潜在資源を活用して芝浦料理、ベイサイド料理が開発・振興出来れば効果は大きいと考えられる。

さらに品川港南口の食肉市場・芝浦と場を、現在築地市場が魚のメッカとして機能しているように肉のメッカとして活用すれば地域資源としての潜在力は非常に大きいと考えられる。芝浦食肉市場直送の肉料理をベイサイド・ブランドとして定着させることができれば、効果は一層大きいと思われる。

(3) 景観・観光系の地域資源

芝浦港南地区のウォーターフロント（水辺環境）を構成する運河、橋りょう、レインボーブリッジ、高層建築、超高層マンション、モノレール、ゆりかもめ、台場エリア、水上バスは、現代の東京の湾岸を象徴する独特な景観をつくりだしており、これ自体が、大きな観光資源となっている。実際、こうした資源を活用して、テレビドラマや映画のロケ地、写真撮影地として大いに利用されている。

こうした景観資源と季節毎のビュースポットに、レストラン・カフェや以下で述べるような歴史的・文化的な見学施設を加え、それらを適切につないだ観光周遊ルートを増やすことによって、観光地域としての一層の発展を望むことが可能である。モノレールや運河地域を共有している品川区や大田区など以南の地域や江東地域など以西の地域との広域連携もまた有効な手だてであろう。また既存の移動手段に加え、水上タクシーや個人クルーズなど水上交通のネットワークを増やしていくことも重要な課題となっている。

個々のベイエリアブランドはこうした景観・観光ネットワークの中でさらに活用可能性が高まると考えられる。また、観光ボランティアガイドの制度と組み合わせ、住民が参加する仕組みをつくれれば、来訪者にとって地域の魅力が向上するばかりでなく、住民自身が自ら住んでいる地域に愛着をもつ地域アイデンティティの向上にもつながる。

(4) 発祥地系・産業遺産系の地域資源

芝浦港南地区は東京の臨海部にあって我が国の文明開化と近代産業を推進した地域である。このため、第3章5で紹介したように、鉄道の発祥にはじまる様々な事跡を抱えている。これらは、隣接地域を含め、発祥の記念碑として残っているほか、現在でも後継施設が残っている場合が多い。

発祥記念碑	<ul style="list-style-type: none"> ・ガス創業記念碑（銀座のガス灯） ・南極探検隊記念碑 ・放送記念碑
施設	<ul style="list-style-type: none"> ・品川駅（鉄道の発祥） ・東芝本社（機械産業の発祥） ・少年野球場（プロ野球の発祥） ・芝浦アイランド・船路橋（都電修理工場） ・芝浦食肉市場（肉食の発祥）

文明開化や近代産業の範疇には入らないが、品川台場も近代における国防・海防施設の発祥ともいえる。また機械産業と関連して、隣接区域には日本労働運動の発祥記念碑もある。

発祥記念碑のないものは新たにつくり、域内の一連の発祥記念碑をつないだ見学ルートをつくれば、観光や教育にとって有意義なものとなろう。

さらに我が国の経済成長を支えた運河を基盤とする物流の産業遺跡ともいうべきものが残っており、一部は現役で活躍している。

産業遺産	<ul style="list-style-type: none"> ・運河・橋りょう全体 ・日の出棧橋、芝浦岸壁 ・第一芝浦丸（バージ船を牽引するタグボート） ・重箱堀（船溜りの石組み） ・倉庫街、ホイストクレーン ・芝浦舁船溜
------	---

さらに、現在は失われているが石炭置き場、臨港鉄道（芝浦貨物駅、可動橋）などの関連施設を含め産業遺産として地域ブランド化させる可能性がある。また、上記の発祥地系の地域資源と合わせ見学ルートに組み込むことが可能である。

（５）歴史再発見系の地域資源

芝浦港南地区は、第３章でやや詳しくまとめたように、江戸時代以前からの歴史の各時代を経て現在に至っている。各時代にさかのぼれる地域資源をまとめて地域ブランドにし、各時代が現在の芝浦港南地区にいろいろな形で影響を及ぼしていることが分かるように仕立てあげられれば、歴史再発見系の地域資源としての可能性が高まると思われる。

江戸時代	<ul style="list-style-type: none"> ・金杉浦・雑魚場跡 ・芝海老・芝煮 ・海苔づくり（以上、漁業の名残） ・台場公園、第6台場 ・第4台場跡石組み（以上、品川台場の跡）
明治の芝浦海岸リゾート時代	<ul style="list-style-type: none"> ・重箱堀（この時代を中心だった入間川河口部） ・協働会館（旧芝浦見番） ・細川力蔵事跡
明治末からの近代埋立開発時代	（5）「発祥地系・産業遺産系の地域資源」の各資源
ウォーターフロント時代	<ul style="list-style-type: none"> ・お台場海浜公園 ・ジュリアナ東京跡（運河沿い倉庫街のロフト文化）

（6）イベント系の地域資源

浅草の三社祭や浅草サンバカーニバル、札幌の YOSAKOI ソーラン祭りなど、伝統的なおまつりや新規にはじまった定期的なイベントは、全国から多くの観光客を集める場合、地域資源として大きく評価される。小さなお祭りでも長く続く由緒ある祭りの場合は、やはり、地域資源としての評価は高いといえよう。

イベント系の地域資源	<ul style="list-style-type: none"> ・芝浦港南地区水辺フェスタ（地域対抗ボートレース大会） ・芝浦運河まつり ・芝浦 canal café ・クラシックカーレビューイン港南 ・東京食肉市場まつり ・海鷹祭（東京海洋大学学園祭） ・港南ふれあい桜まつり ・お台場夏まつり ・御穂鹿嶋神社祭礼 ・御田八幡神社祭礼
------------	---

残念ながら芝浦港南地区には、こうした高い評価を得るようなお祭りやイベントはない。しかし、各町会、自治会で多く夏祭りが行われているほか、当地区の氏神・鎮守として現在域外にあるものの2つの神社があり、祭礼を催しており、かつては盛大なお祭りが催さ

れたという記録もある。さらに、最近になって、商店会主催のイベントや町会単位より広い地域を対象とするまつりとして水辺フェスタや芝浦運河まつり、港南ふれあい桜まつり、お台場夏まつりが行われるようになった。さらに、芝浦食肉市場の東京食肉市場まつりといった業務施設が地元交流をすすめるため開催しているイベントで多くの客を集めるものもある。

これらをさらに盛大にしたり、さらに新しいイベントを開発するなどして、芝浦港南地区を代表するおまつり、イベントに育てていくことは可能である。ただし、地元の人々の広い参加を得るためには、由来・由緒や趣旨への大きな共感が前提となろう。こうした地域のイベントは、コミュニティづくりに果たす効果が大きいため、もし活性化が可能となれば地域ブランドとしての価値は大きい。

2 . 地域ブランドづくりへ向けた地域資源の評価の視点

以上のような各ジャンルの地域資源の現状と今後の可能性をベースに、地域ブランドづくりへ向け、各地域資源をどう評価できるのかについてふれる。

第1章では、地域ブランドづくりの役割としては以下の4点をあげた。

地域ブランドづくりの4つの役割

地域産品の商品価値の向上 地域イメージの向上による地域経済の活性化 地域の魅力の向上と再発見を通じた地域アイデンティティの獲得 コミュニティづくりの契機

各地域資源の評価は、このうちどの役割に着目するかで大きく異なってくる。

(1) 自然再生系の地域資源の評価について

例えば、運河沿いに自生している夏みかんのブランド化を例にとると、の夏みかんやそれを加工したマーマレードの商品価値自体は、それほど大きなものがあるとは思われない。日本の農村地域であれば、ありふれた産品であり、マーマレード加工も家庭で簡単にいえるような方法であり、加工品がとりわけ目立った産品とはいえない。

の芝浦運河地域のイメージ向上の点からは、人工的な運河地域にもかかわらず、けなげに自生植物が育っているということからの視点では見逃されてしまう独特の価値がある。ただ、夏みかんとマーマレードが地域イメージの向上に役立つとしても、それが、大きな経済効果をもつということはなかなか考えにくい。もっとも、イベントや地域のおまつりで販売すれば、イベントの経費を少しは補う効果もあり、さらに、地域の菓子店が芝浦ブランドでマーマレードを使って売上げが上昇することも考えられる。しかし、経済効果としては、むしろ、地域住民がこれをおみやげにして他地域の友人・知り合い等に贈ることにより、むやみに高価なおみやげを購入する必要がなくなるという家庭経済上のメリットの方が大きだろう。

しかし、の効果は、経済効果以上のインパクトを地域づくりに与える。

無機質的な運河地帯のイメージから愛着をもてなかった地元地域に対して、夏みかんが自生していて、それがおいしい食品として食べられるのだという事実の発見により愛着がもてるようになれば、住みよい地域づくりにとって、大きな意義が認められる。

さらに、地域住民と町会や自治会やボランティア団体が行政、企業と協力して、夏みかんやマーマレードの地域ブランドづくりに取り組み、結果として、子育て活動との連携、コミュニティづくりの効果、地域防災力の向上につながる可能性も大きい。

このように の視点では余り評価できない地域資源であっても、 、あるいは の役割からは、非常に高く評価しうる可能性があるのである。

こうしたパターンは、自然再生系の地域資源に共通した傾向であると考えられる。

（２）景観・観光資源の評価について

次に、レインボーブリッジや湾岸の景観などの景観・観光資源については、すでに、地域のシンボルとして広く知られており、一級地域資源としてすでに評価が定まっている。域内に建設される高層分譲マンションの売り出しにはこうした景観・観光資源をPRするものが多く、そうした意味からは経済効果を充分発揮しているとも考えられる。すなわち の側面からは十分地域ブランドとして機能しているともいえる。

こうした景観・観光資源を改めて地域ブランドとして評価し直すとしたら、もっと地元での買物や消費を増やす手段として活用できないかという点と の役割として活用されているかどうかという点に注目する必要がある。前者としては、眺めのよい場所をレストラン等に活用できるかという課題であり、後者としては、もっとこれらの景観・観光資源を地域に住む住民の地元への愛着につなげられないかという課題である。

（３）歴史文化資源・産業資源の評価について

歴史文化資源や産業資源については、芝浦港南地区の地域資源の中には、もっと他地域に知られていてもよいような潜在的利用可能性が高い資源がある。

機械産業の発祥地である点、明治の一大行楽地だった歴史、運河地域としての発展の歴史、食肉市場の存在などである。

これらの資源は、いずれかの要素を地域ブランドとして大きく今後クローズアップさせることが可能なものである。しかし、上手に地域ブランドとして売り出さないと、地域イメージの向上につながらない危険性もある。運河地域としての発展の歴史は客観的には芝浦港南地区の形成にとって極めて重要だったことであるが、そのために当地域のイメージが悪化したという根強い考えがある。ダサまち街、荒っぽい街のイメージが運河と港湾の物流産業とその従事者の気風から生まれたというわけである。ウォーターフロントとして注目が集まり、超高層マンションができておしゃれな街にせっかく生まれ変わったのに、以前の余り品の良くない地域イメージを払拭するためにはそうした歴史は忘却のかなたに追いやっておくに限るとする考え方も確かに成り立つ。特に の役割を重視した対外的イメージづくりの地域ブランド戦略からはそうであろう。

しかし、 の役割を重視する地域ブランドの考え方からは、むしろ、積極的に地域の歴史と文化のいわれ、由来を再発見する方向での取り組みが重要となる。個々人にとって自分を知るためには、両親や先祖がどこからやってきてどのような生活をしてきたかを探ることが重要であるのと同様に地域の生活や文化を知るためには地域の歴史を探り再発見することが重要であり、そうした取り組みが地域アイデンティティの確立やコミュニティの

形成に役立つのである。

解体が決まった旧芝浦見番である協働会館について住民から保存運動が起こり、その結果、解体が中止され、港区の文化財に指定されるまでになったという経緯は、歴史資源を
の役割を重視して地域ブランド化させようとする地域住民の意思を表していると考えられよう。

そうした観点からは、旧芝浦見番の建物を残し、コミュニティ施設として再活用するばかりでなく、旧芝浦見番を生んだ芝浦花柳界の歴史、その前提となった明治の芝浦海岸リゾートの歴史を再発掘し、関連する遺産や事跡を再構成して地域ブランドとして活用する試みが重要となる。

同様のことは、江戸時代以来の漁業の歴史などについてもあてはまる。

３．バイエリアブランドの創出のために

これまで、芝浦港南地区の地域資源を洗い出し、当地区の歴史や現状の中で各地域資源を捉え直し、さらにそれら地域資源の将来の活用可能性と地域ブランドの役割に応じた地域資源の評価のあり方について、まとめてきた。

しかし、本報告書のまとめはあくまで第３者的な観点からの整理に過ぎない。個々の地域資源の中で住民の観点からは本来欠かせないものが落ちている可能性もある。また、芝浦港南地区の多彩な地域資源のすべてについて地域ブランドとして活用することは不可能であり、おのずから優先順位と取捨選択が必要である。

第１章で整理したように地域ブランド戦略自体にも様々な側面があり、芝浦港南地区においては経済的な役割よりも地域アイデンティティやコミュニティづくりに果たす地域ブランドの役割が重要になっていると思われる。

こうした理由により、本報告書で提示した地域資源と地域ブランドの整理は、あくまで、今後取り組まれる住民の手によるバイエリアブランド創出のあくまで参考資料に過ぎないものと考えられる。

芝浦港南地区の有する地域資源の多くの可能性のうちいずれを選択し、どのような方向に開花させていくのかはまさに住民そのものの運動として展開されるものとなろう。

【参考資料】

1. 文献（アイウエオ順、著者名のあとのカッコは出版年）

（ア行）

- ・岩下尚史（2007）「名妓の資格 細書 - 新柳夜咄」雄山閣
- ・上村敏彦（2008）「東京 花街・粋な街」街と暮らし社

（カ行）

- ・菅野俊輔（2010）「古地図と名所図会で味わう 江戸の落語」青春出版社（新書）

（サ行）

- ・獅子文六（1965）「芝浦」（週刊朝日 1965.10～1966.1 連載のエッセイの一篇）（谷川健一編「日本の名随筆別巻 27 地名」作品社、1993 年）
- ・芝浦一丁目町会（1992）「変わりゆくわが町 芝浦一丁目町会七十周年史」
- ・芝浦商店街（2000）「創立 30 周年 芝浦商店街のあゆみ」
- ・「新撰東京名所図会第三十三編」明治 35 年 1 月 25 日発行（宮尾しげを監修「東京名所図会・芝区の部」睦書房、1969 年）
- ・小学館（2005）「日本語源大辞典」前田富祺監修、小学館、2005 年
- ・陣内秀信（1992）「世界の都市の物語 1 2 東京」文芸春秋
- ・陣内秀信（2007）「身近な都市の水辺に夕暮れ文化を～大東京、水辺空間の変遷～」(ミツカン水の文化センター機関誌「水の文化」第 27 号、2007 年 10 月)
- ・鈴木理生（1989）「江戸の川・東京の川」日本放送協会 1978 年、再版井上書房 1989 年
- ・鈴木理生（1991）「幻の江戸百年」ちくまライブラリー 57、筑摩書房
- ・鈴木理生編著（2003）「図説江戸・東京の川と水辺の事典」柏書房

（ナ行）

- ・日本地誌研究所（1967）「日本地誌 7 東京都」二宮書店

（ハ行）

- ・原信田 実（2007）「謎解き広重「江戸百」」集英社新書
- ・平凡社大百科事典、CD-ROM《世界大百科事典 第 2 版》1998 年

（マ行）

- ・港区（2009）「第 27 回港区世論調査」（港区総合経営部区長室、港区 HP にもデータあり）
- ・港区教育委員会（1966）「海岸の歴史と風俗 港区の文化財・第 2 集」
向山勤弥「港湾」、中村鎌次「芝浦の風俗（その 1）」、細川啓三「芝浦の風俗（その 2）」、志水正司・俵元昭「漁業の歴史」など
- ・港区教育委員会（2006）「港区の歴史的建造物 - 港区歴史的建造物所在調査報告書」
- ・港区教育委員会（2006a）「増補写された港区 2（高輪地区編）」
- ・港区産業・地域支援部（2009）「まち探訪ガイドブック 2009」

- ・港区芝浦港南地区総合支所（2009）「港区基本計画・芝浦港南地区版計画書」
- ・港区芝浦港南地区総合支所「芝浦港南地区情報誌：べいあっぷ」年4回発行
- ・港区立港郷土資料館「港区文化財めぐり」コース」
- ・森崎次郎（1996）「港区俳句風土記」

2．その他

- ・芝浦商店街HP「芝浦の歴史」<http://www.shibaura-shoutenkai.com/history/index.html>
- ・港区HP（統計）<http://www.city.minato.tokyo.jp/joho/tokei/index.html>
- ・芝浦運河まつりHP <http://www.shibaura-canal.net/shusai.html>
- ・DVD「カルガモプロジェクト～カルガモの赤ちゃん誕生～」(映像：認定NPO法人海塾、企画：芝浦港南地区総合支所、制作：みなとケーブル、2009年3月)
- ・DVD「芝浦港南地区歴史探訪 “芝浦 海岸二・三丁目 港南 台場” 語り継ぐ人とまち」(港区芝浦港南地区総合支所、2008年制作)

【参考】 地域ブランド創出の類似事例

- A 「餃子のまち宇都宮」のブランドづくり（栃木県宇都宮市）
- B 地域アイデンティティ創出のための観光振興（千葉県浦安市）
- C 運河のにぎわいづくり（東京都中央区月島地域）
- D 世界の運河都市ベネチア（イタリア共和国）

A 「餃子のまち宇都宮」のブランドづくり

1 類似事例として取り上げた理由

(1) グルメ（食品）で地域ブランドを作り上げた都市であること

本報告書、第 部、第 5 章で述べたように（82 頁）芝浦港南地区にもグルメ系の地域資源（潜在的な資源）がある。例えば、台場エリア、品川駅港南口、田町駅前などでの飲食店の集積、品川駅港南口の食肉市場・芝浦と場の存在、江戸時代における「芝海老・芝煮」の発祥の地という歴史など、グルメ系の地域ブランド創出の可能性を含んでいる。

宇都宮市は、活動開始から約 10 年で「餃子のまち宇都宮」のブランド化に成功した例として知られており、さまざまな書籍で紹介されているが、その経験を学ぶことは芝浦港南にとっても有益である。

(2) 行政・事業者組合・商工会議所が協力して地域ブランドづくりに成功

「餃子のまち宇都宮」のブランド化で重要なことは、最初は市役所職員の発案で始まった餃子でまちおこしが、市役所、事業者組合（「宇都宮餃子会」）、市商工会議所の連携協力によって拡大し、地域ブランド化に成功したことである。事業者組合の設立や、この三者の連携協力は芝浦港南においても学ぶに値すると思われる。

2 取組みの経過

(1) 活動の開始と展開

1990 年 12 月、宇都宮市の職員研修の際のグループ研究で、市の職員が、総務省統計局の実施した家計調査で、家庭における餃子の消費金額は宇都宮市が日本一であることに気づき、「餃子を通して宇都宮の名を P R する方法」を提案した。

この提案を市観光課が採用し、市内の中華料理店や餃子店を回り、1991 年 10 月には、市観光協会が餃子マップを作成した。

1993 年 7 月には、市内の 38 店が加盟して「宇都宮餃子会」（事業者の組合）が発足した。宇都宮餃子会では、イベント「ギョー！THE フェスティバル」（早食い競争）の開催や、駅弁「餃子弁当」の発売など積極的な P R 活動を展開した。特に、大きな P R 効果があったことは、テレビ東京「おまかせ山田紹介ギョウザフェスティバル宇都宮餃子大作戦」で 1993 年 10 月から 1994 年 2 月まで 7 回放映されたことである。

1994 年に 2 月には JR 宇都宮駅東口に「餃子像」を設置した。また、観光協会と餃子会が協働で餃子マップを作成した。その後、毎年 1 回のペースで作成されるようになる。さらに、海外旅行が当たるスタンプラリーなどのキャンペーンが実施された。

家計調査で、餃子の世帯あたり消費金額で宇都宮市が日本一となっているが、それには背景がある。宇都宮市には、明治時代から陸軍第 14 師団が置かれ、第 2 次世界大戦中は、餃子の本場の中国満州に駐屯していた。戦後、満州から帰国した人々が餃子を持ち帰り、地元の食材をもとに工夫を重ねていたといわれている。餃子は宇都宮市民に親しまれていた食品であったことは重要である。

総務省統計局が実施している家計調査（2008 年）によれば、家庭におけるギョウザ（餃子、ぎょうざ）の消費金額が大きい市のベスト5は、宇都宮市、浜松市、鹿児島市、宮崎市、静岡市であるが、宇都宮市が年間購入金額 4,706 円）と全国平均 1,837 円の 2.6 倍と特段に多くなっている。

市	人数 (百万人)
下松市	1,837
宇野市	1,483
三好市	1,487
津島市	1,997
桑名市	1,473
四日市市	1,743
津市	1,502
桑名市	1,561
津市	1,407
宇野市	4,706
三好市	2,449
津島市	2,119
桑名市	1,911
津市	2,041
桑名市	1,879
津市	1,938
宇野市	2,204
三好市	1,563
津島市	2,279
桑名市	1,982
津市	1,781
桑名市	1,833
津市	1,983
宇野市	2,498
三好市	1,492
津島市	1,586
桑名市	2,241
津市	2,446
桑名市	2,196
津島市	2,119
桑名市	1,516
津市	1,860
桑名市	1,835
津市	1,868
桑名市	1,979
津市	1,786
桑名市	1,575
津島市	1,344
桑名市	1,840
津市	1,881
桑名市	1,328
津市	1,669
桑名市	1,814
津市	1,538
桑名市	1,734
津市	1,375
桑名市	1,545
津市	1,556
桑名市	2,592
津市	2,604
桑名市	1,054

95

（３）ブランド化の推進、商標登録

1998 年 10 月に、市商工会議所は「提案型公募地域活性化事業」の支援金（空き店舗利用対策）によって、実験館「おいしい餃子とふるさと情報館・来らっせ」を開設し、餃子会が出店した。元イタリアンレストランであった空き店舗を商工会議所が借りて、一階は物産館、二階は餃子会が運営する「来らっせ」としたものである。

1999 年 11 月には、餃子会、観光協会、商工会議所、日野町商店振興組合による「第 1 回うつのみや餃子まつり」が開催され、2 日間で 2 万人が来場する。これより毎年 1 回実施されるようになる。

2000 年 5 月には、「宇都宮餃子」の商標登録を申請し、翌年 7 月に商標登録を取得した。2001 年 2 月には宇都宮餃子会は協働組合として認可された。

（４）現状

2002 年 7 月には、池袋のサンシャインシティにある「餃子スタジアム」(ナムコナンジャタウン)内に宇都宮餃子を紹介するアンテナショップ「東京来らっせ」を開店させ、活動の場を広げている。

2003 年には、宇都宮餃子会体験バスツアー（ＪＴＢ）が開催された。2005 年から「宇都宮餃子の食べ歩きツアー」を読売旅行・西武バス等と契約して首都圏からバス観光客を誘致し、来客数 6300 人、売り上げ金額 1,000 万円の成果をあげた。また、2005 年の餃子祭りの来場客数は二日間で 7 万人となった。

3 課題と今後の展開

「宇都宮餃子」はこのような経過を経て地域ブランドとして確立したが、さらに、餃子という一業種だけでなく他の産業に結びつけて、まち全体の活性化に向けた努力が進められている。宇都宮市には、全国優勝や女性日本一となったバーテンダーが 10 名以上おり、宇都宮カクテル倶楽部もあること、また、ジャズの生演奏を楽しめるお店が 10 店以上あることなどから、「カクテルの街」「ジャズの町」を PR しブランド化して、餃子との相乗効果を図っている。

【参考文献】

「秘訣は官民一体 ひと皿 200 円の町おこし 宇都宮餃子はなぜ日本一になったか」

五十嵐幸子著、2009 年 2 月発行、小学館 101 新書

「地域ブランドと産業振興 - 自慢の銘柄づくりで飛躍した 9 つの市町村」

関満博・及川孝信編、2006 年 5 月初版第 1 刷発行、新評論

ホームページ「宇都宮餃子」

ホームページ G I A C 地域・産業活性化事例データベース

ホームページ 社会実情データ図録

B 地域アイデンティティ創出のための観光振興（浦安市）

1．類似事例として取り上げた理由

浦安市には東京ディズニーランド・ディズニーシー（TDR：東京ディズニーリゾート）が舞浜地区に立地し、2500万人の集客力を示している（2007年度）。これは、国内第2位のユニバーサル・スタジオ・ジャパンの854万人の約3倍となっており、浦安市は国内随一のけた外れの観光拠点となっていることを示している。

こうした中で浦安市は市の観光振興計画を策定したが、その内容は、TDRと相乗効果を持った新たな観光開発を行い、更なる入れ込み客の増加を図るというものではなく、むしろ、旧来の漁師町を再発見するといった地味なものである。「市民が楽しめる観光」「市民の手による浦安の魅力発見」といった方向は、対外的な誘客による経済効果と言うより、市民参加による新たな地域アイデンティティの創出を主眼としており、そうした意味で、今後の芝浦港南地区の地域ブランドづくりの趣旨と響きあうものをもっているといえる。これが浦安市の事例を取り上げる理由である。

2．浦安市の概要

（1）沿革

浦安は山本周五郎の「青べか物語」で描写されたような古い漁師町であったが、1971年に漁業権を全面放棄してから、海面の大規模な埋立が行われた。1968年に6.77平方キロだった市域は1981年には16.98平方キロへと2倍以上に拡大した。1983年には、東京ディズニーランドが開業した。

浦安市の地区構成

市内各地区	由来	大字
元町地区	古くからの浦安町域	北栄、当代島、猫実、富士見、堀江
中町地区	第1期埋立地（1962年 - 1975年）	今川、入船、海楽、鉄鋼通り、富岡、東野、弁天、舞浜、美浜
新町地区	第2期埋立地（1975年 - 1981年）	明海、高洲、千鳥、日の出、港

(2) 住民

2005 年国勢調査によれば、人口は 155,290 人である。2000 年国勢調査からの人口増加率は 16.8%と高い率を示している。日本の市町村の中で最も平均年齢の若い市町村でもある。

地区的には、新町地区の開発が終息すると元町と新町の地区格差が一層拡大するのではないかと懸念されている。元町は木造住宅が密集し、道幅も狭く、必ずしも住み易いとはいえない。新町の高齢化率が 5%以下であるのに対し、元町は 18%に達する。元町から新町へ移住する者が出て、元町が衰退する可能性がある。

3 . 観光振興の方向と実施内容

(1) 浦安市観光振興のねらい

元町の低迷に対して、市や商工会議所が着目したのが漁師町の風俗を引き継いでいる元町の文化である。この文化の魅力を高めることによって元町の社会的・経済的な活性化を図ることが浦安市の観光振興のねらいである。

浦安市は 2008 年 3 月に「浦安市観光振興計画 水辺で輝く浦安の観光まちづくり～市民も楽しめる観光の実現～」を策定した。この計画の考え方もこの線に沿っている。

(2) 短期重点プロジェクト

浦安市観光振興計画が 2008～2010 年までに取り組むとしている短期重点プロジェクトは以下のような内容である。

水辺空間の魅力アップと体験の充実を図る事業

- ・「カフェテラス in 境川」の実施、市民参加による境川のクリーンアップ事業
- ・ 境川と旧江戸川・三番瀬を活用した体験プログラム

生活文化の掘り起こしと観光面での活用を図る事業

- ・「ご当地検定 浦安観光マイスター」認定
- ・ 浦安の名産品開発の検討

気軽に立ち寄り、めぐって楽しめる都市環境の整備を推進する事業

- ・ 鉄鋼団地の工場見学や水産加工の現場見学、フィルムコミッションの推進
- ・ 主要道路・交差点に愛称、標識類整備、魅力的なまちなか散策コースづくり

旬の情報発信と新しい都市イメージの定着を目的とする事業

- ・ 交流型イベントの創出（市内外への情報発信、市民同士・来訪者と市民の交流促進）
- ・ 市民によるおもてなし（「ぶらり浦安ガイド」、「もやいの会」等活動支援、「観光通訳ガイドボランティア」養成講座）
- ・ 「うらやすの魅力発見！浦安観光キャンペーン 2008」ガイドブックの作成・配布

（３）浦安観光キャンペーン 2008

上記「浦安観光キャンペーン 2008」の内容は以下である。

カフェテラス in 境川～桜まつりでひとときを！

- ・ 境川の両岸にカフェテラスを出店しスイーツのホテル対抗味比べ（市内ホテル 7 社）
- ・ 乗船体験、河川散策イベント（郷土博物館、遊魚船協同組合）
- ・ 鍋合戦（商店街連合会、浦安飲料組合）
- ・

浦安青べか物語ハイキング

- ・ JR 東日本が運営主体
- ・ 地元自治会による湯茶のサービス、出店、旧宇田川家お汁粉サービス、浦安魚市場お魚パックプレゼント

ご当地検定（物知り編）

- ・ 市民活動団体などが運営主体となって 5 択式 80 問の検定問題実施
- ・ 及び市内スタンプラリーの 3 つをクリアで「うらやす観光マイスター」として認定
- ・

投網・ベーゴマ・貝ムキ・海苔巻き体験（技あり編）

- ・ 投網保存会、郷土博物館、浦安魚市場などの協力で実施した生活文化体験イベント

うらやす周遊無料バス

- ・ 観光協会、商工会議所、東京ベイシティ交通の協力で 3～4 月土日に実施
- ・ 経費は東京ベイシティの協力、観光協会の事業費、協賛団体バス車体ラッピング広告

「浦安ガイドブック」

- ・ 10 万部製作・配布
- ・ 発行は市、編集は主として市民活動団体や商工会議所
- ・ モデルは全員市民モデル（ガイドブックやポスターのモデルを市民から公募）

C 運河のにぎわいづくり（中央区月島地域）

1．類似事例として取り上げた理由

（１）歴史的な地区と高層マンション群が共存している地域

中央区月島地域は、江戸時代からの歴史のある佃などがあると同時に、近年、高層マンション群が建設された埋立地があるなど、芝浦港南地域と地域の状況が類似している。

また、明治時代から昭和時代に造成された埋立地によって島状に地区が構成されていること、晴海埠頭という港を有すること、戦後、埋立地が米軍に接収されていた歴史があることなど地域の状況が類似している。

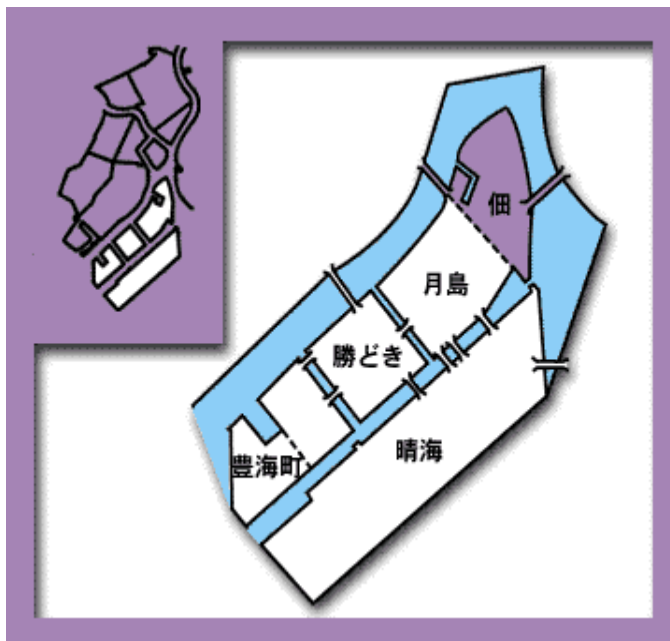
（２）「運河ルネサンス推進地区」に指定されていること

東京都港湾局は、「東京の水辺空間の魅力向上に関する全体構想」に基づくひとつの施策として「運河ルネサンス（事業）」を開始しました。平成 17 年 3 月に「運河ルネサンスの推進方針」を定め、平成 17 年 6 月に「芝浦」と「品川浦・天王洲」の 2 地区を運河ルネサンスの推進地区に指定した。

平成 18 年 3 月に、月島と晴海の間を流れる朝潮運河が「運河ルネサンス推進地区」に指定された。運河を活用したまちづくりを進めていることも芝浦と類似している。

中央区全体

月島地域の図



2 地域の特徴

(1) 月島地域の現状

月島地域は隅田川、月島川、朝潮運河、新月島運河、晴海運河などで区分された 4 つの島からできており、町名でいうと佃、月島、勝どき、豊海町、晴海となっている。

街の様子は、佃や月島のように、長屋風の木造家屋や狭い路地、佃煮やもんじゃ焼きのある商店街というような下町情緒を残すまちと、大川端リバーシティ 21 等の高層マンション群や晴海アイランド・トリトンスクエアなどの現代化したまちの二つが混在している。工場や倉庫などの跡地が住宅地となり、また密集市街地の再開発など開発は現在も進行中である。

人口は急速に伸びており、平成 21 年 4 月 1 日現在の月島地域 51,664 人で、中央区全体の人口 (115,008 人) 約 45% を占めている。

(2) 地域資源

朝潮運河

晴海と佃・月島、勝どき、豊海町の間にあるのが朝潮運河である。

埠頭、橋

晴海客船ターミナル(晴海埠頭)、豊海水産埠頭、中央大橋、佃大橋、勝鬃橋などがある。

現代的な複合施設として晴海アイランド・トリトンスクエア

第一生命ホール

歴史的資源

住吉神社、佃煮発祥の地

「もんじゃ焼き」(西仲通り商店街)

月島のもんじゃ焼きは多くの人に知られており、西仲通り商店街はもんじゃストリートとも呼ばれ、観光客でにぎわう地域ブランドになっている。もんじゃ店は 75 店あるといわれている。

温浴施設、スポーツ施設

温浴プラザ「ほっとプラザはるみ」、月島スポーツプラザ、月島運動場、晴海運動場



3 運河ルネサンスの推進

東京都港湾局の運河ルネサンスの推進地区に指定されたが、そこで次のような「運河ルネサンスの推進方針」を決めている。（東京都港湾局のホームページより）

（１）水上施設の立地に関する方針

朝潮運河周辺の個性あふれる水辺の魅力や地域のにぎわいの創出に寄与する施設を立地する。立地を推進する地域は、水上レストラン、水上カフェ、水上レストラン、水上ラウンジ等飲食施設。観光さん橋、船客待合所、レクリエーションボート乗り場、休憩所

（２）施設の整備に関する方針

下町情緒あふれるまちと近代都市化が進むまちの魅力に、朝潮運河という新たな資源を付加し、地区全体の回遊性を確保する。そのために、運河沿いの護岸や遊歩道の整備を推進する。

水上バスや屋形船が発着できるスポットの創出は、他地区との連携を含めた水辺のネットワークを考慮する。

新しく整備する観光さん橋などの施設は、災害時の利用に配慮した計画とする。

（３）地域の交流活性化に対する支援の方針

一時的なイベント当には、関係期間当との調整のうえ、航路内巣意識も利用できることとし、イベント等の運営が円滑に行われるよう支援をする。

運河を活用したまつりなどのイベントに際しては、ホームページなどでPRするなどの後援活動を行う。

平成 18 年 3 月に運河ルネサンス推進地区の指定を受けたときに策定した推進方針が、どのように実現され、現状はどうなっているかについて、ホームページでは把握できないため、今後、ヒアリング等の調査を行う必要がある。

【参考文献】

中央区ホームページ、中央区観光協会のホームページ

晴海地区運河ルネサンス連絡会ホームページ

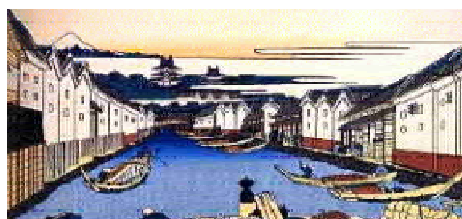
東京都港湾局ホームページ

運河ルネッサンスとは..

運河のかんたんな**歴史**

江戸時代、運河は、人々の生活にかかせないものとして、活気にあふれていました。人々は、舟で物を運び、舟で移動し、舟の上で遊んだものでした。

戦後のわが国の経済成長期には、東京港の貨物量は急増し、運河は港から内陸への物資輸送に欠かすことのできない水路として、東京の発展に重要な役割を果たしてきました。



1800年頃の
隅田川下流
(江戸湾)
東芝みなと館資料

運河の**現状**は...

近年、東京港に着いた貨物を陸域へ運ぶ手段としては、トラックなどの陸上輸送が主流になりました。それに伴い、舟輸送量は低下し、運河の利用は大幅に減少しています。

また、そのような産業構造の変化が進むにつれ、運河周辺の土地利用も、工場や倉庫などの産業基盤としての利用から、オフィスやマンションなどの都市的利用へと変化してきています。

運河の新たな**可能性**

世界的な水辺都市として名を馳せるベニスやアムステルダムなどにおいては、観光の目玉として運河が世界中から多くの観光客を引き寄せています。このことは、都市の中の運河には観光資源としての大きな魅力があることを物語っています。

現在東京都では、千客万来の世界都市・東京を目指して観光まちづくりを推進しているところですが、東京の運河も観光資源として大きな可能性を秘めています。

運河ルネッサンスの推進

このような背景により現在港湾局では、利用の低下した運河や利用形態が変化している周辺の土地などの水辺空間を、観光・景観・回遊性などを重視した魅力ある都市空間として再生させる取り組みとして**運河ルネッサンス**を推進しています。運河の役割に観光資源という視点を取り入れ、新たな運河利用や周辺環境の整備を推進し、水辺の魅力を向上していきます。

運河ルネッサンスとは、こんな取り組みです

運河ルネッサンスは、地域が主体の取り組みです。

地域の町会、商店会、企業、民間事業者、NPOなどの団体が集まり、みんなで運河の活用方法、運河を利用したイベント、運河上に設置したい施設などについて話しあう地域協議会を設立します。

東京都は、その取り組みを推進するために、次のような支援を積極的に行っていきます。

■今まで港湾関連事業者などに限定していた**水域占用許可**を**規制緩和**します。

→ 運河で**水上レストラン**や**観光さんばし**などが設置可能になります。

→ 観光さんばしが出来ると、運河で**カヌー**や**ボート**などが楽しめるようになります。

■運河まつり、運河クルーズなどのイベントに**運河沿い遊歩道**や**防災船着場**などをお貸しします。

また、開催に伴う**手続きの簡素化**、イベントの**PR**などでイベント運営を支援します。

みなさんの**創意工夫・新しいアイディア**で東京の運河は変わります！みんなで楽しい運河を作りましょう。東京都は運河の魅力を向上させ、にぎわいを創出する取り組みを全面的に支援します。

D 世界の運河都市 ベネチア（イタリア共和国）

1．類似事例として取り上げた理由

芝浦港南地区は、「運河都市」である点に最大の特徴があり、地域をまるごと「地域ブランド」として捉える場合はこの点に着眼する必要がある。そこで運河都市の先行事例として世界最大ともいえるべき都市ベネチアを取りあげる。なお都市名としてベニス、ヴェネツィア等の表記もなされるがここでは基本的にはベネチアで統一する。

運河には大きく大別して河川運河と埋立運河とがある。前者は輸送手段や交通手段として既存の河川を利用し、あらたに河川を付け替え、あるいは新設して運河網を整備したものであるのに対して、後者は、本土から遠くない浅瀬に埋立地をつくり、その際、輸送手段や交通手段として運河を残した結果、出来上がった運河である。

前者の例は数知れず、また、前者と後者の混合例は江戸そのものなどがあるが、既存河川を利用した訳ではない純然後者のパターンの運河都市はそれほど多くない。その中でもベネチアは、ゲルマン侵攻やフランク王国の侵略から独立を守るため、アドリア海の最深部、ベネチア湾にできた潟「ラグーナ」の上に築かれた水の都であり、世界で最も良く知られた埋立運河都市である。ベネチアに関しては、地域特性の記述として 118 の島が 400 の橋でつながっていると記載されるが、こうした記載方法で地域が丸ごと捉えられる地域は芝浦港南地区以外にはないといってもよい（芝浦港南地区は島は 10 前後、橋はレインボーブリッジを含め 39）。

ベネチアは、都市としての存在そのものの他、歴史資源、まつり・イベント、建物、出身者、商業施設、産業等、地域ブランドの巨大な集積物のような存在であるが、これらのポイントを記すことによって、芝浦港南地区の今後の地域ブランドづくりの参考とする。

本編でウォーターフロントの歴史を整理した際、陣内秀信法政大学教授の論文等を参照したが、陣内氏はもともと大学院の頃、ベネチア建築大学に留学し、イタリア・建築史を専門としている。同教授が芝浦港南地区にも着目しているのはベネチアとの類似からという理由が大きいと思われる。陣内氏のベネチアに関する著書としては、「都市のルネサンス」中公新書（1978）、「ヴェネツィア - 都市のコンテクストを読む」鹿島出版会（1986）、「ヴェネツィア - 水上の迷宮都市」講談社現代新書（1992）などがあるが、ここでは、最後者を主たる参考書とした。この他、陣内秀信「ベネチア」平凡社大百科事典（1998 年）も参照した。

2. 都市の概要

ベネチア本島の人口は約 6 万人（ベネチア全体で 27 万人、ベネチア共和国全体で 210 万人）、面積は約 11 平方キロ、観光入れ込み客 2000 万人。芝浦港南地区は人口 4.4 万人、面積 4.76 平方キロなので、ベネチア本島と都市規模的にはそれほど遜色はない。経済規模は不明だが、恐らく、芝浦港南地区の方が大きいだろう。

「ベネチアの表玄関は、もともと潟の水面に開かれ 2 本の大円柱を構えたサン・マルコの小広場（ピアツェッタ）であったが、近代に本土（テラフェルマ）との間に鉄道橋（1846）と自動車橋（1932）が建設されたために、都市構造が大きく転換し、北西部の鉄道駅と自動車のターミナルが町の新たな玄関となった。しかし、今なお町の中には車はいっさい侵入せず、陸上は完全に歩行者に開放されている。」（陣内 1998）本土に住んで鉄道橋と自動車橋を通り本島に通う通勤者も多い。

1987 年に世界遺産（文化遺産）に指定された。ベネチアの別名は、「アドリア海の女王」「水の都」「アドリア海の真珠」。

水都としての存在感から世界各国の都市が「のベネチア」と呼ばれている。以下に一覧表を付したが、地形上の成り立ちの上で芝浦港南地区より類似性の高い都市はないといつてよい。

都市名	のベネチア	国	命名の理由
コルマール	アルザスの小ヴェニス	フランス	古都という共通性のみ
ストックホルム	北欧のヴェネツィア	スウェーデン	14 の小島をつないだ都市で運河が面積の 3 割を占めることから
サンクトペテルブルグ	北のヴェネツィア	ロシア	市街がネヴァ川河口デルタの島々と両岸に広がり運河網が発達しバルト海において重要な港市の位置をしめていることから
堺	東洋のヴェニス	日本	イエズス会の宣教師ガスパル・ヴィレラ、ルイス・フロイスが、当時の堺を富裕な自由都市、貿易都市という意味で「東洋のベニス」と読んだことから。地形上の命名ではない
蘇州	東洋のヴェネツィア	中国	北京と杭州を結ぶ京杭大運河が通るほか旧市街地及び周辺の水郷地帯を含め運河による水運が生活に溶け込んでいることから
淡水	台湾のヴェネツィア	台湾	かつて台北の外港であった淡水河が海に注ぐ河口の風光明媚な街であることから
サンアントニオ	アメリカのヴェニス	米国	アラモ砦で名高い米国テキサス州の大都市であるが市街に設けられたリバー・ウォーク（川沿い遊歩道）の存在により

なお、ベネチアは以下の都市と姉妹都市となっている。

サラエヴォ（ボスニア・ヘルツェゴビナ） タリン（エストニア） 蘇州（中国） イスタンブル（トルコ）

3．地域ブランドの構成要素

（１）歴史

ベネチアの歴史についてはここでは詳しく記述できないが、5～6世紀に町の起源があり、9世紀初めフランクの脅威を避け、本島に運河都市を形成、サン・マルコを守護聖人とした。独立的な商業都市として長く繁栄し、15世紀後半にはキリスト教世界でも屈指の海軍力をもつ都市国家となったが、15世紀半ばのオスマン帝国の進出により、海外領土が奪われ最盛期は終わりを告げた。それまでベネチアが東方貿易を独占していたのに、15世紀末のコロンブスやバスコ・ダ・ガマによる大航海時代の到来によって世界商業の中心的地位をリスボンに奪われたことも大きい。1897年ナポレオンに占領されるまでの1000年間共和制を維持した。日本人が最も多く読んでいるベネチアの歴史は、塩野七生「海の都の物語 ヴェネツィア共和国の一千年」中央公論社（1981年）であると思われる。

（２）都市構造

ベネチア本島での都市づくりでは「軟弱な潟の土地でも、カラマツやカシの杭を地中の堅い層まで打ち込み、その上にイストリア産の石を置く独特の土台を開発したことにより、水から直接立ち上がる建物が可能となった。（中略）14,15世紀には、アルプス以北からもたらされたゴシック芸術がこの町の東方的な装飾性の中で華麗に展開し、独特のベネチア・ゴシック様式を生み出した。（中略）この時代にベネチアの建設活動は黄金期を迎え、高密度で有機的な都市を築き上げた。カンポを中心にカッレ calle(小路)で細かく組み立てられた中世的都市構造、明暗の変化に富んだ華麗な町並みの特徴はこの時期にほぼ形成された。」（陣内 1998）

（３）人物

マルコ・ポーロ（1271年ベネチアを出発、24年後に帰還） アントニオ・ヴィヴァルディ、ジャコモ・カサノヴァ

（４）お祭り・イベント

ベネチアではお祭り・イベントが盛んであるため祝祭都市とも称される。「祝祭都市の伝統を受け継ぐこの街では、毎日のように祭りやイベントがあるから、そこへ顔を出し挨拶する市長は、ハンサムでないととても務まらない。現在のベルガモ市長もなかなかの美男だ。」（陣内 1992）

祭礼暦

以下のようなお祭りが毎年行われており、観光客も多く集まる。

祭礼名	月	内容
カーニバル（謝肉祭）	2月～3月	ベネチアが発祥の「仮面舞踏会（マスカレード）」が催される。
海との結婚	5月	この海に町を築いた人々が、海と運命を共にすることを誓い、その証に海へ黄金の指輪を落とし、盛大に祝うお祭り。1991年市民レガッタと一体化（市民レガッタは1974年に市民の間から自発的に起こったイベント）。1991年には658隻の舟が参加。
レデントーレの舟祭り	7月	ペスト沈静化記念が起源
レガータ・ストーリカ(歴史的レガッタ)の祭り	9月	4種目の競技が開催
スルーテ教会の祭り	11月	ペスト沈静化記念が起源

ヴェネツィア国際映画祭

毎年8月末から9月初旬に開催される国際映画祭。カンヌ国際映画祭・ベルリン国際映画祭と並ぶ世界三大映画祭のひとつで、世界最古の歴史を持つ（1932年開始）。黒澤明監督「羅生門」が1951年に金獅子賞を受賞するなど1950年代に多くの日本映画を世界に紹介した。

ヴェネツィア・ビエンナーレ

1895年から開催されている現代美術の国際美術展覧会。二年に一度、奇数年に、6月頃から11月頃まで開催されている。ビエンナーレとはイタリア語で「二年に一度」を指す。国同士が威信をかけて展示を行い賞レースをすることから、「美術のオリンピック」とも称される。ビエンナーレには美術部門だけでなく、映画部門・建築部門・音楽部門・演劇部門・舞踊部門がある。毎年ヴェネツィアで開催されているヴェネツィア国際映画祭と国際演劇祭、美術と同じ会場で偶数年に開催されている国際建築展覧会・ヴェネツィア建築ビエンナーレ、フェニーチェ劇場で行われる国際音楽祭（ヴェネツィア国際現代音楽祭）、国際舞踊祭（コンテンポラリー・ダンス国際フェスティヴァル）もヴェネツィア・ビエンナーレの一部である。

（５）サン・マルコ寺院

街のシンボルとなっているのはサン・マルコ寺院である。ベネチアは自前の聖人をもつため聖マルコの遺骸をアレクサンドリアから盗み出し、こっそり運び込んで礼拝することになったもの。

（６）運河水運

主要な運河は「カナル」、一般運河は「リオ」と呼ばれる。

水運の手段としては、観光目玉となっているゴンドラの他、数系統の水上バス（バボレット）、個人の舟（商売用、レジャー用）、トラゲット（カナル・グランデの兩岸を結ぶ渡し船）、ブルキエッロ（本土ブレンタ川ヴィッラ（別荘）巡り遊覧船）などがある。

ゴンドラについては、ヴェネツィア共和国時代に費用削減法が実施され、黒の塗装を義務づけられることになった。それが習慣となり、法律が無効になってからも現在に至るまでゴンドラは黒に塗装されている。ゴンドラ製造は 19 世紀の終わりまで発展し続けたが、それ以降ヴェネツィアでもモーターボートがゴンドラに取って代わりつつある。

（７）飲食料品

リアルトの魚市場には地元ラグーナ（潟）の漁業者がとる種類の豊富な魚や海が売られている。ボンゴレ、イカスミ、海老、小魚、モエッキ（やわらかいカニ）等々。

ラグーナの地元でとれるアーティチョーク（朝鮮あざみ）のカストラウーラも春を告げる珍味として名高い（塩水を吸って育つので特有の風味）

独特の飲物としてフラゴリーノ（少し甘いワイン）、プロセッコ（白ワイン）、トルボリーノ（秋、11 月頃、並ぶその年のワインの一番絞り）がある。

（８）場所

レストラン・飲食店

運河沿いにレストラン、カフェが立ち並ぶ。

レストラン・居酒屋としてはコルテ・スコンタ（隠れた中庭）というだいたい表から隠れた地元の人々に人気の魅力的なレストランが有名な他、マルヴァジーア（横丁居酒屋）、マカゼン（ワイン店）、トラットリア（軽食堂）などがある。

サン・マルコ広場など広場のまわりを飾るカフェテラスは水の都の華麗さを印象づけるものとなっている。カフェは、西洋ではじめてトルコ人の間で流行していたものをベネチアが導入したものである（1638 年）。

植栽・飾り付け

秋になると運河に面した貴族の住宅の紅葉が美しい。

カンポ（広場）の植栽は、当初、果樹園だったのが中世後期に人工広場に変化し、再度最近樹木を植えるようになって成立したものである。

地区毎の飾り付け、夜の電飾などは、商店街としてのまとまったデザインを示している。

リアルト市場

市民の台所となっている野菜、魚、肉の市場としてリアルト市場がにぎやかである。この他、今はレストラン街などになっているが、「ワイン河岸」「鉄河岸」「石炭河岸」などの

地名にかつての水運はなやかなりし頃の名残がある。

娼妓地帯の名残

全世界の船員、商人を対象としたオステリア（旅館兼居酒屋）スクオラ（オステリア組合）タベルナ（居酒屋）などの歓楽街一体の跡が残っている。

カステレット（ベッドの城＝娼婦の家）ポンテ・デッレ・テッテ（乳房の橋＝娼婦街）などの跡もある。

こうした繁華街の周辺には芝居街（劇場街）もあった。

ドイツのノーベル賞作家トーマス・マンの「ベニスに死す」（1912）はヴィスコンティによる映画化でも有名な小説であるが、ベネチアを舞台に老作家の美少年への恋やコレラによる死を描いている。ドイツの謹厳な学風の社会学者として名高いマックス・ウェーバーが他人の美人妻エルゼ・ヤッフエと1910年に逢瀬を重ね愛人関係となったのもベネチアにおいてである。海に浮かぶ運河都市としての独特な雰囲気は、都市国家としての長く屈折に飛んだ歴史を知る作家や学者に精神の解放作用を及ぼしたものと認められる。

バイエリアブランドの創出に関する検討報告書

平成 22 年 3 月発行

発行 港区芝浦港南地区総合支所
東京都港区芝浦三丁目 1 番 47 号
T E L 03-6400-0017

調査・編集 株式会社 社会構想研究所
東京都港区西新橋 2 丁目 22 番 4 号
TEL 03-6430-9277